



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	タイ語における擬音語の意味拡張
Author(s)	リーラワットワッタナー, ナットワラー
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(文学)
Issue Date	2026-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99255
Type	master thesis
File Information	masters_thesis_natwara.pdf



令和7年度修士論文
タイ語における擬音語の意味拡張

北海道大学文学院人文学専攻言語科学研究室
指導教員：野村益寛
学生番号：13243079
氏名：リーラワットワッタナー・ナットワラー

目次

略号一覧.....	3
1. はじめに.....	4
1.1 研究背景.....	4
1.2 研究の目的.....	7
1.3 本研究の構成.....	7
2. 本研究の理論的背景および先行研究.....	9
2.1 本研究の理論的背景.....	9
2.2 オノマトペの多義性に関する先行研究.....	12
2.2.1 共感覚・多感覚に基づくオノマトペの多義性分析.....	12
2.2.2 ICMに基づくオノマトペの多義性分析.....	13
2.2.3 予期的認知と痕跡的認知に基づくオノマトペの多義性分析.....	14
2.2.4 フレーム意味論に基づく擬音語の多義性分析.....	15
2.3 Akita (2013) と游 (2014) の基準に関する問題点.....	18
2.4 タイ語における擬音語の意味拡張に関する問題点.....	26
3. オノマトペの定義とその有標性およびタイ語におけるオノマトペの形態的・統語的 特徴.....	28
3.1 オノマトペの定義とその有標性.....	28
3.2 タイ語における擬音語の音韻形態的・統語的特徴.....	33
3.2.1 タイ語における擬音語の音韻形態的特徴.....	33
3.2.2 タイ語における擬音語の統語的特徴.....	36
4. 研究内容.....	48
4.1 本研究の分析対象.....	48
4.2 研究方法.....	52
5. タイ語における擬音語の意味拡張の分析結果.....	57
5.1 擬音語の意味拡張を規定する要因 (Akita 2013; 游 2014) とタイ語における擬音語の意 味拡張.....	57
5.2 タイ語の擬音語の意味拡張に関与する他の可能性.....	74
5.3 タイ語の擬音語の拡張先.....	82
5.3.1 音源.....	83
5.3.2 類別詞.....	85
5.3.3 様態.....	86
5.3.4 心理状態.....	89

5.3.5	動作	92
5.3.6	音源の状態	95
5.3.7	強意語	97
5.3.8	各フレームとその拡張先のまとめ	100
6.	結論	102
	謝辞	105
	参考文献	107
	付録	111

略号一覧

ADVLZ	副詞化 (adverbializer)
CAUS	使役標識 (causative)
CLF	類別詞・助数詞 (classifier)
CONT	継続相 (continuous)
COP	コピュラ (copula)
GEN	属格 (genitive)
INFER	推量 (inferential)
NEG	否定 (negation)
NMLZ	名詞化 (nominalizer)
ONM	音や声を表すオノマトペ (onomatopoeia)
QUOT	引用節 (quotative clause)
PASS	受動態 (passive)
PFV	完了相 (perfective aspect)
PRT	談話標識 (discourse particle)
PROG	進行相 (progressive aspect)
REL	関係節 (relative clause)

1. はじめに

オノマトペは豊富な意味情報を有している語彙群である。例えば、当時の人々にとって聞き慣れない、新しいことばである「原子爆弾」を「ピカドン」というオノマトペによって、原子爆弾が放つ強烈な閃光（ピカ）と衝撃的な爆音（ドン）を鮮明に描写することができる。また、「ピカドン」の「ドン」は単に爆発の音を模倣するだけでなく、爆発の勢いの強さ、衝撃の大きさまで示していると考えられる。このように、擬音語には音そのものだけでなく、それに伴う動的様態などという聴覚以外の情報を表現するものが多くみられる。そのような複数の感覚領域にまたがるというオノマトペの特性はメトニミー的な意味拡張と関連が深い¹と井上（2013）によって述べられている。また、オノマトペの豊かな意味や用法を理解するためには、メトニミーリンクやメタファーリンクといった比喩の理解の認知プロセスが必要であると呂（2004）によって指摘されている。

近年、オノマトペの意味拡張を考察するために、理想化認知モデルやフレームに基づいて分析を行う先行研究がみられ（呂 2003; 呂 2004; Akita 2013; 游 2014 など）、認知意味論の観点からオノマトペの多義性を説明しようとする試みが進んでいる。一方、タイ語²ではオノマトペに関する研究が非常に少なく、特に擬音語の意味拡張について取り扱った研究が見当たらない。また、他の言語を対象とした先行研究の主張がタイ語に適用できない点がある。そのため、本研究では認知言語学の観点からタイ語における擬音語にみられる意味拡張の考察し、擬音語の意味拡張の起こりやすさの要因を明らかにすることを試みる。

1.1 研究背景

オノマトペは、繊細かつ微妙なニュアンスを描写し、事象の複数の側面を表現するため、「小さな文」（Microscopic sentences; Diffloth 1972: 444）と呼ばれることもある。例えば、「ズルズル」は啜り音という聴覚的情報の他に、箸で麺を早く啜る様子という視覚的情報が含まれており、その音と動きが同

¹ 複数の感覚領域にまたがるというオノマトペの性質は、メトニミーより異なる領域間で起こるメタファーと関わっているようにも考えられる。しかし、オノマトペが複合的に含意する音や様態などの事象の全体の中に、ある一側面が焦点化されることによって意味拡張が起きたと解釈すれば、それは同一概念領域における要素同士の部分—全体関係に基づく隣接な関係、すなわちメトニミーによる拡張であると考えられる（井上 2013: 205-206）。

² 本稿の「タイ語」は標準タイ語のことを指す。

時に生じることが一般的である（武藤 2003: 294）。そのため、むしろ片方の感覚に切り離して捉えることが難しい。つまり、多くのオノマトペは聴覚的情報を表す擬音語として働くと同時に、それに関わる情報（視覚的情報、触覚的情報など）を表す擬態語として機能しているのである³。日本語や英語、韓国語などにおいては、一つの擬音語がさまざまな多義的な用法を有することが多く報告されており（Akita 2013; 游 2014 など）、タイ語にも同様に擬音語の意味拡張があると考えられる。例えば、(1-1) に示した用例が挙げられる。(1-1a) ～ (1-1c) の *chéʔ* はそれぞれ引き金、ライター、カメラシャッターが立てる音を表す擬音語であるが、(1-1d) では、擬音語 *chéʔ* は「～する」動詞のような語尾動詞と結びつく必要がなく、直接に動詞として機能しており、「写真を撮る」という意味に拡張している。これは写真を撮るたびに、常に *chéʔ* という音が伴っているため、その音が「写真を撮る」行為を指すようになったと考えられる。また、(1-1e) では、*chéʔ* はカメラの「シャッターボタン」へと意味が派生しており、擬音語がその音源と結びつく例である。さらに、(1-1f) でみられるように、タイ語のオノマトペは助数詞（あるいは類別詞）としても機能し、写真を撮る回数・枚数を数えるのに用いられることがある。

(1-1) a. *khwák puuun ʔòok maa lânkaj daŋ chéʔ* (BIO041)

取る 銃 出る 来る 引き金を引く 音がする ONM

銃を取り出してきて、**カチッ**と引き金を引いた。

b. *chéʔ sǎaŋ sakít fajchék daŋ khúŋ baw baw*

ONM 音 つつく ライター 音がする 上がる 軽いー小さい 軽いー小さい

(PRNV064)

シャッ。ライターをつける微かな音がした。

c. *raw kôo thàaj pháap chéʔchéʔchéʔ* (BIO065)

私達 PRT 撮る 写真 ONM

³ 秋田 (2022; 近刊) に指摘されているように、現実世界において音と動きが同時に生起することが一般的である。そのため、例えば「窓ガラスが風にガタガタと鳴った」と「しめてある雨戸をがたがたとゆすると…」の「ガタガタ」には音と様態が含まれているという。また、武藤 (2003) はある感覚領域を表すオノマトペが別の感覚領域の性質を同時に表現できることについて二次的活性化 (secondary activation) を根拠として説明している (pp.297-298) (詳細は 2.2.1 節で説明する)。

私達はパシヤパシヤ写真を撮った。

d. nákhōŋthiaw níʔjom maa dɯŋ chom wiw **chéʔ** phâap khǒŋ

観光客 好む 来る 歩く 眺める 景色 撮る 写真 GEN

dōjnaaŋnōn (<https://pantip.com/topic/41827169>)

(地名)

観光客はよく（ナーンノーン山に）歩いてきて景色を眺めてナーンノーン山の写真を撮る。

e. thaam kōw kòt **chéʔ** léʔ júuun klōŋ klàp

(人名) PRT 押す シャッターボタン そして 渡す カメラ 返す

hàj thanthii (PRNV003)

あげる すぐ

タームはシャッターボタンを押して、そしてすぐにカメラを渡して返してくれた。

f. thàaj baj meepɯŋ paj sǒŋ sǎam **chéʔ** (<https://pantip.com/topic/42481017>)

撮る 葉 カエデ 行く 2 3 CLF

カエデの葉っぱを2、3枚撮った。

このように、タイ語においても一つの擬音語がさまざまな意味をもっていることがわかる。しかし、chéʔの意味を辞書⁴で調べると、(1-2)のように音に関する記述しか見当たらないのである。(1-1d)～(1-1f)は新奇的、文学的な表現でなく、タイ語話者が日常生活の中でよく見聞きする表現であるにも関わらず、辞書の記述ではその使用実態が十分に反映されているとはいえない。また、chéʔと同じように、その意味が辞書で明確に言及されていないオノマトペが多くみられる。そのため、本研究でタイ語にみられる擬音語の意味拡張を考察することを通して、タイ語の擬音語の多義性を検証することが期待される。

(1-2) Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) によるchéʔの定義（日本語訳は筆者による）

⁴本研究で主に利用されている辞書は Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) と Matichon Dictionary (2017 Edition) である。一方、Matichon Dictionary (2017 Edition) においては、擬音語 chéʔ に対する記述が見当たらない。

引き金を引く音。また、そのような音。

近年、オノマトペの意味拡張に関する研究は始まっているが（武藤 2003; 呂 2003; 呂 2004; 三上 2006; Akita 2013; 游 2014 など）、その多くは日本語や中国語などを対象としたものであり、タイ語における擬音語の意味拡張を分析する研究が不足している。しかし、(1-1f) のように、タイ語の擬音語は類別詞など先行研究で（詳細は 3.2.2 節で述べる）報告されていない拡張パターンがみられる。このことから、タイ語の擬音語の意味拡張は他の言語の理論で捉えきれない部分があり、各言語はそれぞれ固有の拡張パターンをもっていると考えられる。そのため、タイ語にみられる擬音語の意味拡張を調査し、その拡張パターンやその傾向を明らかにする必要がある。

1.2 研究の目的

本研究は、タイ語における擬音語の使用実態に注目し、そこにみられる意味や用法を認知意味論の観点から考察し、分析するものである。また、以下の三つの課題に達成することを目的とする。

一つ目、タイ語における擬音語の意味や用法を調査し、その意味拡張の実態を分析することによって、タイ語の擬音語の多義性を記述する。

二つ目、タイ語における擬音語の使用実態に基づき、タイ語における擬音語の拡張パターンやその拡張の傾向（例えば、人間や動物の声を写し取る擬音語（擬声語）は、外部世界に働きかけた結果に生じた音を表す擬音語との間に、意味の拡張のパターンの違いがみられるのかなど）を明らかにする。

三つ目、先行研究（Akita 2013; 游 2014）で擬音語の意味拡張の起こりやすさ・起こりにくさを規定する要因として文法機能（Syntactic constraint）、意味的特定性（Referential constraint）、事象構造の複雑さ（Event-structural constraint）が挙げられているが（詳細は 2.2 節で述べる）、どの要因がタイ語の擬音語に適用できるかを確認する。また、それらの要因以外の可能性についても検討する。

1.3 本研究の構成

本稿は次のように構成されている。第 2 章では、本研究の背景となるフレーム意味論や多義性を概観した後（2.1 節）、オノマトペの意味拡張に関する先行研究を確認し（2.2 節）、先行研究の問題点を提

示し（2.3 節）、本研究で議論となる問題点を提示する（2.4 節）。第 3 章でオノマトペの定義（3.1 節）およびタイ語のオノマトペの音韻形態的・統語的特徴（3.2 節）を紹介する。その後、第 4 章では本研究の分析対象の概要を述べ（4.1 節）、研究方法を提示する（4.2 節）。第 5 章でタイ語にみられる擬音語の意味拡張の実例を提示するとともに、擬音語の多義性の分析を行う。Akita（2013）と游（2014）によって提唱された擬音語の意味拡張を規定する要因をタイ語に適用できるかどうかを考察し（5.1 節）、その他の可能性を検討する（5.2 節）。その後、擬音語の意味拡張の行き先について論じる（5.3 節）。最後に、第 6 章では本研究の結論および今後の課題を論じる。

2. 本研究の理論的背景および先行研究

本章では、2.1 節で本研究の理論的背景となるフレーム意味論や多義性などの概要を簡潔に論じる。その後、2.2 節でオノマトペの意味拡張に関する先行研究を紹介し、2.3 節で本研究の議論となる問題点について説明する。

2.1 本研究の理論的背景

本研究はフレーム意味論の枠組みに基づいてタイ語における擬音語の多義性について分析を行っている。まず、フレーム意味論の概要を紹介する。フレーム意味論 (frame semantics) は Fillmore (1982) によって提唱された考え方であり、ある概念 (言語表現) を理解するためにその概念の背景となる知識構造を理解する必要があるとする立場である。例えば、(2-1) の *coast* と *shore* はいずれも同じ指示対象を指しているが、その語の背景にある知識が異なっている。前者は陸側から見た海との境界を表すのに対し、後者は海側から見た陸との境界を指している。このような背景知識の構造は「フレーム」 (frame) と呼ばれている。(2-1) でみられるように、語などの言語表現はフレームを喚起する。認知言語学では、言語表現の辞書的意味とその背景知識 (フレーム) を明確に切り離すことができず、連続体をなしているという立場に立つ。

(2-1) a. We will soon reach the coast. (Fillmore 1982:121)

b. We will soon reach the shore. (Fillmore 1982:121)

フレームは、諸々の経験をスキーマ化、簡略化したことによって形成された知識構造であり、一つのフレームの中にさまざまな「フレーム要素」 (frame element) という構成要素が含まれている。例えば、「商取引」フレームには売り手、買い手、商品、代金というフレーム要素が存在しており、これらのフレームの要素の間の関係によってフレームが成り立っている。フレーム意味論は、そのフレームに基づいて意味を分析する理論であり、例えば、フレームを用いて多義語における語義間の関係を分析することもある。

多義語 (polyseme) は、一つの語が二つ以上の意味をもち、またそれらの意味も間に関連性がある語のことである。語の多義性について、Tuggy (1993) は図 2-1 のように、単義語 (図 2-1e) から同音異義

語（図 2-1a）へと連続体をなしていると捉え、多義語がその中間（図 2-1b～d）に位置づけられている。図 2-1 での A と B は語の具体的な意味を表し、C は A と B の共通点を抽出しスキーマされた抽象的な意味である。また、太線の部分は結びつきの強さを表している。同音異義語（図 2-1a）の場合は、形式が共通するそれぞれの語の意味の間に共通点がみられず、関連性を抽出することができないのに対し、単義語（図 2-1e）の場合はそれぞれの語の意味に差異を見出すことができず、具体的な意味よりスキーマレベルの意味の方が形式との結びつきが強い。一方、多義語には、典型的な多義語（図 2-1c）、単義寄りの多義語（図 2-1d）、同音異義語寄りの多義語（図 2-1b）があるが、いずれも具体的な意味の間に関連性を見出すことができるということが特徴的である。その多義語の語義同士でみられる関連性には、メタファー（metaphor）、メトニミー（metonymy）、シネクドキー（synecdoche）という 3 つの種類がある（靱山 2021）。

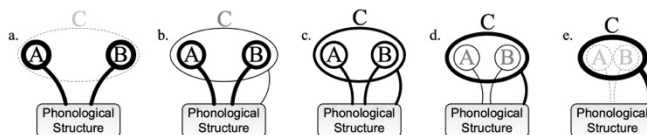


Figure 3. The ambiguity-vagueness cline showing extensionality of semantic structures

図 2-1 Tuggy（1993）によって提唱された語の意味の連続体（p.281）

メタファーは、二つの領域の間の類似性に基づく写像であり（Lakoff & Johnson 1980）、抽象的かつわかりにくい概念（目標領域; target domain）をより具体的かつわかりやすい別の概念（起点領域; source domain）を通して理解する認知能力の一つである。例えば、(2-2) のように、spend や cost、invest など本来金銭に関わる表現を時間の概念に用いられ、時間という抽象的な概念がより具体的な概念であるお金を通して理解される。時間とお金の間には「価値がある」、「有限である」などという共通点があり、類似している。このような対応関係に基づく理解はメタファーである。

(2-2) TIME IS MONEY.

- a. How do you spend your time these days?
- b. That flat tire cost me an hour.
- c. I've invested a lot of time in her.

(Lakoff & Johnson 1980: 198)

メトニミーは単一領域内にある要素の間の焦点の移行によって成り立つ比喻であり（大堀 2002）、要素同士の隣接性に基づいている捉え方である。その隣接性には、全体—部分、容器—中身、行為者—プロセスなどの関係が挙げられている（瀬戸 2005: 第9章）。また Langacker (1993) によると、メトニミーは参照点構造（図 2-2）を基盤として働いており、すなわち認知的に際立ちの高いものが参照点として機能し、それを經由して同一の領域にあるより際立ちの低いターゲットを指し示すという仕組みである。メトニミーの例は（2-3）で示している。（2-3a）では legs（部分）は選手（全体）を指すために言語化され、参照点として働いている。それに対し、（2-3b）では pencil（全体）を經由してその芯（部分）を表すことができる。また、（2-3c）のように、作者を参照点としてその作品を指し示す用法もみられる。

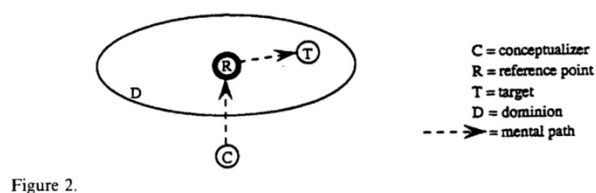


図 2-2 Langacker (1993) によって提唱された参照点構造 (p.6)

- (2-3) a. The coach is going to put some fresh legs in the game.
 b. My pencil broke. [when actually only the lead point did]
 c. She bought Lakoff and Johnson, used and in paper, for just \$1.50. (Langacker 1993: 29)

一方、シネクドキーは包摂関係に基づく比喻であり、上位レベルの概念を用いて下位レベルの概念を指し示したり、下位レベルの概念を用いて上位レベルの概念を表したりするものである（杵山 2021）。

（2-4a）は上位レベルの概念で下位レベルの概念を指し示す用例であり、ここでの「熱」は温度ではなく、「平均より高い体温」を表している。一方、（2-4b）は下位レベルの概念で上位レベルの概念を指す用例であり、その「お茶」は茶葉を使った飲み物の他に、コーヒーやジュースなどの飲み物も含んでいる。このようにシネクドギーは類と種の関係に基づいている。本研究で擬音語の意味拡張を確認する

中で、シネクドギーによる拡張が見当たらないが、意味階層の上下関係による区別は音源の特定性を区別するのに有用であり、詳細は2.3節や4.2節で論じる。

(2-4) a. 熱にきく薬。 (靱山 2021: 120)

b. ちょっとお茶飲みに行かない？ (靱山 2021: 122)

2.2 オノマトペの多義性に関する先行研究

第1章で述べたように、さまざまな感覚領域にまたがり、相互に関連し合うというオノマトペの特性は意味拡張につながっている。近年、認知意味論の観点からオノマトペとその多義性に関して分析した先行研究がみられる（武藤 2003; 呂 2003; 呂 2004; 三上 2006; Akita 2013; 游 2014; 秋田 2022 など）。本節ではそれらの先行研究の主要な議論を整理し、簡潔に紹介する。

2.2.1 共感覚・多感覚に基づくオノマトペの多義性分析

武藤（2003）は共感覚的比喩（synaesthetic metaphor）⁵の枠組みを用いて、日本語のオノマトペ（主に食に関するオノマトペ）の多義性を分析している。武藤（2003）によると、オノマトペの中にはWilliams（1976）の一方方向性仮説に従わない反例が多く存在するものの、感覚領域間の意味転用が多く確認されるという。また、武藤（2003）は、一つのオノマトペは出来事に関わるさまざまな感覚を同時に表現し得ることを指摘している。このような感覚領域間の意味転用はメトニミーに基づいていると述べており、二次的活性化（secondary activation）を用いて説明を与えている。例えば、「サクサク」というオノマトペが使われる対象は、現実世界において「サクサク」という音がし（聴覚的情報）、水気がなく乾いている状態（触覚的情報）であることが多いことは、日常生活を通して得られた共通知識である。そのため、ある一つの意味（例えば、「音」の意味）が活性化されれば、その別の意味（例えば、「触覚」に関する意味）も同時に活性化を受けることになるという（pp. 297-298）。さらに、秋田

⁵ 共感覚的比喩とは、五感のある感覚領域を表す表現が別の感覚領域の表現を修飾し、意味が転用されるという比喩表現であり、Williams（1976）によって提唱されている。Williams（1976）は、共感覚的比喩には「一方方向性仮説」が存在していると指摘しており、低次感覚領域の表現から高次感覚領域の表現に転用する傾向があると述べている。

(2022) はファセット (facet) ⁶の観点を導入し、一つのオノマトペが複数の感覚領域の意味に組み込まれていると主張している。例えば、「シュワシュワ」は聴覚的、触覚的、視覚的という三つのファセットを喚起しているという (pp.219-220)。さらに、秋田 (2022) は一般語彙である動詞、形容詞の意味情報を比較し、考察を行った結果、オノマトペは一般語彙に比べて、より多様な感覚領域に関わる意味を表現することができ、豊富な意味情報を内包していることがわかる。このように、現実世界において音に何らかの動きや状態が伴うことが多いため、「擬音語」がそれを表現し、聴覚的情報の他に、それに付随する様態や状態を同時に表しているのである。

2.2.2 ICMに基づくオノマトペの多義性分析

呂 (2004) は英語のオノマトペの意味拡張を説明するために、ICM (idealized cognitive model; 理想化認知モデル) ⁷を用いて分析を行っている。例えば、表 2-1 の左端で示されるように、bam の理想化された事象の中には事態の音 (大きな打撃の音)、トラジェクター (人か固いもの)、その様態 (力いっぱい) などのさまざまな側面があり、それらの複数の側面が bam の ICM として組み込まれている。bam の意味が拡張する ((2-6)) 際に、表 2-1 のように ICM と拡張義の用法の関連性を検討する上で、ICM のどの側面が拡張義の元となっているのかを明確にすることができる。(2-6) の場合では、「衝撃を受ける」という意味から「圧倒される」という意味へ、様態の側面において拡張が起きることがわかる。また、呂 (2003) においても、日本語の「ころころ」「ごろごろ」、中国語の「滾滾」、英語の“roll”の多義性を考察するために、ICM が導入されている。

(2-5) a. Audiences are “bammed” by Maria Bamford.

(…圧倒された/が〜んとなった) (bammed = amazed)

⁶ファセットは、“units that have a significant degree of autonomy, but can be unified to form a global Gestalt” (p.116) (「一定の自律性を有しつつも、一体となり全体的ゲシュタルトを形成しうる複数の〔意味の〕単位」(秋田 2022: 214)) と Croft & Cruse (2004) によって定義されている。具体的な例は以下で示しており、Britain は、a.では〈土地〉、b.では〈人〉、c.では〈国家〉のファセットを表している。

a. Britain today lies under one meter of snow. [LAND]

b. Britain is today mourning the death of the Royal corgi. [PEOPLE]

c. Britain declares war on North Korea. [STATE] (Croft & Cruse 2004: 117)

⁷ICM は、Lakoff (1987) によって提唱された事物の認知モデルである。さまざまな経験や背景知識に基づいて単純化・理想化して、対象 (表現) の意味や使用を正確に捉えようとするモデルである。

b. The kids just get bammed on the music and words.

(…すっかり心が奪われた)

(呂 2004: 110)

	bam の ICM の諸側面	(2-5) において bam が使われる事態
<事態の音>	大きな打撃の音	無し
<trajector>	人か固いもの	聴衆、観客、子供
<landmark>	固いもの	歌手、歌
<tr の動作>	動作あり	聞く
<tr の様態>	動的：力いっぱい	動的
<lm の様態>	衝撃：大きな影響を受ける	衝撃、overwhelmed

表 2-1 bam の ICM と bam が使われる事象の側面の照合 (呂 2004: 110) (変更は筆者による)

呂 (2003; 2004) は ICM を導入することによって、それぞれの擬音語のスク립トや、その ICM に組み込まれた側面を明らかにし、意味拡張を分析するのに大変有意義な知見を提示している。しかし、これは一部のオノマトペを対象とした分析にとどまっており、まだ十分な一般化になっておらず、オノマトペの意味拡張のメカニズムを統括的に説明していないということが事実である。擬音語の意味拡張をより一般化し、統括的に説明しているのは、Akita (2013) と 游 (2014) であり、2.2.4 節で紹介する。

2.2.3 予期的認知と痕跡的認知に基づくオノマトペの多義性分析

三上 (2006) は、予期的認知 (prospective cognition; 仲本他 2004) と痕跡的認知 (vestigial cognition; 国広 1985) を導入し、オノマトペの拡張義を考察している。予期的認知とはある事象を未来の何らかの出来事の原因として捉え、未来の虚構や想像の出来事を予期することであり、仲本他 (2004) では「ぱんぱん」は予期認知による意味拡張の例として挙げられている。例えば、「風船がぱんぱんだ」は破裂音という聴覚的な情報を表すのではなく、膨らんでいる状態を表している。この「ぱんぱん」は、これ以上膨らんだ状態でぱんぱんという音がして破裂しそうと予期しているのである。三上 (2006) ではその他に、「かちかち」 ((3-8) を参照)、「つるつる」などが例として挙げられている。

一方、痕跡的認知とはある事象を過去の何らかの出来事の結果として捉え、その結果より過去の虚構や想像の出来事を想像することである。例えば、「崖の上から小石がばらばら落ちてきた」、「畑の中に建て売りのプレハブ住宅がばらばらと建っている」では、後者の「ばらばら」は空間的に間隔を置く状態を表している。この「ばらばら」は、あたかもそれらが音や動きを伴って散らばった結果によって、空間的に散らばった地点に存在することになったと解釈できるという（三上 2006; (3-13) を参照）。

2.2.4 フレーム意味論に基づく擬音語の多義性分析

游（2014）はフレームを用いて日本語と中国語における擬音語の拡張の分析を行なっている。游（2014）によって提案されたフレームは大きく音（外部原因音、内部原因音）、声の三つに分類されている。外部原因音は接触、摩擦、破壊など、音源の外部における物理的な働きかけや変化によって生じる音であるのに対し、内部原因音は音源の内部から発せられる音である⁸。また、游（2014）は（2-6）のように主張している。（2-6a）～（2-6c）から、游（2014）による擬音語の意味拡張を規定するのは意味的特定性の高さ、フレームの複雑さという二つの要因があることがわかる。

- （2-6） a. 意味的特定性の高い擬音語がもつ豊富かつ具体的な情報が意味拡張に利用されやすいため、特定性の高い擬音語は意味拡張が起こりやすい。
- b. メトニミー拡張の場合、フレーム内の要素が少ない内部原因音（および声（擬声語））は焦点転移の行き先が限られているため、外部原因音の擬音語より意味拡張が起こりにくい。
- c. メタファー拡張の場合も同様に、内部原因音（および声（擬声語））はフレームの要素が限られており、フレーム間で対応しうる要素が少ないため、外部原因音の擬音語より意味拡張が起こりにくい。
- d. 日本語における擬音語のメトニミー拡張の場合、焦点転移の行き先は音源、音源の状態、音源の心理状態、働きかけ・変化という4つのパターンがある。

⁸ 游（2014）によると、内部原因音は電子ロックの音や目覚まし時計の音、車のクラクションの音のような物理的な働きかけが容易に特徴づけられない、あるいは視覚的に確認されにくい音のことを指している。音の発生時の段階での働きかけより、何の音が発生するのかに注目している（p.74）。

意味的特定性と意味拡張の関係（2-6a）の背景は、「意味の派生が起こるときには、基本的意味の中の何らかの要素が利用されるのが普通である」（p.127）と游（2014）によって指摘されており、基本義に具体的な情報が含まれた場合の方が拡張に利用されやすいのである。游（2014）の意味的特定性は擬音語からどの程度音源を特定できるかという点を問題としており、その擬音語の意味的特定性を検討するために、その擬音語から音源をどの程度指定しているのかを示す尺度を設けている（詳細は2.3節で述べる）。

また、フレームの複雑さはフレーム内要素の数と関連しており、例えば、図2-3でみられるように、内部原因音フレーム（図2-3a）や声発生フレーム（図2-3b）のフレーム要素は、外部原因音（図2-3c）より数が少ないことがわかる。游（2014）の（2-6b）と（2-6c）のように、フレーム内要素が少なければ、焦点転移の行き先（メトニミー）やフレーム間で対応しうる要素（メタファー）が限られているため、意味拡張が起こりにくい。

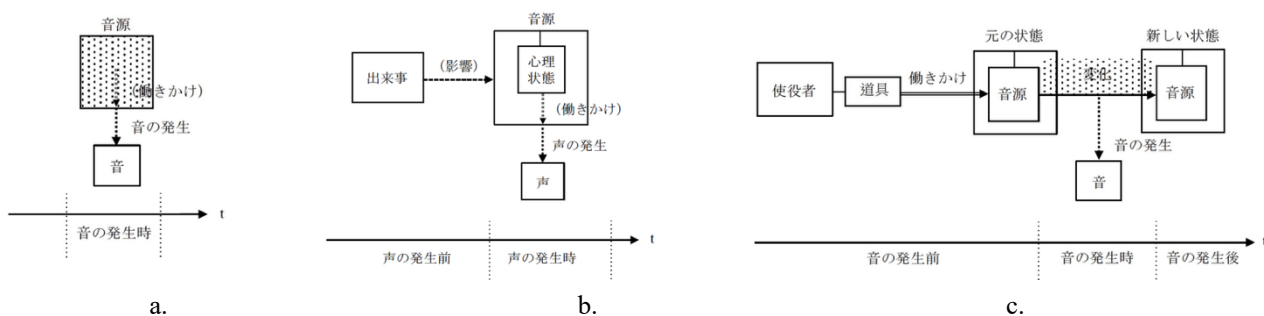


図2-3 游（2014）のフレームの用例例（a.内部原因音のフレーム（p.75）、b.声発生のフレーム（p.76）、c.使役状態変化を伴う外部原因音のフレーム（p.65））

Akita（2013）は、日本語、韓国語、中国語、英語の30語（擬声語）15語、音を表す擬音語15語）の擬音語を対象に意味拡張を調査した。その結果、意味拡張が多く確認されたのは英語、日本語、韓国語、中国語の順である。表2-2は、4言語に意味拡張が起きた語の数とその割合を表しているものである。表2-2でみられるように、英語は4言語の中で意味拡張が最も多くみられており、擬音語と擬声語を合わせた全体の83.33%を占めていることがわかる。

Table 2. Polysemous OFs in the four languages

	<i>Voice</i>	<i>Noise</i>	<i>Total</i>
Japanese	1/15 (6.67%)	9/15 (60.00%)	10/30 (33.33%)
Korean	2/15 (13.33%)	7/15 (46.67%)	9/30 (30.00%)
Chinese	1/13 (7.69%)	1/15 (6.67%)	2/28 (7.14%)
English	11/15 (73.33%)	14/15 (93.33%)	25/30 (83.33%)
Total	15/58 (25.86%)	31/60 (51.67%)	46/118 (38.98%)

表 2-2 日本語、韓国語、中国語、英語の擬音語の意味拡張 (Akita 2013: 26)

意味的特定性の高さとフレームの複雑さは、意味拡張の起こりやすい要因として游 (2014) によって挙げられている。英語では、擬音語の意味的特定性が低く、声と音の間に意味拡張の差がみられず、つまり意味的特定性の高さとフレームの複雑さという要因は、英語の擬音語の意味拡張と関連しないのである。それにも関わらず、意味拡張が多く確認されている。それを説明するために、Akita (2013) は擬音語の文法機能を導入し、英語の擬音語が他の 3 言語と異なり、主節の核になり得ることが意味拡張と関係していると指摘しており⁹、主節の核 (述語) の位置に出現する擬音語の方が周辺的位置 (副詞) の擬音語より意味拡張が生じやすい¹⁰と主張している。以上を踏まえると、Akita (2013) は図 2-4 のように、擬音語の意味拡張を規定する要因として、影響が大きい順に、文法機能 (主節の核か周辺か)、意味的特定性の高さ、事象構造 (フレーム) の複雑さという三つの要因を挙げていることがわかる。

⁹英語のオノマトペは、副詞として機能することは稀であり、一般的に動詞や名詞として機能すると田守・スコウラップ (1999) によって述べられている。例えば、“The water is burbling.” の“burble”は、動詞として機能している。それに対し、日本語では「湯がぼこぼこ沸騰した」の「ぼこぼこ」は副詞として働いている (Akita 2013)。

¹⁰ Akita (2013) は Okada (2013) を主張の根拠として挙げている。Okada (2013) は名詞の概念拡張における非対称性を扱っており、以下のように名詞が主節の核 (項) として働く場合 a.の方が付加詞の場合 b.より概念拡張の解釈が生じやすいと述べている。

- a. John cleared **the table**. (the table = things left on the table)
- b. John cleared the trash, along with **the table**. (*the table = things left on the table) (Okada 2013: 164)

項での概念拡張解釈が付加詞の場合より生じやすい・認められやすいのは、項が文の中心的な参与者として際立っているため、文脈に適した解釈を与えるための処理労力をかける価値があるためであると Okada (2013) によって指摘されている。それに対し、付加詞位置での拡張が認められにくいのは、適切な解釈を与えるために必要な解析コストが、その周辺的な要素にかかるのが不釣り合いであるためという。

言語 \ 意味拡張の要因	意味的特定性 (referential specificity)	事象構造の複雑さ (event-structural complexity)	文法機能 (syntactic constraint)
日本語	高い	音と声の間に意味拡張の差がある	主節の核になりにくい。（副詞・引用用法として現れることが一般的）
韓国語	高い	音と声の間に意味拡張の差がある	主節の核になりにくい。（副詞・引用用法として現れることが一般的）
中国語	低い	特に言及されていない	主節の核になりにくい。（副詞・引用用法として現れることが一般的）
英語	低い	特に言及されていない	主節の核になれる（動詞として現れることが一般的）

表 2-3 Akita (2013) による日本語、韓国語、中国語、英語の擬音語の特徴の整理

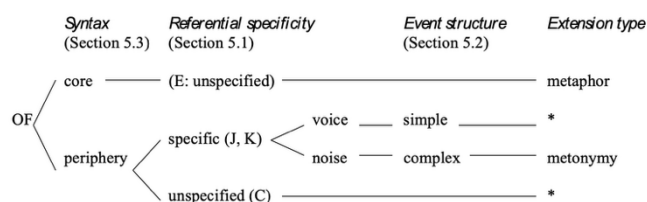


Figure 2. Summary

図 2-4 Akita (2013) による意味拡張の要因のまとめ (p.34)

2.3 Akita (2013) と游 (2014) の基準に関する問題点

1.2 節で述べたように、Akita (2013) と游 (2014) によって提案された擬音語の意味拡張を規定する要因がタイ語に適用可能かどうかを検討することは、本研究の目的の一つである。それを考察するために、本研究は Akita (2013) と游 (2014) の枠組みを援用することにした（詳細は 4.2 節で述べる）。Akita (2013) と游 (2014) の研究は認知言語学の観点から擬音語の意味拡張に計量的な説明を与えており、多くの有益な示唆を示している。しかし、それらの研究の基準にはいくつかの問題点がみられ、主に意味的特定性とフレームという二つの点に整理されている。本節ではその問題点を提示し、また本研究を進める上での解決方法を述べる。

まず、意味的特定性に関する問題点について論じる。Akita (2013) と游 (2014) の共通点としては、擬音語から音源をどれほど特定できるのかということを問題としていることである。Akita (2013) は “We examined whether our Ofs [onomatopoeic forms] in the four languages can be applied to sounds made by more

than one type of sound emitter.” (p.29) と述べており、擬音語が一つの種類の音源に適用できるのであれば、「意味的特定性が高い」とし、複数の種類の音源に適用できるのであれば「意味的特定性が低い」に分類している。

Akita (2013) において「意味的特定性が低い」擬音語として挙げられたのは、例えば中国語の dingdang (硬貨や鍵などの金属物体やドアベルなどの電子機器の音を表す擬音語) や、英語の jingle (金属物体の音や快い韻 (pleasant rhymes)、音楽の音を表す擬音語)、mutter (雷や波の音を表す擬音語) などである。一方、「意味的特定性が高い」擬音語として挙げられたのは、日本語の「ちゃりちゃり」(金属物体を表す擬音語) や韓国語の kwangkwan (踏みつけや叩きつけなどの強い接触や爆発の音のような強い衝撃の音を表す擬音語) である。しかし、それらの音源の間にどの程度の関連性があれば一つの種類として認められるのかという点について、Akita (2013) の判断基準はあまり明確ではないと考えられる。例えば、上記の kwangkwan では、踏みつけや叩きつけの音、爆発の音が強い衝撃の音として一つの種類の音源としてまとめられるに対し、mutter では自然現象が発した音として考えられるにもかかわらず、一つの種類として一般化することが認められない。

一方、游 (2014) の擬音語の音源¹¹の意味的特定性は Akita (2013) とやや異なっている。游 (2014) は擬音語の意味的特定性を調査するために、その擬音語から音源をどの程度指定しているのかを示す尺度を設けている。擬音語 (外部原因音と内部原因音) の場合は、その音源が単に無生物であることが特定できれば「一般レベル」、また音源が無生物の他に、流動体、気体、液体、固体など音源の性質の状態について指定をもつのであれば「性状レベル」、またそれらの性質の他に、音源の形状、触感、材質などに指定をもつ、あるいは擬音語から特定の音源を指定するのであれば「特定レベル」と分類している。游 (2014) で挙げられた「一般レベル」の例として、日本語の「どん」(物が鳴り響く低くて大きい音を表す擬音語) や「ごーっ」(物が鳴り響く大きい音を表す擬音語) などが挙げられている。ま

¹¹ 游 (2014) では音源の他に、擬音語の様態を指定するについても言及されており、象徴素が指定する様態を問題としている。日本語では有声音と無声音のミニマルペアによって音が発生する事象の強弱を区別することができ、その様態の指定をもっている (例えば、ぼんぼんーぼんぼん、さわさわーざわざわ、かちゃんーがちゃん、しゅっーじゅっなど)。また、中国語では有気音と摩擦音を含む擬音語が、音発生に伴う動きの速さ指定で効果があるとされている。一方、Akita (2014) で挙げられた意味的特定性の要因は音源のことのみ指している。

タイ語での音象徴的な効果について、Saengkrachang(1973) や Phanthumetha (1992) で報告されているが、游 (2014) の日本語や中国語の場合のように、体系的に説明を与えることができないと考えられる。

た、「性状レベル」の例には「びゅっ」（気体や液体が一瞬噴出する時の音を表す擬音語）や「こん」（固体同士が軽く触れ合った）などがあり、「特定レベル」には「にちゃにちゃ」（粘り気のあるものがくっついたり離れたりする時の音を表す擬音語）、「みしみし」（木製の物が軋んだ時の音を表す擬音語）、「ちょきちょき」（はさみで物を切る音を表す擬音語）などがある。

擬声語の場合はその音源の有生物が意味世界において上位レベルに属するか、基本レベルに属するかを問題にしている。その有生物が上位レベルに属しているのであれば「類レベル」、またその有生物が基本レベルに属しているのであれば「特定レベル」に分類される。游（2014）において「類レベル」として分類されている擬声語の例として、日本語の「うおー」（野獣などの動物の鳴き声を表す擬声語）や「ちちちち」（小鳥や虫などの生き物の鳴き声を表す擬声語）が挙げられている。一方、「特定レベル」の例としては、「わんわん」（犬の鳴き声を表す擬声語）や、「にゃーにゃー」（猫の鳴き声を表す擬声語）が示されている。

このように、游（2014）の音源の意味的特定性の判断基準は詳細に設定されており、包摂関係¹²に基づいて分類されていることがわかる。しかし、游（2014）の「特定レベル」の分類からみると、游

（2014）では同一のレベル内にみられる特定性の度合いの差異を検討に入れていないと考えられる。例えば、「ざわざわ」は大勢の人が騒ぐ音を表す擬音語であり、その音源は人間（大人でも子どもでも可能）であることから、それが基本レベルに属するとされ、「特定レベル」に分類されている。一方、赤ちゃんの産声や泣き声を表す「おぎゃーおぎゃー」も同様に「特定レベル」に属している。しかし、

「おぎゃーおぎゃー」の場合は、典型的には赤ちゃんに限定されており、「ざわざわ」と比べて限定的であり特定性が高いと考えられる。このように、「人間」と「赤ちゃん」は意味世界において同じ基本レベルに属しているにもかかわらず、そのことばの指し示した対象の範囲に差があり、複数の対象を指し示す人間の声を表す「ざわざわ」と赤ちゃんの泣き声という限定的な対象のみ指し示す「おぎゃーおぎゃー」を同じカテゴリーに一括りすることは、その特定性の差異を捉えることができない可能性があると考えられる。また、音での分類基準も同じである。例えば、金属物が接触する時の音を表す「きー

¹² その包摂関係は声の場合の分類基準に限らず、音の分類にもみられる。例えば、無生物を表す「一般レベル」は抽象的な上位レベルの位置にあり、それよりも特定性の高い（より具体的な）「性状レベル」と「特定レベル」はその「一般レベル」の下位分類として捉えることができる。

ん」は游（2014）において鈴やベルが鳴る音を表す「ちりんちりん」と同じ「特定レベル」に分類されているが、このような場合も同レベルにおける特定性の差異がみられる。

本研究ではタイ語の音源の意味的特定性を検討するために、游（2014）の意味的特定性を主に援用することにしたが、游（2014）の「特定レベル」を複数の対象を指し示す「特定レベル（複数）」とより限定的な対象を指し示す「特定レベル（限定）」に再分類することにした。また、「特定レベル（複数）」¹³にまとめる擬音語は、その擬音語から特定できる音源の間の関連性を Historical Thesaurus

(<https://www.oed.com>) でみられる階層区分と武藤（2003）¹⁴を参考に行っている（研究方法については4.2節で述べる）。

また、游（2014）ではあまり議論されていないが、音の発生には2つ以上の音源が関わる場合があり、本研究では音源を検討する際に全ての音源を考慮することにした。例えば、重い物体が水中に落ちた際に生じる音を表す tɔ̌m の場合は、その落下した物体と水という二つの音源が関与していると考えられるため、いずれも音源として検討することにした¹⁵。なお、判断が難しい場合がある。例えば、pɔ̌pɔ̌ という擬音語は、雨などの水滴がまばらに道と接触する音と、まばらな拍手の音を表している擬音語で

¹³ 擬音語の「特定レベル」と擬声語の「特定レベル」を混同しないように、本研究では声を表す擬音語において「特定レベル（複数）」に相当するものを「基本レベル（複数）」、「特定レベル（限定）」を「基本レベル（限定）」と呼ぶことにする。游（2014）の「類レベル」に相当するものを「上位レベル」と呼称する。

また、動物の声を表す擬声語については、タイ語は動物の性別や年齢、より細かな品種による擬音語の区別が想定されない場合が多いが（しかし、雌の鶏の声の擬声語 katáak や雄の猫の声の擬声語 ɲàaw、子犬の声の擬音語 ʔiŋ、カラスの声の擬声語 kaa や鳩の擬声語 cúkkrûu・kúkkrûu のような擬声語の場合がみられる。このような場合は「基本レベル（限定）」に分類する。）、本研究ではそれらの擬声語を「基本レベル（複数）」に分類することにする。一方、犬の典型的な鳴き声を表す擬声語 hòŋ は犬が叩かれ痛みを感じた時に発した声を表す擬声語 ʔəŋ と比べて特定性が低く、両者を区別すべきであると考えられるかもしれない。しかし、その特定性による際は、そのフレームにおける出来事や心理状態（cf.2-3b.）と関わっており、両者の音源は犬ということは変わらないため、本研究ではいずれの場合も「基本レベル（複数）」にする。

¹⁴ 武藤（2003）は2.2.1節で述べたように、二次的活性化を用いて日本語のオノマトペの多義性に説明を与えている。例えば、「サクサク」が使われる対象は、現実世界においてその音の他に、水気がなく乾いている状態（触覚的情報）であることが多い。そのため、「サクサク」という擬音語から水気がなく乾いている状態にある対象を特定できることがわかる。また、例えば「サラサラ」は聴覚的、触覚的、視覚的な情報の間の連続性が強いとされ（p.286）、「サラサラ」からさまざまな情報に辿り着くことができる。また、武藤によって指摘されているように、二次的活性化によって一つの意味が活性化されれば、その別の意味も同時に活性化を受けることになる。これを踏まえて、その擬音語の聴覚的情報からどれほど特定できるのかを、本研究で意味的特定性を判断する際に参考に行っている。

¹⁵ tɔ̌m の場合は、その「落下した物体」と「水」が固体、液体としか特定できないため、「性状レベル」に分類した。

あり、移動先（あるいは接触先）となる道や掌は固体であることを一般化することができるが、移動物（あるいは接触物）は水滴と掌の性質の状態はそれぞれ異なり、一般化することができない。しかし、pɔʔpɛʔ という擬音語から液体（水滴）と固体（掌）という性質の状態を特定することができるため、このような場合も「性状レベル」として扱うことにした。

二つ目は、先行研究の問題点よりも筆者が本研究を進める過程で実感した問題点である。それは、フレームの判断基準に関わるものである。2.2.4 節でみたように、Akita (2013) と游 (2014) が音と声を区別するのは、音と声が発生する際にそれらと関与する側面が異なっており、つまりそれぞれはフレーム構造の複雑さの度合いやフレーム要素の数が異なっていることを想定しているためである。

Akita (2013) では無生物から発するものを「音」(noise) とし、有生物から発するものを「声」(voice) として、分析を行っている。前者は働きかけ事象 (impact event) や状態変化事象 (change-of-stage event) のような使役サブイベント (causing subevent) (あるいはサブフレーム (subframe)) を含んでいる (表 2-4) ため、後者 (表 2-5) に比べてフレーム構造がより複雑であり、要素の数が多 (pp.31-32) とされている。

A noise frame	An impact event		An change-of-state event	
	a. an impactor		a. a causer	
	b. an impactee		b. a particular means of causation	
	c. the state of the impactee		c. an object	
	d. a particular manner of impacting		d. its initial state	
b. a subevent that causes or involves the sound	e. an instrument		e. its resultant state	

表 2-4 Akita (2013) の音フレームとサブイベントの要素 (変更は筆者による)

A voice frame	
a. the vocal sound	
b. an animate entity that produces it	
c. perhaps an emotional or non-emotional stimulus that causes the animate entity to make the sound	

表 2-5 Akita (2013) の声フレームとサブイベントの要素 (変更は筆者による)

一方、游（2014）は音を表す擬音語を Akita（2013）で論じられたような使役サブイベントを含んでいるものと、物理的な働きかけによって特徴づけられにくく、使役表現に組み込まれにくいもの（游 2014: 4.2.3 節と脚注 8 を参照）を区別して扱っており、前者は「外部原因音」（cf. 図 2-3c）、後者は「内部原因音」（cf. 図 2-3a）としている¹⁶。また、擬声語は有生物が発声器官を用いて発するもの（cf. 図 2-3b）を指している。図 2-3 でみられるように、フレームの複雑さは、外部原因音、声、内部原因音という度合いの高い順であるとされている。游（2014）は Akita（2013）より詳細に音のフレームの複雑さを捉えることができると考えられるため、本研究では游（2014）のフレームの判断基準を援用することにした。

しかし、本研究を進める中で、游（2014）のフレームの判断基準に従っても、判断するのに困難な場合がある。例えば、爆弾が爆発する音を表す擬音語については、その働きかけが背景化されている場合が考えられる。游（2014）で内部原因音の例として挙げられた電子レンジの音を表す擬音語は、誰かがその電子レンジを設定したという働きかけを想定できるが、その人間による設定・操作という動作よりも、電子レンジによる出力やその電子レンジ自体から発せられた音が問題とされている。爆発の音の場合も電子レンジの場合のように想定することもできる。テロリストが爆弾を仕掛けたが、その誰かが仕掛けたという働きかけの要因より、爆弾のメカニズムやその音の方が注目されている場合が考えられる。

また、視覚的にその働きかけが確認されにくいという内部原因音の特徴についても、電子レンジの機械の中の仕組みは視覚的に確認されにくいと同様に、爆弾の仕組みも視覚的に容易に把握することはできないものである。さらに、内部原因音は使役表現に組み込まれにくいと游（2014）によって述べられており、（2-7a）を内部原因音の例として挙げているが（2-7b）タイ語の爆発の音を表す擬音語の場合も（2-7a）に近い用例がみられる。（2-7）の用例はいずれも Talmy（2000: 475）の *autonomous event* に相当しており、使役性が低いと考えられる。しかし、爆発は（2-7）の他に（2-8）のように働きかけの要素が

¹⁶游（2014）では、外部原因音は、Akita（2013）の状態変化事象を伴う場合と伴わない場合を想定しているが、これらのいずれの場合も Akita（2013）の働きかけ事象を含んでいることが考えられる。一方、内部原因音の要素は、音源と、その「働きかけ」しかない。游（2014）の内部原因音の「働きかけ」は、例えば電子レンジの場合は、「人間による電子レンジの設定」ではなく、「電気による出力」としており、物理的な働きかけが想定されていない。また、その働きかけ（「電気による出力」）が言語化されないことは内部原因音の特徴の一つである（游 2014: 74-75）。このことから、游（2014）において外部原因と内部原因音を区別する上で最も重視されているのは、視覚的に確認できる、かつ言語化できる物理的な働きかけ事象の有無であると考えられる。

言語化された用例もみられる。そのため、爆発の音は外部原因音とみなすべきなのか、または内部原因音とみなすべきなのか判断が難しいのである。

(2-7) a. 電子機器がびーびーと鳴っている。 (游 2014: 75)

b. mii sjaŋ mǔan ʔaraj rabɔ̌t daŋ búm (PRNV167)

もつ 音 似ている 何か 爆発する 音がする ONM

何かが**ドカーン**と（という音を立てて）爆発したような音がある。

(2-8) a. cùt chanuan búm bon sênthaŋ sàʔwěɛŋbun (NWRP_FR017)

つける 火薬 ONM 上 道路 聖地巡礼

聖地巡礼の道路の上で火薬を**ドカーン**とつけた。

b. cùt chanuan bum rót phaŋ jáp

つける 火薬 ONM 車 壊れる ぐしゃぐしゃのさま

(<https://www.thairath.co.th/news/local/south/2497946>)

火薬を**ドカーン**とつけて、（その結果）車がぐしゃぐしゃに壊れた、

電子レンジの場合は、図 2-5 のように、「電子レンジが鳴る」事態には「人間による設定」と「電気による出力」という二つの働きかけのサブイベントがあることが想定できる。游（2014）において「人間による設定」よりも「電気による出力」が問題とされているのは、おそらくその二つのサブイベントの間は非連続的であるからと考えられる¹⁷（Talmy（2000: 502-504）の discontinuous causative chain に相当する）。「人間による設定」が電子レンジの起動に起因するものの、「電子レンジが鳴る」事態との間に「電気による出力」という中間的なサブイベントがあるため、直接当該事態を引き起こすとは言い難い。

¹⁷ 人間による設定・操作は事態の一部しかみられず、終始手を加えているわけではない。なお、内部原因音はすべて電子レンジの場合のように二つの使役サブイベントをもっているとは限らない。例えば、「お腹が鳴る」事態の働きかけ、あるいは発生原因は「胃の働き」とされているが（游 2014: 73）、「ご飯を食べない」ことは使役性が低く、働きかけとして捉えられにくいと考えられる。

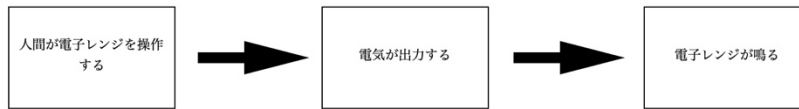


図 2-5 電子レンジが鳴る事態の使役サブイベント

では、爆弾の場合はどうであろうか。電子レンジの場合と同様に物理的な働きかけによって特徴づけられにくく、また視覚的に確認されにくいという点で、内部原因音として捉えられるかもしれないが、游（2014）によって提案された内部原因音はフレーム内の要素の数が少なく、物理的な働きかけや状態変化が想定されていない。そのため、この擬音語が内部原因音であるとすれば、（2-8）のような文が容認できないはずである。爆発という事態は、サブイベントの間が非連続的であったとしても、使役や状態変化を明確に言語化することができるため、本研究では外部原因音として扱うことにする。本研究では、基本的に游（2014）のフレームの判断基準に従うが、外部原因音と内部原因音の判別が難しい場合、游（2014）に提示された各フレームの要素を参照にしながらその擬音語が生起可能な表現の用例を確認し、分類を行いたい。

また、前述したように、游（2014）において声についてはその有生物が発声器官を用いて発生したか否かということを基準としている。しかし、発声器官を用いているかどうか判断しにくい場合もあり、いびきはその一例であると考えられる。いびきは人間という有生物から発せられたものではあるが、意図性もなく、また発声器官を用いて発するものか否かは疑問が残っている。そのため、内部原因音と声の境界線が曖昧であり、フレームの判断が困難となる場合がある。

本研究では、内部原因音と声のフレームの判断が困難な場合は、日本語の「音」と「声」の区別を採用することにした。具体的には、現代日本語書き言葉均等コーパス（BCCWJ）を用いて確認した結果、「いびき」は「音」との共起が可能であることがみられるため、いびきを表すタイ語の擬音語を内部原因音に分類することにした。

2.4 タイ語における擬音語の意味拡張に関する問題点

第1章で述べたように、タイ語のオノマトペを主に対象とした先行研究は極めて限られており、とりわけ（音象徴以外）オノマトペの意味とその意味拡張を考察する先行研究が見当たらないのが現状である。そのため、本研究ではタイ語における擬音語の意味拡張の実態を明確し、分析を試みたい。本節では、タイ語にみられる擬音語の意味拡張に関する問題点を二つ提示する。

一つ目の問題点は、タイ語の擬音語の意味拡張のパターンである。図 2-3 でみられるように、游（2014）は音を表す擬音語と擬声語のフレームを区別した上で、多義性の分析を行なっている。その結果、音を表す擬音語と擬声語の間では、それから派生された意味パターンが異なっており、それぞれの拡張パターンは各フレームを構成するフレーム要素によって規定されている。タイ語には、日本語のように有生であるか否かによって音と声を区別するものがなく、いずれも *siaŋ* という同一の語によって一括して捉えられている。そのため、游（2014）の結果のように、タイ語にも音と声の意味拡張のパターンが異なっているのかについて検討する必要がある。音と声の語彙的区別のないタイ語を分析対象にすることによって、そこにみられる意味拡張のパターンの差異が言語固有のカテゴリー化に基づくのか、あるいは言語を超えた知識構造に基づくのかを検証することができると考えられる。また、タイ語の擬音語が、游（2014）の日本語と中国語のように、フレームによって意味拡張パターンがフレームに基づいているのであれば、将来生じうる拡張義を予測することも可能になることが利点であると考えられる。例えば、図 2-3a の内部原因音のフレームは、図 2-3c の音源の変化を伴う外部原因音のフレームと異なり、フレーム要素に状態変化が含まれていないため、その内部原因音の擬音語から生じる拡張義は音源の状態変化と関わる意味をもつと考えにくい。

二つ目の問題点は、擬音語の意味拡張を規定する要因である。2.2 節で示したように、擬音語における意味拡張を統括的、かつ体系的に説明を与えられるのは、Akita（2013）と游（2014）によるフレーム意味論に基づく擬音語の多義性の研究である。そのため、本研究では、Akita（2013）と游（2014）によって提案された意味拡張を規定する要因である文法機能、意味的特定性の高さ、事象構造（フレーム）の複雑さを基準として、タイ語における擬音語の意味拡張を考察したい。しかし、それらの要因そのままではタイ語に適用できない点があり、例えば 3.2 節で示すように、タイ語の典型的な統語機能は副詞であり、Akita（2013）の文法機能の要因を用いてタイ語における擬音語の意味拡張の現象に説明を与えるこ

とができない。本研究ではそれらの要因を確認しながら、その他の可能性についても検討していきたい。

3. オノマトペの定義とその有標性およびタイ語におけるオノマトペの形態的・統語的特徴

本章では、3.1 節でオノマトペの定義とオノマトペの有標性を確認した後、3.2 節でタイ語におけるオノマトペの音韻形態的（3.2.1 節）・統語的特徴（3.2.2 節）について紹介する。

3.1 オノマトペの定義とその有標性

秋田（2008; 2021）で指摘されているように、オノマトペは世界の諸言語にみられるものの、その多様な形式や意味、機能のゆえに、通言語的に共有される性格を見出すことは容易ではない。そのため、オノマトペの定義は不確定であり、いかなる基準によってオノマトペ範疇を設定するのかという範疇化の問題がみられる。近年、Dingemanse（2019）が示す “IDEOPHONE. A member of an open lexical class of marked words that depict sensory imagery”（p.16）（「感覚映像を写し取る、形式的に有標な語から成る開いた語類の成員」（秋田 2021: 51））という通言語的に適用可能な定義が定着している。その「有標」性（markedness）はオノマトペと非オノマトペ（一般語彙）を区別するものであり、何らかの側面が異なっていることを示唆している。

Klamer（2001）は、図 3-1 のように、個別言語の語彙項目を中核的な項目（core lexical item）から周辺の項目（peripheral lexical item）まで連続体をなしていると想定しており、オノマトペが形式、意味、機能という側面において有標性をもつ語であると論じている。つまり、オノマトペは一般語彙（中核的な語彙項目）と異なる逸脱的な性格を備えているのである。

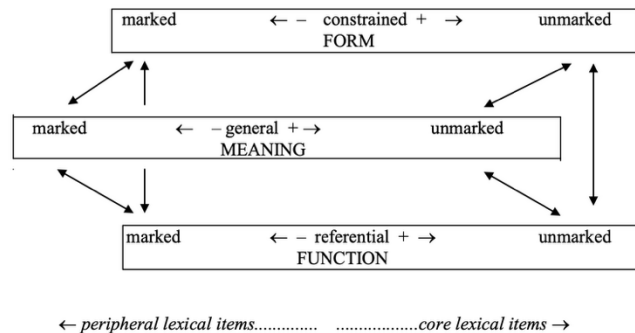


図 3-1 語彙項目における形式、意味、機能の連続体（Klamer 2001: 178）

Klamer（2001）によると、形式の有標性として、オノマトペは各言語における韻律構造の規則に違反する、あるいは卓立性のある形式で出現することが多いという。例えば、カンベラ語では、/ù, è, ò,

ǎ/という母音はオノマトペにしか用いられないと観察されている（Klamer 2001: 171）。日本語でも、例えば、和語では語頭での出現が許容されない/p/が「ぱらぱら」「ぴかぴか」などのオノマトペで実現したり（浜野 2014; 秋田 2021）、「ぽっかり」のような CVCCVri など一般語彙ではあまりみられない韻律鋳型で出現したり（秋田 2008）することが多数ある。

意味の側面ではオノマトペは特定性が高く、具体的な事象を描写することができるという特徴があると Klamer（2001）によって述べられている。例として、セマイ語の“gbun gbun”と“pim pim”が挙げられており、前者は「一人に搗かれた米」（rice beaten by one person）であり、後者は「二人以上の人に搗かれた米」（rice beaten by two or more people）を表している（p. 167）。それに対し、一般語彙の意味は、オノマトペほど特定性が高くないとされている。また、オノマトペのこうした「描写的」（depictive）性格は、一般語彙のもつ「記述的」（descriptive）性格に対立するものであると Dingemanse（2011）によって指摘されている。

また、機能の有標性については、オノマトペは一般語彙より表出性（expressive）が高く、指示性（referential）が低いとされており、つまり何かを指し示すことにより発話に臨場感を与えることを重視しているのである。そのため、感嘆詞などと同様の振る舞いをもつオノマトペが多いと Klamer（2001）によって述べられている。また、秋田（2021）にも表出性と文法的統合性の関係について指摘があり、図 3-2 のように文法的統合性が低いオノマトペほど表出性が高いと観察されている。例えば、文外独立用法（秋田（2021）の発話端構文に相当する）で用いられるオノマトペは、文構造から逸脱し、文の外に現れる他、多重反復や、母音・子音の引き伸ばし、独特なイントネーションのような他の要素から韻律的に隔たっている。それに対し、動詞のような述語として文構造に深く統合されるほどそのような形式的な特徴がみられなくなるという。

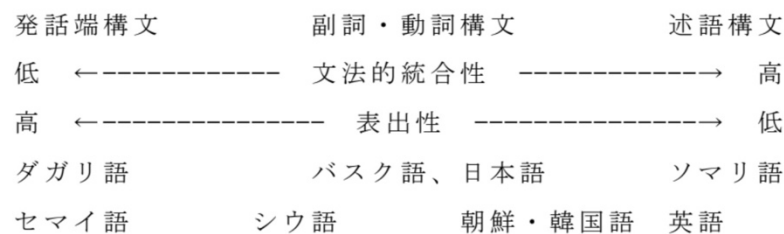


図 3-2 秋田（2021）による表出性と文法的統合性の関係（p. 62）

このように、オノマトペは一般語彙項目と異なる性格を有していることがわかる。ただし、Klamer (2001) や Dingemanse (2011; 2019) の「有標性」は、オノマトペを一般語彙から区別する上で有用であるものの、それはあくまで典型的なオノマトペの特徴であり、オノマトペ範疇の絶対的基準ではないことが秋田 (2021) によって指摘されている。例えば、英語では音象徴的な役割をもつ音声要素を含んでいるか否かがオノマトペの選別基準とされており、日本語のオノマトペの韻律鋳型のような音韻形態的な特徴がみられない。また、その音声要素もオノマトペ特有のものではなく、一般語彙にも現れるという (田守・スコウラップ 1999: 32)。つまり、英語ではオノマトペの形式的な有標性がみられないのである。

一方、タイ語でオノマトペに相当する語には、sàttaphót (สัทพจน์) と khamliansīanthammachâat (คำเลียนเสียงธรรมชาติ) (あるいは、khamliansīan (คำเลียนเสียง)) がある。前者はパーリ語の“sadda” (音) と “vacana” (語) に由来した語であり、修辞的技法の名称として理解されている。オノマトペを文学に用いることによって、物語世界に存在する音や声を表現し、読者に臨場感を与えることができるため、タイではシミリーや擬人法、誇張法など同様に修辞法の一つとして位置付けられている (Phongpheng 2004 など)。それに対し、後者はオノマトペの一般的な名称であり、“kham” (語)、“lian” (模倣する)、“sīan” (音・声)、“thammachâat” (自然) から組み合わせられたことばである。

これらの名称から、タイ語のオノマトペは音や声を表す擬音語のことしか想定されておらず、様態や状態を表す擬態語や、感情を表す擬情語を包含していないことがわかる。しかし、タイ語には擬態語のような形態や振る舞いをもつことばが全く存在しないわけではなく¹⁸、近年の研究 (隅田 2011; Trongdee 2015) で報告されている¹⁹。また、Srisawat (2024) は擬態語を sàttaphót の一種として捉え、sàttaphót をより広く解釈している。さらに、一般的に想定される擬音語や擬態語のようなものとは異なっている

¹⁸ タイ語には擬情語が存在しているかについて、未だ十分に調査されておらず、今後検討する必要がある。秋田 (2017) は、オノマトペの守備範囲の広さの指標として、オノマトペが表しやすい概念を4つのレベルに分類している。レベル1: 声、音。レベル2: 動き・形・模様・手触り。レベル3: 身体感覚・感情・味・匂い・色。レベル4: 論理的関係。例えば、レベル3のオノマトペをもつ言語は、必ずレベル1と2のオノマトペを有するという。筆者は、現時点で感情 (秋田 2017 のレベル3) のみを表すオノマトペが確認できていないが、5.3.4 節で示したように、擬音語から心理状態へ意味拡張したものがある。

¹⁹ 隅田 (2011) ではそのようなことばを「擬態語」と呼んでいる。また、Trongdee (2015) では擬音語と擬態語を一括に “ideophone” (表意音) と呼んでいる。なお、表意音はアフリカ言語学でよく用いられるオノマトペの呼び名である。

ものの、形式と意味の間に必然性があるという理由から、khamśám?ùtcaanná?wí?lâat (คำซ้ำอุจจารณวิลาส; Euphonic Couplet) を音象徴の一種として扱う研究がみられる (Luksaneeyanawin 1982) ²⁰。

タイ語におけるオノマトペに関する先行研究は非常に限られている。khamliansiaŋ (擬音語) に対して Phanthumetha (1992) が「擬音語と呼ばれる語は、笑い声や、泣き声、咳、くしゃみなどという人間の声、鳴き声や威嚇の声という動物の声、機械から発せられた音、人間や動物の働きかけによって生じた音など、さまざまな音を写し取るものである。これらの擬音語は、人間が発声器官を使用して現実世界に起きた音を模倣して表現しようとするものであり、実際の音を完全に実現するわけでないものの、その音がどのような特徴を有しているのかをおおよそ示唆している。」 (p. 45; 日本語訳は筆者による) と述べている。つまり、タイ語の擬音語は、日本語の擬音語などと同様に、人間が発声器官を使って、実際に起きた音を真似して表現しようとするものを指しているのである。

Dingemanse (2019) によって提案された定義と「有標性」は一部のタイ語のオノマトペに該当していると考えられる。例えば、Naksakul (1977) と Hanpanich (1993) では一般語彙にあまりみられない音韻形態的特徴が報告されており²¹、(3-1) のように整理されている。

(3-1) a. /ʔ/ が二重母音の後ろに付き、末子音として用いられる (Naksakul 1977:131-132)。例え

ば、pʰiaʔ (物体が割れた音や電流が流れる音を表す擬音語)、cuaʔ (「白」の程度を強調する擬態語)、phlúaʔ (物体を投げる音やドアを荒々しく素早く開く音を表す擬音語)。

b. 頭子音/p/に第4声調や第5声調の符号²²が付与される (Naksakul 1977: 120-121)。例えば、

pùm (物体が水に落ちた時の音を表す擬音語)、píaw (矢が空気を切り裂く音を表す擬音

²⁰ 本研究の議論に影響しないものと思われるため、Luksaneeyanawin (1982) の要旨をここで簡略に述べる。タイ語の Euphonic Couplet は、反復の後行語 (場合によって先行語) の母音 (場合によって韻) を変更することによって、否定的なニュアンスをもつようになるという ($C_{1-2} V_{1-2} C_{0-1} \rightarrow C_{1-2} V_{1-2} C_{0-1} \uparrow C_{1-2} \underline{V}_{1-2} C_{0-1} \uparrow$ など)。例えば、phàk (野菜) や jêek (離す・離れる) に関する否定的なニュアンスを表現するために、phàkphàk や jêekjêek にする。従来の考え方では Euphonic Couplet における母音・韻の変化は意味と関係がないとされていたが (Naksakul 1973 など)、Luksaneeyanawin (1982) はその形式と意味の間の関係を主張している。

²¹ (3-1) のような音韻・形態特徴をもつものとして、オノマトペの他に、感嘆詞や (サンスクリット・パーリ語、クメール語など古くから取り入れられたものを除く) 外来語、固有名詞が挙げられる。

²² タイ語の一般語彙が第4声調や第5声調で発音される語が多くみられるため、(3-1b) と (3-1c) は有標的ではないと考えられるかもしれない。しかし、タイ語では「形態的に見える声調符号」と「実際に発音される声調」にズレがあり、発音を規定する要因は声調符号の他に、頭子字の三群分類、音節の種

- 語)、pěeŋ (缶を叩きつける音を表す擬音語)。
- c. 第4声調と第5声調の符号が付いている (Hanpanich 1993: 28)。例えば、kríŋ (電話の着信音や鈴の音を表す擬音語)、brúuu (船などの乗り物のエンジンをふかす音を表す擬音語)、ʔěeŋ (犬の悲鳴のような鳴き声を表す擬音語)。
- d. 偶然の空白 (accidental gap) である声調を伴っている (Hanpanich 1993: 28)。例えば、cók (水が小さく流れる音やお腹が鳴る音を表す擬音語)、ʔút (豚の鳴き声を表す擬音語)、kachúkkachák (列車が走る音を表す擬音語)。

なお、(3-1d.) の偶然空白とは、当該の言語の音素配列の規則に反していないものの、その位置に語彙が偶然に存在していないことを指している。タイ語での声調の分布は表 3-1 で示したとおりであり、短母音閉鎖音節の第3声調と長母音閉鎖音節の第4声調の2ヶ所に偶然空白が確認される。

	第1声調 (中平調)	第2声調 (低平調)	第3声調 (下降調)	第4声調 (高平調)	第5声調 (上昇調)
C(C)VV, C(C)VN, C(C)VVN	○	○	○	○	○
C(C)VS	*	○	(○)	○	*
C(C)VVS	*	○	○	(○)	*

表 3-1 タイ語における声調分布 (Hanpanich 1993: 26) (日本語訳と変更は筆者による)

C=頭子音、V=母音、N=鼻音と半母音、S=閉鎖音、(○) = 偶然の空白、*=体系的空白²³

このことから、タイ語のオノマトペにも音韻形態的な側面において一般語彙と異なる性格をもつことがみられる。ただし、上述したようにこれらの「有標性」は全てのオノマトペを捉えることができず、

類、母音の長さがある。そのため、第4声調や第5声調で発音されることばには、形態からみると第4声調や第5声調が付いていないことが多数ある。

第4声調や第5声調符号が有標的とされているのは、他の声調符号より出現が遅いからと考えられる。Supanvanit (1984) によると、第5声調の符号(◌̐)は1292年に創作されたが、1379年まで第2声調の符号として用いられており、第5声調を表す符号として再び出現されたのは1794年であるという。また、第4声調の符号(◌̑)が初出したのは1803年である (pp.442, 555-556)。ラタナコーシン時代の初期にはそれらの符号が付いていることばが少なく、中国語からの借用語と感嘆詞にみられると Supanvanit (1984) によって指摘されている。

²³ 体系的空白 (systematic gap) は言語の音素配列の規則に違反しているため、排除されたことを指す。

形式だけで一般語彙と区別できないオノマトペが多数ある。また、タイ語のオノマトペは英語の場合と同じように、そこに含まれている音象徴的な効果をもつ音声要素が判断基準とされているが、それらの音声要素は他の一般語彙にもみられる。そのため、タイ語では有標的な形式の特徴がないものをオノマトペとして認識するのが難しいのである。

一方、意味の有標性によってオノマトペを選別することは、あまり有用ではないと考えられる。

Trongdee (2015) では、タイ語とラオスにおける一般語彙とオノマトペを区別する際に、その語が描写性をもつか否かが判断基準として用いられている。しかし、描写性を基準とすることも、客観性に乏しく、判断の安定性に欠けていると考えられる。例えば、明るさを強調する *câa* は描写性が欠けているとされたため、Trongdee (2015) ではオノマトペとして扱われていない。それに対し、白の程度を強調する *cúa?* や赤の程度を強調するラオス語の *cunḡkhunḡ* は、高い描写性をもつと判断され、オノマトペとして認定されているのである。このように、有標性だけでタイ語のオノマトペを全て捉えることができず、どの基準をもって一般語彙から区別すれば良いのかというオノマトペの範疇化の問題がまだ残っている。

3.2 タイ語における擬音語の音韻形態的・統語的特徴

本節では、タイ語の擬音語がどのような形式をしているのか、その音韻形態的特徴について論じる。その後、本研究で主に注目される擬音語の意味拡張を説明する上で重要な手掛かりと考えられる擬音語の統語的特徴を紹介する。

3.2.1 タイ語における擬音語の音韻形態的特徴

では、タイ語の擬音語はどのような形式を有しているのだろうか。(3-1) の例でみられるように、1 音節のオノマトペが多くみられるが、4 音節のものもある。Surachit (2014) によって提案された形態パターンを参考にして、さらに一般化し整理すると、表 3-2 のようになる。

語基	形態パターン		例
1 音節	A		krèek, khlùk, s̄u, m̄aw, tuum, pr̄en, phò?
2 音節	非反復	AB	katáak, katóok, cúkkrúu, ʔuwée

	部分的反復	A ₁ A ₂	kùpkàp, tùptâp, chúkchâk, kùkkâk, fùutfâat
3 音節	ABC		kâʔtôŋhòŋ

表 3-2 Surachit (2014) によって提案されたタイ語における擬音語²⁴の音韻形態パターンに基づいた筆者による一般化および整理

1 音節の擬音語 (A 型) はそのまま単独で使うことができるが、多くの言語のオノマトペでみられるように、AA 型の反復形²⁵をとることによって、音や声、動作などの反復性・継続性を象徴的に表すことができる。例えば、表 3-2 で挙げられた *mǎaw* という猫の鳴き声を表す擬声語は、*mǎawmǎaw* という反復形をとることで、猫が鳴き続けることを表現することができる。また、タイ語の擬音語では、形態を 2 回以上反復させることも可能である (Surachit 2014: 74)。例えば、水滴が落ちる音を表す *tǐŋ* は、*tǐŋtǐŋ* (AA 型) の他に、*tǐŋtǐŋtǐŋ* (AAA 型) や、*tǐŋtǐŋtǐŋtǐŋ* (AAAA 型)、さらにはそれ以上の反復形をとることができる。

一方、2 音節の語基をもつ擬音語には、二つの音節の間に形式的な観点がみられない非反復形のもの (AB 型) と、母音に違いのある部分的反復形のもの (A₁A₂型) がある。AB 型の擬音語は A₁A₂型より数が少なく、環境音をそのまま写し取ると考えられる。例えば、*ʔuwée* は赤ちゃんの産声・泣き声を表しており、日本語の「おぎゃーおぎゃー」に近い。また、AB 型の擬音語は 1 音節擬音語と同じように、反復形 (ABAB 型) をとり、その反復継続を表現することができる。

部分的反復形の擬音語 (A₁A₂型)²⁶には、A 型から派生されたものがあるが、基底形のようなものがなくそのまま A₁A₂型の形態をとるものもある。例えば、A 型から派生されたものは、*puŋpaŋ* であり、*puŋ* から派生されており²⁷、いずれも強くぶつかる音を表す擬音語である。また、この型の擬態語は、音をそ

²⁴ ここで示された形態パターンは擬音語のパターンであり、擬態語などはさらなる検討が必要である。

²⁵ 秋田 (2021) によると、反復形はオノマトペの通言語的な典型的な特徴であるという。

²⁶ A₁A₂型には母音交替に関する音韻的な規則が存在するものの、本研究の議論に影響しないため、ここで詳述しないこととする。なお、この点については、Udomanisuwat (1983) において非常に詳細、かつ体系的に説明がなされている。

²⁷ *puŋpaŋ* が *puŋ* から派生されたとみなしたのは、Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) において後者が前者の見出し語として扱われているためである。しかし、辞書に頼らずに、*puŋ* と *paŋ* のいずれが *puŋpaŋ* の基底形なのかのような判断が困難な場合が多数ある。

このように、*puŋ* (A 型) には *puŋpuŋ* (AA 型) という完全反復形と、*puŋpaŋ* (A₁A₂型) という部分反復形があることがわかる。しかし、全ての A 型の擬音語は *puŋ* のように部分反復語があるわけではない。

のままで模倣するものの他に、そこに韻律的なリズムが付与されている (Udomanisuwat 1983)。この型から派生された形態には、 $A_1A_1A_2A_2$ 型、 $A_1A_2A_1A_2$ 型、 XA_1XA_2 型という三つの種類があることが特徴的である。 A_1A_2 型は (3-2) でみられるように、 $A_1A_1A_2A_2$ 型、 $A_1A_2A_1A_2$ 型の反復形をもっていることが多いが、その二つの反復形に違いがあるか否かまだ問題にされてこなかった。一方、 A_1A_2 型の擬音語の一部は、 XA_1XA_2 型²⁸をとることができる。ここでの X は $C(r)a$ の形式をしており、ほとんどは ka あるいは kra である。例えば、(列車が走る音を表す擬音語) $chûkchâk$ や (子どもの足音を表す擬音語) $tô?tê?$ (A_1A_2 型) は単体で使うことができるが、そこに ka や kra を挿入する²⁹ことによって、 $kachûkkachâk$ 、 $kratô?kratê?$ (XA_1XA_2 型) という形態をとることができる。しかし、 ka は (リズム以外) どのような意味、あるいは役割をもっているのか³⁰、 XA_1XA_2 型になり得るものと XA_1XA_2 型になり得ないものの間にどのような違いがあるのかなどについては、議論されていない。また、3音節の擬音語 (ABC 型) は数がわずかであるが、これも反復形をとることができる ($ABCABC$ 型)。

(3-2)	A_1A_2 型	$A_1A_1A_2A_2$ 型	$A_1A_2A_1A_2$ 型
a.	kùkkâk	kùkkùkkâkkâk	kùkkâkkùkkâk
b.	tûptâp	tûptûptâptâp	tûptâptûptâp
c.	?ôot?éet	?ôot?ôot?éet?éet	?ôot?éet?ôot?éet

(Surachit 2014: 74-75 変更は筆者による)

²⁸ Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) では、 A 型の中にも XA_1XA_2 型に近い XA の形態をとるのが確認されている。例えば、女性の叫び声を表す擬音語である $kriit$ (A 型) は $krakriit$ という形態で現れている。しかし、このような形態パターンは、サンスクリット・パーリ語から取り入れられた $?âpphâat$ (อภัพ) と呼ばれている用法であり、 XA_1XA_2 型と異なり、 X (Ca) の頭子音が A の頭子音と一致しなければならない (Thonglor 2007: 148-149)。

$?âpphâat$ は、タイ古典文学において広く用いられる用法であり、言語をより美しくする修辞法の一つとされている。しかし、この用法は日常的な言語でほとんどみられず、また臨時的に使用する場合が多いため、本研究では扱わないことにする。

²⁹ ここでは、「省略」($kachûkkachâk \rightarrow chûkchâk$)でなく、「挿入」($chûkchâk \rightarrow kachûkkachâk$)であるとみなしたのは、タイ語が単音節言語 (monosyllabic language) であり、(他の言語に由来した外来語を除く) 接辞のない言語であるためである。そのため、 $kachûkkachâk$ というより複数の音節をもつものを元の形とみなすことが難しい。

³⁰ Bilmes (1998) によると、 $ka \cdot kra$ はクメール語に由来した接辞であり、装飾の表現 (elaborate expression) に結びつくと言意 (intensification) の機能をもつとされている。しかし、どのように言意の機能を果たしているのか Bilmes (1998) では言及されていない。また、Bilmes (1998) 以外、オノマトペ (あるいはオノマトペらしいもの) と $ka \cdot kra$ についての議論は見当たらない。

タイ語における擬音語は(3-1)で挙げられた音韻形態的特徴以外、表3-2のように音韻形態パターンを一般化することができる。ただし、このようなパターン³¹も、オノマトペに特有のものでなく、一般語彙にも数多くみられる。そのため、表3-2で示した音韻形態パターンは一般語彙と擬音語を区別する基準にならないと考えられる。

3.2.2 タイ語における擬音語の統語的特徴

本節では、タイ語における擬音語の統語的特徴について検討する。タイ語では、擬音語は一般的に副詞(Upakit-silapasarn 1922)、あるいは修飾語(khamkhajǎaj; คำขยาย) (Phanthumetha 1982)として分類されているが、Surachit (2014)による擬音語の使用実態の調査から、副詞として機能するだけでなく、名詞や動詞などさまざまな統語的機能を担うことが可能であることが明らかになっている。その例は(1-1)にもみられる。タイ語は孤立語(isolating language)であるため、文法範疇の範列パラダイムが成立せず、語形変化もみられない(峰岸 2000を参照)ゆえに、擬音語を含めてことばが柔軟にさまざまな文法的環境に出現することができる。この点については、游(2014)によって報告されている中国語の擬音語の統語的機能に似ている。

本節では、まずタイ語の一般的な機能とされている副詞用法(3.2.2.1節)を紹介した後、図3-2で示された統合性が低い順に、文外独立用法(3.2.2.2節)、動詞用法(3.2.2.3節)、名詞用法(3.2.2.4節)について説明する。最後に、3.2.2.5節では日本語にみられない擬音語の類別詞用法について述べる。

3.2.2.1 副詞用法

本節では、擬音語の一般的な機能とされている副詞用法について考察する。本研究の分析対象としている全ての擬音語は、副詞として機能することができる³²。(3-3)は擬音語が副詞として用いられてい

³¹ その形態パターンの中で、XA₁XA₂型はオノマトペにのみみられる形式である可能性があり、さらなる検討が必要である。一般語彙にはそれに近いXAXB型が多く存在しており、XA₁XA₂と同じように母音交代を示すものの、XAXB型では母音だけでなく、末子音や声調にも違いがみられる(例えば、tabiitaban、khamùkkhamwómなど)。

XA₁XA₂型の形を有する語のうち、A₁A₂は擬音語に限らず、擬態語のようにみえるもの(語に音象徴的な役割をもつ音声要素が含まれている)がある。しかし、その擬態語のようなものの中には、先行研究で擬態語として報告されていないものがあるため、これについても考察の余地がある。

³² これについては、本研究の分析対象の選別基準と関わっている。詳細については4.1節で述べる。

る例である。秋田（2022; 近刊）によって指摘されているように、擬音語が擬態語として解釈することが珍しくないため、（3-3）では様態副詞として解釈することも可能である（（3-3a）は活気のある様子、（3-3b）は泡が湧き上がり煮え立つ様子、（3-3c）は（反芻するような）食べ物を繰り返してゆっくり噛む様子を表す）。しかし、（3-4）でみられるように、動詞と擬音語の間に *daŋ*（（～という）音がする）という動詞を挿入し、擬音語の解釈のみ得ることができる。

(3-3) a. *nók fũuŋ jàj kraphuu piik phùpphàp* (PRSH058)

鳥 CLF 大きい 羽ばたく 羽 ONM

大きな鳥の群れがパタパタ羽ばたいている。

b. *nám dùat pùtpùt* (MG016)

水 沸騰する ONM

水がポコポコと沸騰している。

c. *dèk ʔuən khon dɿm juuən khíaw màakfáʔràŋ jàpjàp* (NWCOL108)

子ども 太る CLF 元 立つ 噛む ガム ONM

あの太っている子どもが立ってガムをクチャクチャ噛んでいる。

(3-4) a'. *nók fũuŋ jàj kraphuu piik daŋ phùpphàp*

鳥 CLF 大きい 羽ばたく 羽 音がする ONM

大きな鳥の群れがパタパタ（という音を立てて）、羽ばたいている。

b'. *nám dùat daŋ pùtpùt*

水 沸騰する 音がする ONM

水がポコポコ（という音がして）沸騰している。

c'. *dèk ʔuən khon dɿm juuən khíaw màakfáʔràŋ daŋ jàpjàp*

子ども 太る CLF 元 立つ 噛む ガム 音がする ONM

あの太っている子どもが立ってガムをクチャクチャ（という音を立てて）噛んでいる。

タイ語には、日本語の「と」と「に」に相当する様態副詞と結果副詞を区別する形式のようなものが存在せず、様態副詞の用法の方が結果副詞より数多く観察される。しかし、結果副詞のような意味をも

つものがみられ、(3-5b)、(3-5c)、(3-6b)のように示している。(3-5a)は擬音語であり、軽く接触する時の音を表しているのに対し、(3-5b)はすき間がなくくっつく状態を表している。これは転んだ時に床と接触した際に生じた音、あるいは動的様態と解釈できるかもしれないが、(3-5c)でみられるように、実際にその音が聞こえず、すでに起きている状態を示すことができる。そのため、(3-5b)と(3-5c)は結果副詞を表していると考えられる。また、(3-6a)の *plèʔ* の基本義は水分が多くとろみのあるものが落下した際に生じる音を表している。それに対し、(3-6b)では落下した後に生じるぐちゃぐちゃになった状態を表している。このように、(3-6a)は音を指示するのに対し、(3-6b)は意味が拡張し、静的結果状態的な意味を表すようになっている。

(3-5) a. *tòp pèʔ thii kêem ʔiik sǎɔŋ thùŋ sǎam khráŋ* (PRSH025)

叩く ONM に 頬 さらに 2 から 3 CLF

頬をペタンとさらに2〜3回叩く。

b. *see lóm loŋ paj nân pèʔ kàp phúuun* (PRNV034)

ふらつく 転ぶ 下りる 行く 座る পেちゃん と 床

ふらついて転んで床にぺちゃんと座っている。

c. *kháaw hôŋ maa kôo hén thɿɿ nân pèʔ kàp phúuun jùu*

入る 部屋 来る PRT 見える 彼女 座る পেちゃん と 床 CONT

léew

PFV

部屋に入ってきたら、彼女が(すでに)床にぺちゃんと座っているのが見えた。

(3-6) a. *khéek phlík tòk cím phúuun daŋ phlèʔ*

ケーキ ひっくり返る 落ちる 突っ込む 床 音がする ONM

(<https://pantip.com/topic/34691959>)

ケーキがひっくり返って、床にべちゃっと(という音がして)落ちた。

b. *kradòot loŋ maa càak chán sii rúaŋ phlèʔ maa bon*

跳ねる 下りる 来る から 階 4 落ちる ぐちゃぐちゃになるさま 来る 上

phúuun (<https://pantip.com/topic/32480688>)

床

4階から飛び降りてきて、ぐちゃぐちゃに落ちた。

また、様態副詞、結果副詞用法の他に、強意の用法がタイ語でみられる。隅田（2011）で報告されているように、強意語が動詞に後続することによってその動詞³³の程度の強さを強調することができる。その強意語は隅田（2011）で擬態語として扱われている。しかし、その全ての強意語は擬音語と全く関係がないわけではなく、その中に擬音語から派生されたものもあると考えられる。例えば、（3-7b）と（3-7c）である。（3-7a）の *póok* は硬いものがぶつかる音を模写する擬音語であるが、（3-7b）と（3-7c）は隅田（2011）に挙げられた *khěŋ*（硬い）と共起する強意語である（p.115）。しかし、この強意語の *póok* は、（3-7a）のような擬音語と全く関係のない同音異義語とみなすことが難しく³⁴、上記の擬音語から拡張されていると考えられる。その拡張は予期的認知によると考えている（2.2.3 節や三上（2006）を参照）。

例えば、（3-8a）の「かちかち」は硬いものがぶつかり合った時に生じた音を表している。（3-8b）では物体が硬くなることを表しているものの、音は全くない。ところが、かちかちに凍った洗濯物が何かに当たったりすると「かちかち」という音がするに違いないと思われるほど硬く凍っているという意味を表している。このように、「かちかちという音を立てそう」という予期は予期的認知であると三上（2006）によって指摘されている。（3-7b）の *póok* の場合も同じであり、そこでは音を表していないにも関わらず、「当たっていれば *póok* /という音がするであろう」と予期できるほど、その硬さの強さを強調しているのである。また、（3-7c）のような「通貨の上昇」を「硬さ」に喩えるメタファー表現においても、*póok* を用いることで、その上昇の程度の大きさを強調することが可能である。つまり、*póok* は硬さと共起する強意語として慣習化しているのである。現実世界で音が生じるはずのない抽象的な概念であっても、「硬い」という表現があれば、*póok* を用いることができる。

³³ 隅田（2011）では「形容詞」と記述されているが、本稿では「動詞」と呼ぶことにする。タイ語の形容詞の位置づけに関してはこれまで多くの議論がなされてきた。タイ語では動詞と形容詞が形式的な違いがなく、統語上での振る舞いが酷似しているため形容詞は動詞の下位分類（*adjectival verb*）とされている（Prasithrathasint 2000; 2010）。

³⁴ また、Matichon Dictionary (2017 Edition)では、「物が強く衝突する時の」という擬音語の語義と「すごく（非常硬いさまを強調する）」という強意語の語義が同じ *póok* の下で列挙されている。

(3-7) a. taa chák dâamphaaj tii hũa jaaj đạj pók (NACHM037)

祖父 引っ張る 櫓 叩く 頭 祖母 音がする ONM

祖父は櫓を引っ張って、祖母の頭をポカッ（という音がして）叩いた。

b. májkradaan khěj pók (NWCOL017)

板 硬い すごく

板がすごく硬い。

c. ɣynbàat khěj pók rỏp kâaw duan

パーツ 硬い 通貨が上昇する すごく ぶり 9 ヶ月

(<https://pantip.com/topic/43604963>)

パーツが9ヶ月ぶりに大幅に上昇した。

(3-8) 基本義：金属質の堅い物体と物体とが軽く小刻みに連鎖して打ち当たる音・ようす。

a. 干した洗濯物のボタンが窓力がラスにかちかち当たっている。

拡張義①：柔軟であるべきものが非常に堅くなっているようす。

b. ゆうべの寒さで外に干してあった洗濯物がかちかちに凍ってしまった。

拡張義②：考え方がんこであったり、神経が緊張したりしているようす。

c. 面接試験ではかちかちに緊張してろくに答えられなかった。

(三上 2006: 212-213 変更は筆者による)

3.2.2.2 文外独立用法

本節では擬音語の文外独立用法を紹介する。タイ語では、擬音語単体で文から独立して出現することができる（Surachit (2014)）によって述べられている。タイ語には句読点のような文区切り記号が存在せず、一般的に文境界は空白によって示される。この独立用法で現れる擬音語は後、あるいは前（あるいはその双方）に間隔が置かれている。具体的な例は（3-9）である。（3-9a）と（3-9b）でみられるように、擬音語は説明文の前後に現れることが一般的である。しかし、（3-9c）のように説明文（あるいは関連する文）の間に出現する場合もあると Surachit (2014) によって指摘されている（p.128）。

(3-9) a. เผาะเผาะเผาะ น้ำต่าุ่น ๆ ของเอบริลไหลอาบแก้มนวล

phò?phò?phò? nàmtaa ʔùn ʔùn khǒŋ ʔeebrin lǎj ʔàap kêem

ONM 涙 温かい 温かい GEN (人名) 流れる 浴びる 頬

nuan (PRNV129)

滑らか

ポタポタポタ。エブリルの温かい涙が滑らかな頬をつたった。

b. ได้ยินเหมือนเสียงเด็กร้องไห้ อุ๊วอุ๊ว

dājjin mǔan sǎŋ dèk róŋhāj ʔuwéʔuwé (NACHM082)

聞こえる 似ている 音一声 子ども 泣く ONM

子どもの泣き声のような声が聞こえる。オギャーオギャー。

c. ไ้เด็กบ้า แง ๆ ฉันทเกลียดเด็กจริง ๆ

ʔāj dèk bāa ɲɛɲɛ chǎn kliat dèk ciŋ ciŋ (PRNV061)

野郎 子ども バカ ONM 私 嫌う 子ども 本当に 本当に

なんてバカな子。エーンエーン。私は本当に子どもが嫌いだ。

3.2.2.3 動詞用法

本節では擬音語の動詞用法について論じる。Akita (2009b) では語彙的類像性の階層が提案されており、形式と指示対象の間の類像性が高く、一般語からの逸脱の度合いが高い日本語の擬音語は、節の核（述語とその項）になりにくいという制限（Anti-Iconicity Constraint）があるとされており、日本語の擬音語の品詞は動詞、形容詞、名詞に変わりにくい³⁵。一方、タイ語では擬音語が動詞や名詞（詳細は 3.2.2.4 節で述べる）として機能することが多くみられる。

タイ語の擬音語は日本語の「～する」のような動詞の組み入れを必要とせず、そのまま動詞として機能することができる。（3-10b）（3-10c）と（3-11）はその例である。（3-10a）の puŋpaŋ は、もともと物が強く衝突する音を表す擬音語であるが、（3-10b）の puŋpaŋ は動詞として機能しており、物を蹴

³⁵ ただし、全ての日本語の擬音語が節の核になり得ないというわけではない。例えば、「ギャギャ」や「ザワザワ」など比較的類像性が低い擬音語は動詞として機能する（「ギャギャする」「ザワザワする」）場合もあると Akita (2009b) によって述べられている。

ったり叩きつけたりする行為³⁶を指示する意味に拡張している。また、(3-10c)ではすぐ物に当たるような怒りっぽい性格を表すようになった。脚注 33 で述べたように、タイ語では形容詞が想定されておらず、動詞の下位分類として扱われているため、(3-10b)と(3-10c)は動詞である。しかし、(3-10b)はその動作を表すのに対し、(3-10c)は属性、性質の意味をもっている。

- (3-10) a. sǎaŋ pratuu thîi thùuk phlāk kratêek paj daŋ **puŋpaŋ** (BIO042)
音 ドア REL PASS 押す ぶつかる 行く 音がする ONM
押しつけられて、(何かと)ぶつかっていったドアが、バンバンという音がした。
- b. khaam kròot kùapcà? thamhāj khāw tōŋ sabāt nāa
NMLZ 怒る ~そうになる CAUS 彼 ~なければならない 振り払う 顔
kràatkriaw lē? **puŋpaŋ** ?òok càak hōŋ (PRNV046)
怒り狂う そして 物を強くぶつける 出る から 部屋
怒りの結果彼は顔を振り払って狂って、そして(何かを)強くぶつけて部屋から出そうになった。
- c. càak phūujīŋ ?ōonwāan jūakjen klaaj pen ?aarom ráaj
から 女性 物腰が柔らかい 冷静 移行する ~になる 機嫌 悪い
lē? **puŋpaŋ** jàaŋ māj mii hètphōn (ACHM005)
そして 怒りっぽい ADVLZ NEG もつ 理由
物腰が柔らかく冷静な女性から、理由がなく機嫌が悪く、怒りっぽくなった。
- (3-11) tèe phūichaaj klōt pii sǒŋphansipcèt sǎan nōŋsǎaw ?uwée pii
しかし 兄 産まれる 年 2017 一方 妹 生まれる 年
sǒŋphansippèet (<https://pantip.com/topic/37243080>)
2018

³⁶ (3-10b) の **puŋpaŋ** は単に物を強くぶつける行為を表すだけでなく、使役者の心理状態も表していると考えられる。Thai National Corpus (Third Edition)を調査した結果、行為を表す **puŋpaŋ** が出現した用例はほとんど怒りと関わっていることが確認された。このことから、(3-10b) の **puŋpaŋ** は、怒りや不満の感情を表出することによって、物を強くぶついたり地団駄を踏んだりする行為を指す語であると考えられる。

しかし、兄は 2017 年に産まれる一方、妹は 2018 年に生まれる。

(3-11) の ʔuwée は (3-9b) と同じ語である。しかし、ここではその擬音語が動詞の位置に出現し、「生まれる」という意味をもつようになった。ʔuwée という擬音語は赤ちゃんの産声・泣き声を模倣するものであるため、その声と出産の間に時間的な隣接性があると考えられる。そのため、(3-11) はメトニミーによる拡張であると考えられる。

また、擬音語は状態変化を表すために、動詞として使用される場合がある。例えば、(3-12a) で見られるように、bũm は基本義として、石などの固体が水中に落下した時に生じた音を表している。しかし、(3-12b) のように動詞として後続節の状態変化を表しているのである。(3-12b) のような意味拡張に対して三上 (2006) の痕跡的認知による拡張を用いて説明することができる (2.2.3 節を参照)。

三上 (2006) では痕跡的認知によるオノマトペの意味拡張の用例として (3-13) が挙げられている。(3-13c) でみられるように、現実世界においては実際にぶくぶくという音がするかどうかことを問題とせず、水分や脂肪が膨らんだかのように、その結果膨れた状態になったという解釈が得られる。(3-12) の場合も同様に肉が落下したかのように、結果としてへこんだ状態になっている。

(3-12) a. lòn nám daŋ **bũm** (<https://pantip.com/topic/32292648>)

落ちる 水 音がする ONM

水にドボン (という音がして) 落ちた。

b. baŋkhráŋ núa bəəriween nán fəɔ con **bũm** loŋ paj

たまに 肉 辺り その 萎縮する まで へこむ 下りる 行く

kəɔ mii (NACMD102)

PRT もつ

たまにその辺りの肉が萎縮してへこんでいく場合もある。

(3-13) 基本義：盛んに泡立つ音 ようす。また、音や泡を立てて沈むようす。

a. 熱せられたフラスコの中の液体は**ぶくぶく**泡立ちはじめた。

拡張義①：口中に液体を含んで、ほおをふくらませながらすすぐ音・ようす。

b. 食事のあとのお茶で**ぶくぶく**と口をすすぐせはみっともないよ。

拡張義②：脂肪、水分、衣類などで体がふくれているようす。ぶざまな感じとしていう。

- c. 社長という人は**ぶくぶく**としていて、歩くのもたいぎそうなようすだった。

(三上 2006: 209 変更は筆者による)

3.2.2.4 名詞用法

擬音語の名詞用法には、単独名詞用法、複合名詞用法、**kaan・khwaam** という名詞化標識との結合による名詞化用法という 3 種類が確認される。単独の名詞は、擬音語単体で名詞として機能する用法であり、例えば (3-14b) と (3-15b) である。**ʔòt** は、チャイムの音を表す擬音語であるが、(3-14b) でみられるように呼び鈴という名詞として機能する場合もある。(3-15) の **wǎw** も一般的に警告音の擬音語であるものの、(3-15b) のようにその警告音を発する音源、つまりサイレンを指し示す名詞として使用されている。

- (3-14) a. **ʔòt** najthiisùt kôw phákthiəŋ (PRNV068)

ONM やつと PRT 昼休み

コーン。やつと昼休みだ。

- b. léew dɔɔn thǔuu hīw paj kòt **ʔòt** hōwŋ thɔɔ (PRNV074)

そして 歩く 持つ 手にさげる 行く 押す 呼び鈴 部屋 彼女

そして (それを) 運んで歩いて行って、彼女の部屋の**呼び鈴**を押した。

- (3-15) a. khǎw pɔɔt sajreen tuənpəhəj **wǎw** dan mǎak

(BIO001)

彼 つける サイレン 警告 ONM (音が) 大きい とても

彼が警告のサイレンをつけた。ウーウーウー。とてもうるさい。

- b. phəw **wǎw** maa raw kôw paj loŋ lǔmlòppəhəj (BIO013)

時 サイレン 来る 私達 PRT 行く 下りる 防空壕

サイレンが (鳴って) きたら、私達は防空壕に降りていった。

- c. phəw loŋ maa phūaknii lúat tem lɔɔj **rót** kôw

時 下りる 来る 彼ら 血 満ちる 全く 車-サイレン PRT

maa ráp paj (NWCOL119)

来る 迎える 行く

(階段を)降りてきたら、彼らが完全に血まみれだ(というのが見えた)。救急車・パトカーが(彼らを)迎えていった。

一方、(3-15c)の rótwǎo は複合名詞の例であり、ró (車) とオノマトペ wǎo を組み合わせることによって、救急車やパトカーのようなサイレンを備えた車を指す名詞として用いられている。その他の擬音語を含んだ複合名詞の用例は(3-16)のようなものであり、これらの複合名詞はその構成要素の擬音語がなければ全体の意味が失われてしまう。例えば、(3-15c)の wǎo がなければ、救急車という意味がなくなる。また、(3-16a)の malɛŋwii (小蠅)は wii というオノマトペがなくなると、その意味が失われ、単に虫を指すことになるのである。

- (3-16) a. malɛŋ (虫) + wii (虫が飛ぶ際に羽から生じた音の擬音語) → 小蠅
b. khanǒm (お菓子) + túptáp (殴る・打つ音の擬音語) → 杵で作られたタイのお菓子
c. klɔŋ (ドラム) + tók (ドラムから発する音の擬音語) → ドラムの一種
d. phát (炒める) + chàa (油が弾ける音の擬音語) → 強火で調理されたタイの炒め物

また、動詞用法のある擬音語は、一般語彙の動詞と同様に kaan・khwaam という名詞化標識と結びつくことにより、名詞として機能することができる。kaan に後続する場合は、動名詞として働く一方、khwaam と結びつく場合は抽象的な概念、性質などを表す名詞として機能する。例えば、一般語彙動詞 rák (愛する)の前に kaan が現れると、「(誰かを)愛すること」という動名詞となるが、khwaam の場合には「愛」あるいは「愛情」という抽象的な意味を表す名詞となる。擬音語の例は(3-17b)と(3-17c)である。(3-17a)の k्रीit は子どもや女性などの叫び声を表している擬音語である。(3-17b)のように、k्रीit という擬音語には「叫ぶ」という動詞の用法がみられるが、その前に kaan を付けると、「叫ぶこと」という動名詞として働く。一方、(3-17c)の k्रीit は(3-17b)と違い、「懂れる」、「情熱を注ぐ」という意味をもっている。芸能人に対して好意や応援を表すために、歓声を上げるという背景知識が共通されているため、この場合の k्रीit はメトニミーによる拡張であると考えられる。また、その k्रीit

は (3-17c) のように *khwaam* に付くことで、「情熱」という抽象的な意味を表す名詞として働いている。

- (3-17) a. *baaŋ khon ʔaat rɔɔŋ krítkrít hàak khâw paj*
 一部 CLF ～かもしれない 泣く ONM もし 入る－接近する 行く

ʔûm rǔuu sǎmphàt tua (NACMD086)

負う または 触れる 身

一部（の子ども）はおんぶされたり身を触れたりすると、**キャーキャー**と泣くかもしれない。

- b. *kaan krít mii dǎj sǎɔŋ bɛɛp bɛɛp rêek krít phrɔʔ chɔɔp*
 NMLZ 叫ぶ もつ 可能 2 種類 種類 最初 叫ぶ から 好き

bɛɛp lǎŋ krít phrɔʔ klua (NWCOL008)

種類 後 叫ぶ から 怖い

叫ぶことには二つの種類があることがあり得る。最初の種類は、好きだから**叫ぶ**のだ。

もう一つの種類は怖いから**叫ぶ**のだ。

- c. *radàp khwaam krít khɔɔŋ fɛɛn fɛɛn cuŋ nɔɔj kwàa ʔajdɔɔn*
 度合い NMLZ 懂れる GEN ファン ファン 従って 少ない より アイドル

(<https://pantip.com/topic/30507020>)

（俳優に対する）ファン達の**情熱**の度合いがアイドルより小さい。

3.2.2.5 類別詞用法

本節ではタイ語にみられる類別詞の用法を説明したい。(1-1f) で示したように、タイ語では擬音語が類別詞として機能する場合が少なくない。Phanthumetha (1982) は類別詞を、「名詞や動詞をいくつかの種類・グループに分類する語類であり、その前の位置にある名詞や動詞の性質や特徴を示す役割を担っている」(p. 37) と定義しており、類別詞として機能する擬音語は、動作を行った際に生じる音に基づいて分類を行う類別詞の一種である (p. 44) と述べている。また、類別詞として働く擬音語は、ほとんど1音節のものであると Surachit (2014) によって指摘されている。類別詞用法の擬音語の用例は、(3-

18b) と (3-19) である。(3-18a) でみられるように、fɔ̌t は一般的に頬をキスする時の音を表しているが、(3-18b) では類別詞として、頬をキスする回数表現するのに使用される。また、(3-19) の pook は (3-7a) のように硬い物体が接触する音を表すことが一般的であるが、ここでは衝突の回数を数えるのに用いられる。これらは、游 (2014) に提案された外部原因音のフレーム (cf. 図 2-3c) の中にそのような要素がみられないが、キス・衝突の音とキス・衝突の回数が同時に起こり、その間に隣接性があるため、メトニミー拡張であると考えられる。

- (3-18) a. ʔiaŋ camùuk hɔ̌m kɛ̌m nóŋsǎaw daŋ fɔ̌t
 傾ける 鼻 息を吸い込む 頬 妹 音がする ONM
 (<https://pantip.com/topic/35237355>)

鼻を傾けて妹の頬をチュッと (という音を立てて) キスした。

- b. chǎn ráp ɣɯn nǎn maa léew hɔ̌m kɛ̌m phǐisǎaw
 私 受け取る お金 その 来る そして 息を吸い込む 頬 姉
 paj nùŋ fɔ̌t (PRNV085)
 行く 1 回

私はそのお金を受け取った。そして姉の頬を1回キスした。

- (3-19) winsǎn tòkcaj jók lôo fǎat hǔa kòŋ nùŋ pook
 ウィルソン (人名) 驚く 持ち上げる 盾 打つ頭 先に 1 CLF
 (<https://pantip.com/topic/41856846>)

ウィルソンが驚いて、盾を持ち上げて、ひとまず (盾で敵の) 頭を1回打った。

以上で示したように、タイ語における擬音語はさまざまな文法的環境に出現することが確認できる。このように擬音語がさまざまな品詞として機能することができるは、多様な意味に派生し得ることを示唆していると考えられる。第5章では、擬音語から拡張された語義の実例を提示し、分析を行いたい。

4. 研究内容

本章では、4.1 節で本研究の分析対象の概要（擬音語と用例）について紹介する。その後、4.2 節で研究方法を提示する。

4.1 本研究の分析対象

現時点ではタイ語のオノマトペをまとめた辞書が見当たらないため、本研究で分析対象とした擬音語は、Thai Royal Institute Dictionary（2011 Edition）と Matichon Dictionary（2017 Edition）から手作業で収集している。また、擬音語を選別するにあたっては、（3-1）で示されたオノマトペの音韻形態的特徴と表 3-2 の擬音語の音韻形態パターンを参考にしながら、辞書で記載された語義が「音」あるいは「声」と関わっているか否かを確認している。また、その語が *daŋ*（「～（という）音がする」を表す動詞）と共起可能かどうかを選定基準の一つとしている³⁷（3.2.2.1 節を参照）。

（1-2）でみられるように、辞書での記述の不十分さにより、実際に聴覚的情報を含むにもかかわらずその語義が記載されていない可能性があると考えられる。それを踏まえて、本研究で最も重視する選定基準は、*daŋ* 動詞との共起である。例えば *təʔtəʔ* は、（4-1）のように、Thai Royal Institute Dictionary（2011 Edition）と Matichon Dictionary（2017 Edition）には聴覚に関する語義が含まれていない。しかし、*təʔtəʔ* は、それらの様態の他に、子どもなどの足音も表していると考えられ、（4-2）のように *daŋ* と結びつくことができる。そのため、本研究では *təʔtəʔ* のようなものを擬音語として採用し、分析対象としている。

（4-1） a. Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) による *təʔtəʔ* の定義（日本語訳は筆者による）

①（副詞）子どもが歩き始める時の様子。例えば、*daŋm təʔtəʔ*（よちよち歩く）。*kra təʔkratəʔ*、*təʔtəʔtəʔtəʔ* ともいえる。

②（副詞）少ない元手で博戯をしたり商売をしたりして、それを大きく増やしていくさま。例えば、*lən təʔtəʔ*（少ない元手でギャンブルする）。*kháakhăaj təʔtəʔ*（少ない元手で商売する）。

b. Matichon Dictionary (2017 Edition) による *təʔtəʔ* の定義（日本語訳は筆者による）

³⁷そのため、本研究の分析対象となる擬音語は全て副詞用法をもっているわけである。

(副詞) 少しずつ自立し、ゆっくりと物事が進み始めるさま。

- (4-2) nũunóoj taa diaw níi cà? rĩm dɔɔn taam lǎŋ khon khon nán
 少年 目 唯一 この INFER 始める 歩く つく 背後 人 CLF その
 lé? sòŋ sǎŋ dɔŋ tɔʔtè?
 そして 送る一発する 音 音がする ONM

(https://intrend.trueid.net/article/รวมคำานานที่ใ้ประโยชน์สุดๆ-trueidintrend_44483)

この一つ目の少年はその人の背後について、トコトコ（という音を立てながら）歩き始める。

本研究で収集している語彙は辞書に登録されている見出し語であり、意味に大きな違いがみられない見出し語でないもの（例えば、A型とAA型や、A型とA₁A₂型のような反復形、A₁A₂型とXA₁XA₂型のような派生形など）は同一の見出し語に含まれるものとみなす。ただし、見出し語として立項されていないが、見出し語とは意味の派生が異なるものと判断したものは、別の語として扱うことにする。

例えば、(4-3)の **pung** (A型) は (4-4)の **pungpan** (A₁A₂型) (cf. (3-10)) の見出し語であり、いずれも強く衝突する音を表している ((4-3a) と (4-4a))。しかし、(4-3b) でみられるように、**pung** は様態（勢いよく間をおかず進み続けるさま）のみに拡張しているのに対し、(4-4b) と (4-4c) での **pungpan** はその動作（何かを強くぶつける）や心理状態（怒りっぽい）を表しており、意味拡張のパターンが異なっていることがわかる。そのため、本研究では **pungpan** を **pung** と別の語としてみなすことにする。

- (4-3) a. **pungpungpung** nǎjsũuu sǎam tân thùuk krathêek waan bon tó? (PRNV099)
 ONM 本 3 CLF PASS ぶつける 置く 上 テーブル
 バンバンバン。三つの山盛りの本が叩きつけられるようにテーブルの上に置かれた。

- b. chǎn phút lé? kǎaw **pungpung** nam nǎa khǎw (PRNV084)
 私 話す そして 歩む ドシドシ 先に行く 前 彼
 私は話して、そして彼の前をドシドシと歩いていった。

- (4-4) a. sǎŋ pratuu thîi thùuk phlǎk kratêek paj dɔŋ **pungpan**
 音 ドア REL PASS 押す ぶつかる 行く 音がする ONM

(BIO042) (cf. (3-10a))

押しつけられて、(何かと) ぶつかっていったドアが、バンバンという音がした。

b.	khwaam	kròot	kùapcàʔ	thamhâj	khăw	tôŋ	sabàt	nâa
	NMLZ	怒る	～そうになる	CAUS	彼	～なければならない	振り払う	顔
	kràatkriaw	lêʔ	pungpaŋ		ʔòok	càak	hôŋ	
	怒り狂う	そして	物を強くぶつける		出る	から	部屋	

(PRNV046) (cf. (3-10b))

怒りの結果彼は顔を振り払って狂って、そして(何かを) 強くぶつけて部屋から出そうになった。

c.	càak	phûujîŋ	ʔòonwāan	júakjen	klaaj	pen	ʔaarom	ráaj
	から	女性	物腰が柔らかい	冷静	移行する	～になる	機嫌	悪い
	lêʔ	pungpaŋ	jàaŋ	mâj	mii	hètphôn	(ACHM005)	(cf. (3-10c))
	そして	怒りっぽい	ADVLZ	NEG	もつ	理由		

物腰が柔らかく冷静な女性から、理由がなく機嫌が悪く、怒りっぽくなった。

また、同じ形式であっても、その語によって指し示された音の間に有意義な関係がないと判断した場合には、別の語としてみなす。例えば、図 4-1 で示されているように、cók には a. 鶏が痛みを感じた時の鳴き声³⁸や、b. 水が静かに流れる音、c. お腹が鳴る音という三つの用法が確認される。c. のお腹の音は腸内の流動体の移動によって生じたものであるため、b. の水の流れる音との間に共通点を見出すことができ、d. のように抽出することが可能である。しかし、a. の鶏の鳴き声は b. と c. との関連性を見出すことができず、一般化することができない。そのため、本研究では鶏の鳴き声を表す cók①と、流動体の移動によって生じた音を表す cók②を別の語(同音異義語)として扱うことにする。また、本研究では、游(2014)と同様に、cók②を二つの意味をもっている多義語としてみなすことにする。

³⁸ タイ伝統的な文化には闘鶏という雄の鶏を戦わせる競技があり、現在まで続いている。鶏が攻撃され痛みを感じた際に cók という鳴き声を発するが、このことから cók は鶏の鳴き声の他に、「降参する」「負ける」という意味をもっている。この意味拡張は、「痛みによる鳴き声」と「敗北する」という事象の間の因果関係に基づくメトニミーであると考えられる。

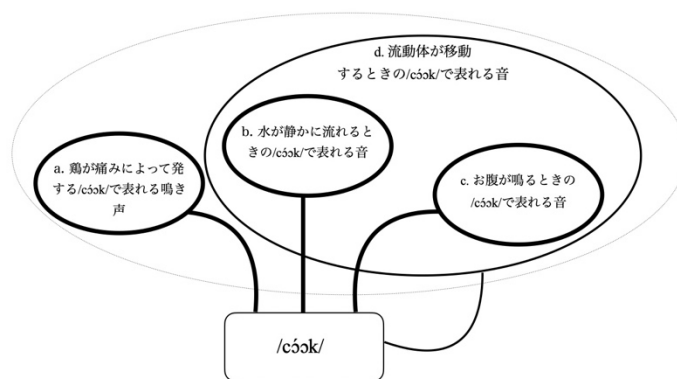


図 4-1 cɔɔk の多義性³⁹

基本義の設定については、井上（2010）によって述べられているように、意味の派生においては擬音語が擬態語に拡張することが一般的であり、その逆の方向の拡張は文学作品など奇抜な表現以外ではほとんど起こらない。それを踏まえ、本研究では擬音語の基本義を全て音・声を表すものに設定する⁴⁰。なお、上記の cɔɔk②のような擬音語はすでに述べたように、本研究では多義語として扱うことにしたが、cɔɔk②のように多くの音・声を表す（あるいは Akita（2013）と游（2014）の「意味特定性が低い」）擬音語は靱山（2021）の「同音異義語寄りの多義語」⁴¹に該当すると考えられる。靱山（2021）によって指

³⁹ 図 4-1 を作成する際に、Tuggy（1993）の figure 3（p.281）（cf.図 2-1）と游（2014）の図 4-12（p.81）を参考にしている。

⁴⁰ また、擬音語の基本義が音・声を表すもののもう一つの根拠としては、語彙的類像性の階層とその習得の段階との関係にあると葉（2024）によって指摘されている。3.2.2.3 節で述べたように、語彙的類像性の階層が Akita（2009b）によって提案されており、形式と指示対象の間の類像性が高く、一般語彙からの逸脱の度合いが大きい順に、臨時的擬音語、擬音語、擬態語、擬情語、一般語彙である。Akita（2009a）が幼児の発話記録のコーパスを調査した結果、類像性の高い擬音語は、より類像性の低い擬態語、擬情語と比較して産出が早いことがわかる。また、基本義は言語習得の早い段階で獲得されると瀬戸（2007）によって指摘されている。それを踏まえると、より早い段階で習得され、かつ類像性の高い音・声を表すものは、擬音語の基本義であると考えられる。さらに、武田（2001）においても擬音語と擬態語の両方で機能するオノマトペの基本義は、音を表す語義と想定されており、その理由として「実際の音の模倣が起源」（p.107）であることが挙げられている。

⁴¹ 同音異義語寄りの多義語は、それぞれの意味の自立性が高いが、その意味同士の関連性が弱いという性質もつことが特徴的であり、「たずねる」がその例として靱山（2021）によって挙げられている。「*A さんのお宅をたずね、例の件についてそうすることにした。」（p.47）の文が非文と判断されるのは、その二つの意味から抽出されたスキーマを連想しにくいためである。cɔɔk②にそのテストを援用してみると、以下で示したように非文になり（筆者の他に、5 人のタイ語母語話者インフォーマントに確認したところ、全員が許容できないと回答した）、cɔɔk②も同音異義語寄りの多義語と考えられる。

*chǎn	dǎjjin	sǎŋ	nám	lǎj	cɔɔkcɔɔk	lêʔ	dǎjjin	sǎŋ	tóŋ	róŋ
私	聞こえる	音	水	流れる	ONM	そして	聞こえる	音	腹	鳴る
bèepnán	mǔʔankan									

摘されているように、同音異義語寄りの多義語は、二つ（以上）の基本義をもっており、cók②の場合にはb.水が静かに流れる音とc.お腹が鳴る音という二つの基本義があると考えられる。

また、本研究で擬音語の語義を分析するのに用いた用例は、Thai National Corpus (Third Edition)（以降、TNC と呼ぶことにする）とネット掲示板から収集しているものである。本件研究ではサンプル ID や URL を用例の後ろに記載することにした。

4.2 研究方法

1.3 節や 2.3 節で述べたように、本研究はタイ語における意味拡張の起こりやすさ・起こりにくさを規定する要因について検討したいため、Akita (2013) と游 (2014) の研究方法を参考にし、以下の手順で研究を進めたい。

- (I) Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) と Matichon Dictionary (2017 Edition) から擬音語を収集する（判断基準については 4.1 節を参照）。また、その擬音語が出現した用例を TNC・ネット掲示板で検索し、収集する。
- (II) 収集された擬音語の意味を辞書における定義および TNC・ネット掲示板における使用実態を通して確認し、その基本義を設定する。
- (III) それぞれの擬音語が游 (2014) のどのフレームに該当するのかを検討するために、游 (2014) のように、外部原因音、内部原因音、声に分類し、そのフレームを特定する（2.3 節を参照）。また、その意味的特定性を検討するためには、2.3 節で述べたように、游 (2014) の判断基準を主に援用することにした。しかし、より正確に特定性の度合いを捉えるために、游 (2014) の「特定レベル」を「特定レベル（複数）」と「特定レベル（限定）」に再分類することにした。それらの分類は以下の（4-5）のように整理されている。

そのように 同じように

私は水が**ちょろちょろ**と流れる音が聞こえ、お腹が**そのように**鳴る音も聞こえる。

cók という擬音語を耳にすれば、b.水が静かに流れる音と c.お腹が鳴る音という意味を想起することができる。また、その二つの共通点として「d.液体が移動する音」というスキーマを抽出できたとしても、実際に cók を聞くだけでそのスキーマまで想起するのが具体的な意味と比べて相対的に難しい。

(4-5) a. 外部原因音・内部原因音を表す擬音語

- ① 「一般レベル」：擬音語から無生物であることを特定できる。例えば、khroom（何かの勢いの強い働きかけによって生じた大きい音を表す擬音語）、prian（何かの勢いの強い働きかけによって生じた大きい音を表す擬音語⁴²⁾）。
- ② 「性状レベル」：擬音語から流動体、気体、液体、固体など音源の性質の状態の範囲を特定できる。例えば、fi（気体が移動する時に生じた音を表す擬音語）、chùut（液体が噴出する時に生じた音を表す擬音語）pook（硬いものがぶつかる音を表す擬音語）。
- ③ 「特定レベル（複数）」：擬音語から音源の形状や触感、材質を特定できるが、そこから指し示される音源は限定されておらず、「特定レベル（限定）」に比べて指定範囲が広い。例えば、khlùkkhlàk（丸いものが容器の中で転がった時に生じた音を表す擬音語）、krùp（歯応えのあるものを食べた時に生じた音を表す擬音語）、khwèek（布や紙のような薄いものを破った時に生じた音を表す擬音語）。
- ④ 「特定レベル（限定）」：擬音語から特定の音源を特定でき、そこから指し示される音源は限定的である。例えば、kùpkàp（馬の足音を表す擬音語）、piin（車のクラクションの音を表す擬音語）、nèɛŋ（銅鑼が叩かれた時の音を表す擬音語）、píaw（矢が空気を切り裂く音を表す擬音語）。

b. 擬声語

- ① 「上位レベル」：擬音語から上位レベルに属する有生物の音源を特定できる。例えば、ciawcáaw（人間や鳥、猿、ネズミなどが騒ぐ声を表す擬声語⁴³⁾）、hòok（動物（犬や虎、狼など）が威嚇する際に発した声を表す擬声語）。

⁴² Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) では khroom を「大きくて重いものを投げ捨てた時の音」と定義しているが、(5-7) でみられるように、khroom の使用実態を調査すると「投げる」といった動作から生じた音のみを指し示すのではなく、また大きくて重い固体に限定されているとはいえない。そのため、ここでは「何かの勢いの強い働きかけによって生じた大きい音」とし、「一般レベル」に分類した。また、prian も同じように辞書では「落雷の音」と定義されているが、prian の使用実態を調査すると、落雷の他に例えば銃を撃った音や、殴打の音、車の衝突音など勢い強く衝突する音として用いられる用例が多く確認される。そのため、prian も「一般レベル」とする。

⁴³ Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) では ciawcáaw の音源を女性や子供にしているが、ciawcáaw の使用実態を調べると、女性や子供の他に鳥や猿などの用例が多くみられるため、本研究では「上位レベル」に分類した。

②「基本レベル（複数）」：擬音語から基本レベルに属する有生物の音源を特定できるが、そこから指し示される音源は限定されておらず、「基本レベル（限定）」に比べて指定範囲が広い。例えば、hōŋ (犬の鳴き声を表す擬声語)、mīaw (猫の鳴き声を表す擬声語)、wīt (人の甲高い怒鳴り声を表す擬声語)。

③「基本レベル（限定）」：擬音語から基本レベルに属する有生物の音源を特定でき、そこから指し示される音源は限定的である。例えば、ʔōʔē (赤ちゃんが発する喃語を表す擬声語)、ʔuwē (赤ちゃんの産声や泣き声を表す擬声語)、ŋàaw (雄の猫の声を表す擬声語) ʔiŋ (子犬の声の擬声語)

(IV) 游 (2014) のフレームを参考にしながら、語の多義性を確認し、その派生はフレーム内の要素の間の転移（メトニミー拡張）によるか、フレーム間の対応関係（メタファー拡張）によるか考察を行う。

(V) 拡張パターンを一般化し、それぞれのフレームは異なるパターンをもっているか分析を行う。また、Akita (2013) と游 (2014) によって提唱された擬音語を規定する三つの要因以外、他の可能性があるのか考察を加える。

本研究で語義の分析対象とした用例は主に TNC から収集した。しかし、同コーパスの収録資料の大部分は 1998～2007 年（1998～2007 年に書かれたものは 90～100%、1988～1997 は 0～10%、1988 年より以前は 0～5%、Aroonmanakun 2007:153, 159）であり、年代的な差異がほとんどみられない。そのため、語の意味拡張を通時的な検討を行うことが難しく、本研究における考察は共時的な観点に基づいて行う。

なお、(IV) の手順を行う際に、擬音語の意味が音と様態を完全に区別することができず、一つの擬音語が両者の意味を複合的に含んでいる場合がある。これは、秋田 (2022; 近刊) によって指摘されているように、現実世界において音と動きが同時に生起することが一般的であるためである（脚注 3 を参照）。しかし、タイ語の辞書は定義の不十分さにより、音とその動的様態を十分に記述していない可能性があると考えられる。擬音語の意味をできるだけ正確に確認できるように、秋田 (2022) によって提

案された各感覚のファセット性を確認するテストを援用することにした⁴⁴。そのテストの例は (4-6) や (4-7) で示している。(4-6) を援用すると (4-8) のようになる。(4-8a) では聴覚的情報を、(4-8b) では視覚的情報を、それぞれ他の感覚領域に混同されず、確認することができる。同様に、(4-9a) では聴覚的情報を、(4-9b) では触覚的情報を確認できる。

(4-6) a. 隣の部屋からスープをコトコトと煮込んでいるのが聞こえた (音)。

b. サイレント映画で、スープをコトコトと煮込んでいるシーンを見た (動き)。

(秋田 2022: 218)

(4-7) a. つぶ貝を食べる友達のほうからコリコリといい音が聞こえた (音)。

b. つぶ貝は、自分の咀嚼音が聞こえないほどうるさい飲み屋で食べても、コリコリと感じた (歯触り)。

(秋田 2022: 220)

(4-8) a. chǎn dǎjǐn hōŋ khāaŋ khāaŋ tham khéek lòn daŋ phlè?

私 聞こえる 部屋 隣 隣 CAUS ケーキ 落ちる 音がする ONM

私は隣の部屋 (の人が) ケーキをべちゃっと (という音を立てて) 落としたのが聞こえた。

b. chǎn hěn siin thii dèk tham khéek lòn phlè?

私 見える シーン REL 子ども CAUS ケーキ 落ちる ぐちゃぐちゃになるさま

naj nǎŋŋiap

中 サイレント映画

サイレント映画の中で、私は子どもがケーキをぐちゃぐちゃに落としたシーンが見えた。

(4-9) a. chǎn dǎjǐn phúan khiaw ʔenkhôkàj daŋ krùpkrùp

私 聞こえる 友達 噛む 鶏軟骨 音がする ONM

私は友達が鶏軟骨をコリコリと噛むのが聞こえた。

b. ʔenkhôkàj thũŋ kin naj ráan thii sǎaŋ daŋ con mǎj

鶏軟骨 たとえ 食べる 中 お店 REL 音 (音が) 大きい まで NEG

dǎjǐn sǎaŋ tuaʔeeŋ khiaw kôo rúusùk dǎj waa krùp

⁴⁴ 聴覚情報だけを確認する場合は、(3-4) で示した daŋ との共起のテストだけで十分であると考えられるが、様態など聴覚情報以外の意味はこの daŋ のテストで確認できない。

聞こえる 音 自分 噛む PRT 感じる 可能 QUOT コリコリ

鶏軟骨は、たとえ自分の噛み音が聞こえないまで音が大きいお店の中で食べたとしても、コ
リコリと感ずることができた。

5. タイ語における擬音語の意味拡張の分析結果

本章では第4章で示した手順に基づき、タイ語の擬音語の多義性について考察を行いたい。5.1節ではAkita（2013）と游（2014）によって提唱された擬音語の意味拡張を規定する要因がタイ語における擬態語の意味拡張に適用できるか否かを検討し、5.2節ではその他の可能性について論じる。5.3節では各フレームからみられる意味拡張の行き先とその用例を提示するとともに、それらの意味拡張の行き先と各フレームとの関係について考察する。

5.1 擬音語の意味拡張を規定する要因（Akita 2013; 游 2014）とタイ語における擬音語の意味拡張

辞書から収集した246語の擬音語⁴⁵のうち、意味拡張が起きている擬音語は175語⁴⁶であり、約71.14%を占めている。この意味拡張の割合は游（2014）によって報告されている日本語（30.3%）、中国語（7.2%）の意味拡張の場合⁴⁷や、Akita（2013）によって報告されている日本語（33.33%）、韓国語（30%）、中国語（7.14%）の場合（cf. 表2-2）と比較すると、相対的に高い値を示していることがわかる。また、本研究の研究対象のその246語の擬音語の内訳は表5-1（フレーム別）と表5-2（音源の意味的特定性の度合い別）である。表5-1でみられるように、他のフレームと比べて外部原因音に属する擬音語が最も多く、半分以上の割合（56.91%）を占めていることがわかる。

フレーム		数（割合）
擬音語 (計：178 (72.36%))	外部原因音	140 (56.91%)
	内部原因音	33 (13.41%)
	外・内部原因音	5 (2.03%)
擬声語		68 (27.64%)
合計		246

表 5-1 本研究で収集したタイ語の擬音語の内訳（フレーム別）

⁴⁵ 本研究の分析対象となる擬音語は、全て本稿の付録で提示されている。

⁴⁶ この語の数には4.1節の cǎk②のような聴覚情報に関する基本義が二つ以上もつ擬音語の数が含まれていない。

⁴⁷ なお、游（2014）で報告されたのは意味の数を表しており、本研究で考察した語の数と異なっている。

表 5-2 で示したように、擬音語で最も多いのは音源の性質の状態を特定できる「性状レベル」であり、全体の 178 語のうちに、72 語（40.45%）がみられる。次いで、「特定レベル（複数）」（29.78%）、「特定レベル（限定）」（27.53%）、「一般レベル」（2.25%）という順となっている。一方、擬声語の場合、最も多いのは「基本レベル（複数）」であり、声の全体の 68 語のうち、46 語が確認されており、67.65%と大半を占めている。

このことからタイ語では、擬音語の約 70.22%は音源の性質の状態や、形状、材質など音源の特徴に対してある程度特定することができ（「性状レベル」と「特定レベル（複数）」に属する擬音語（125/178））、またその他に 27.53%の擬音語は、特定の音源を限定的に指し示すことが可能である。一方、擬声語については、游（2014）で報告された日本語、中国語の場合と同じように、上位レベルに属する音源に指定する場合は稀であり⁴⁸、多くは基本レベルに属する音源を指定しているのである。

音・声フレーム	意味的特定性	数（割合）
擬音語 (計：178 (72.36%))	一般レベル	4 (2.25%)
	性状レベル	72 (40.45%)
	特定レベル（複数）	53 (29.78%)
	特定レベル（限定）	49 (27.53%)
擬声語 (計：68 (27.64%))	上位レベル	4 (5.88%)
	基本レベル（複数）	46 (67.65%)
	基本レベル（限定）	18 (26.47%)
合計		246

表 5-2 本研究で収集したタイ語の擬音語の内訳（音源の意味的特定性の度合い別）

⁴⁸ 2.3 節で示したように、Akita（2013）では音源の意味的特定性を検討するために、意味世界の階層を問題としておらず、その擬音語の音源の種類を問題としている。Akita（2013）のその「一つの種類」が種あるいは「基本レベル」のことを指しているのであれば、日本語（11/15）（73.33%）、韓国語（13/15）（86.67%）、中国語（8/13）（61.54%）の擬声語は「基本レベル」に相当していると考えられる（Akita（2013）で意味特定性について挙げられた用例は音と関わっているため、擬声語の意味的特定性についてはあまり確認できない。）。一方、英語の場合は音源の意味的特定性が低いとされ、擬声語であっても複数の音源の種類に適用できるのは全体の 15 語のうち 11 語であり、つまり「基本レベル」に相当するものは 4 語（26.67%）しかないのである。

本節では Akita (2013) と游 (2014) によって提唱された擬音語の意味拡張を規定する要因 (2.2.4 節を参照) を検討するため、(5-1) のようにそれらの要因を再び提示し、影響が大きいとされているものの順に考察を行なっていきたい。

(5-1) Akita (2013) と游 (2014) によって提唱された擬音語の意味拡張を規定する要因

- a. 文法機能の要因 (Syntactic constraint) : 主節の核として機能する場合の方が周辺の場合より意味拡張が起こりやすい。
- b. 意味的特定性の要因 (Referential constraint) : 意味的特定性が高い場合の方が低い場合より意味拡張が起こりやすい。
- c. 事象構造 (フレーム) の複雑さ (Event-structural constraint) : フレームが複雑な (フレーム要素の数が多い) 場合の方が複雑でない (フレーム要素の数が少ない) 場合より意味拡張が起こりやすい。

(5-1a) の文法機能の要因については、2.4 節や 3.2.2 節、4.1 節で述べたように、タイ語の擬音語は一般的に副詞 (Upakit-silapasarn 1922) として認識されており、また本研究で擬音語を選別する際に *daŋ* (「～(という) 音がする」を表す動詞) と共起可能かどうかを基準としているため、本研究の分析対象の擬音語は全て副詞用法・引用用法をもっており、主節の周辺として機能している。それにも関わらず、本節の冒頭で示したようにタイ語は日本語、韓国語、中国語 (いずれの言語のオノマトペも典型的に主節の周辺として働いている; 表 2-3 を参照) より拡張の割合が比較的に高い。そのため、タイ語にみられる擬音語の意味拡張はこの要因を用いて説明することができないと考えられるため、本研究では検討しないことにする。

次に (5-1b) の意味的特定性の要因とタイ語の擬音語の意味拡張について検討を行う。(5-1b) の意味的特定性の要因を調査した結果、表 5-3 のようになる。まず、音を表す擬音語における意味的特定性について検討する。表 5-3 で示したように、割合からみると意味拡張が多く確認されたのは「一般レベル」、「性状レベル」、「特定レベル (複数)」、「特定レベル (唯一)」という順になっており、Akita

(2013) と游 (2014) の仮説に反しているようにみえる。また、フィッシャーの正確確率検定 (Fisher's exact test) で検証してみると、音の擬音語における音源の意味的特定性の各レベルの間には統計的な有意性があることが確認され ($p < .05$)⁴⁹、つまり Akita (2013) と游 (2014) の仮説と逆の結果を示しているのである。一方、擬声語の意味的特定性の意味拡張の割合はあまり差異がみられず、フィッシャーの正確確率検定で確認した結果、有意な差異がないことがわかる ($p = 1$)。

		拡張有 (割合)	拡張無 (割合)
擬音語 (計: 178)	一般レベル (計: 4)	4 (100%)	0
	性状レベル (計: 72)	63 (87.5%)	9 (12.5%)
	特定レベル (複数) (計: 53)	38 (71.7%)	15 (28.3%)
	特定レベル (限定) (計: 49)	34 (69.39%)	15 (30.61%)
擬声語 (計: 68)	上位レベル (計: 4)	2 (50%)	2 (50%)
	基本レベル (複数) (計: 46)	24 (52.17%)	22 (47.83%)
	基本レベル (限定) (計: 18)	10 (55.56%)	8 (44.44%)

表 5-3 タイ語における擬音語の音源の意味的特定性と意味拡張

また、表 5-3 における音を表す擬音語の「一般レベル」と「性状レベル」を「特定でない」グループとし、「特定レベル (複数)」と「特定レベル (限定)」を「特定」グループとして再分類すると、表 5-4 のようになる。カイニ乗検定 (Chi-square test) で検討を行ったところ、有意性がみられることがわかる ($p < .01$)。つまり、(5-1b) の Akita (2013) と游 (2014) の予測に反しているのである。それに関し
て考えられる理由は 5.2 節で論じる。

	拡張有 (割合)	拡張無 (割合)
特定でない (計: 76)	67 (88.16%)	9 (11.84%)
特定 (計: 102)	72 (70.59%)	30 (29.41%)

⁴⁹ 本研究では統計的検定としてフィッシャーの正確確率検定とカイニ乗検定を用いている。また、原則として有意水準に 5% ($p < .05$) を採用した。

($\chi^2(1, N=176)=7.95, p < .01$)

表 5-4 音を表す擬音語における「特定でない」グループと「特定」グループの意味拡張

以上で示したように、Akita (2013) と游 (2014) の (5-1b) 音源の意味的特定性は、タイ語にみられる擬音語の意味的拡張を統括的に説明する要因として有用ではないことがわかる。しかし、この要因を用いて全く説明できないわけではないと考えられる。その最もわかりやすい例は (5-2) ～ (5-4) で示しており、ここで挙げられた全ての擬音語の用例は赤ちゃん（あるいは赤ちゃんの足音）という特定の音源を指定している⁵⁰からこそ、意味拡張が起きていると考えられる。まず、(5-2a) では *daŋ* (～という音がする) 動詞と共起することから、この *tə̀tə̀* は基本義として聴覚的情報 (赤ちゃんの足音) を表していることがわかる。*tə̀tə̀* は、赤ちゃんではなく、単に人間や動物の足音を表しているだけのであれば、(5-2b) のように *tə̀tə̀* を用いて歩き始めた幼児のことを指すことはできないであろう。また、(5-2c) でみられるように、*tə̀tə̀* は研究の初期段階、あるいは未発達段階を指し示すことができる。ここでは赤ちゃんに関する背景知識 (人生の初期段階、未熟さ) が利用され、赤ちゃんと関係のない文脈で意味拡張が起きている。

(5-2) a. *nũunɔ́j taa diaw níi càʔ rĩɯm dɯɯn taam lǎŋ khon khon nán*
 少年 目 唯一 この INFER 始める 歩く つく 背後 人 CLF その
léʔ sɔ̀ŋ sǎŋ daŋ tə̀tə̀

そして 送る一発する 音 音がする ONM

(https://intrend.trueid.net/article/รวมตำนานผีญี่ปุ่นที่ไร้ประโยชน์สุดๆ-trueidintrend_44483) (cf. (4-2))

この一つ目の少年はその人の背後について、トコトコ (という音を立てながら) 歩き始める。

b. *thaaɾók khāw sùu waj tə̀tə̀* (BIO037)

赤ちゃん 入る に 年代 幼児

(とてとて・よちよち歩き出せそうな) 幼児の年代に入った赤ちゃん。

c. *ŋaan wíʔcaj thũŋ rít naj kaan fǔɔk sǐi phĩw khǔɔŋ*

⁵⁰ 本研究では (5-2) の *tə̀tə̀* は「特定レベル (限定)」に、また (5-3) の *ʔuwéɛ* と (5-4) *ʔɔɔʔéɛ* は「基本レベル (限定)」に分類する。

作業 研究 に関する 効果 について NMLZ 漂白する 色 肌 GEN
 klutãathajʔoon jaŋ jùu naj khân t̚ʔt̚ʔ jùu mãak (NACMD069)
 グルタチオン まだ ある 中 段階 初期 CONT とても
 グルタチオンの肌色を白くする効果に関する研究は、まだ非常に**初期**段階の最中にある。

(5-2c) のようなメタファーの拡張義は基本義 (5-2a) の関係をより明確化するために、2.2.2節で述べた呂 (2003; 2004) によって提案された擬音語のICMの分析 (cf. 表2-1) を参考にして、検討してみると表5-5のとおりである。表5-5でみられるように、(5-2c) は音源に関する背景知識から拡張される⁵¹。

	t̚ʔt̚ʔ 擬音語のフレーム内要素	(5-2c) において t̚ʔt̚ʔ が使われる事態
<事態の音>	子どもの足音	無し
<trajector>	子どもの足	研究
<tr に関する背景知識>	未熟、人生の初段階	未発達、研究の初期段階
<landmark>	床・道	(研究の過程)
<tr の動作>	物理的な移動：歩く	抽象的な移動：研究が進む
<tr の様態>	頼りない様子	(研究が成功するかどうかわからない様子)

表5-5 t̚ʔt̚ʔ擬音語のフレーム内要素と (5-2c) の事象の側面の照合

(5-3a) の ʔuwéeʔuwée と (5-4a) の ʔõʔêe の音源は赤ちゃんではなく、単に人間の泣き声、呂律の回らない口調で話した声を特定するのであれば、(5-3b) の「生まれる」、(5-4b) の「喃語を発する」という意味として用いることはできないと考えられる。(5-3) の ʔuwéeʔuwée は赤ちゃんが生まれた時に泣いた声ということ特定できるからこそ、その時間的な隣接性に基づいてメトニミー拡張が生じてい

⁵¹ 一方、(5-2b) のようなメトニミー拡張は単一のフレーム内要素の焦点転移によって起きているため、表 5-5 の左端で説明することができる。つまり、音そのものを表す (5-2a) から、音源の側面 (赤ちゃん) に焦点が転じるのである。

る。また、(5-4) の ʔəʔəʔə も赤ちゃんが発する声であることを指定するため、「喃語を発する」という意味として用いられる。

(5-3) a. dájjin mǔan sǎŋ dək rɔŋháj ʔuwéʔuwéʔ

(NACHM082) (cf. (3-9b))

聞こえる 似ている 音一声 子ども 泣く ONM

子どもの泣き声のような声が聞こえる。オギャーオギャー。

b. tɛɛ phǐichaaj klɔt pii sɔŋphansǐcèt sùan nóŋsǎaw ʔuwéʔ pii

しかし 兄 産まれる 年 2017 一方 妹 生まれる 年

sɔŋphansǐpèet (<https://pantip.com/topic/37243080>) (cf. (3-11))

2018

しかし、兄は 2017 年に産まれる一方、妹は 2018 年に生まれる。

(5-4) a. cɔŋ nâa khun nóp plaaj chíi nâa léʔ phûutcaa

見つめる 顔 ～さん (人名) ～ながら 指を指す 顔 そして 話す

ʔəʔəʔə (BIO026)

ONM

(子どもが) ノブさんの顔を見つめて (ノブさんの) 顔に指を指しながら ばぶばぶ話した。

b. ʔəʔəʔə jùu naj bɔʔ thii mii pháahòm hùmhòò mitchít

喃語を発する いる 中 寝床 REL もつ 毛布 包む しっかり

(LWTPS004)

しっかり毛布に包まれた寝床の中で喃語を発した。

その他に、(5-5) búm の意味拡張の場合についても、音源の特定性で説明を与えることができる。

(5-5a) でみられるように、búm は爆弾の爆発音を表している、búm は特定の音源を特定せず単に強い働きかけの音 ((5-7) を参照) を表しているのであれば、(5-5b) ～ (5-5c) のように「爆弾」や「爆発する」、「爆弾魔」を指し示すことができないであろう。

(5-5) a. cút chanuan **bum** rót phạj jáp

つける 火薬 ONM 車 壊れる ぐしゃぐしゃのさま

(<https://www.thairath.co.th/news/local/south/2497946>) (cf. (2-8b))

火薬を**ドカーン**とつけて、(その結果)車がぐしゃぐしゃに壊れた、

b. paa **bum**⁵² ráan khăaj khrûaŋkon (NWRP_FR022)

投げる 爆弾 店 売る 器具

器具を売るお店に**爆弾**を投げる。

c. plâat doon **búm** râaŋ lé? taaŋ (NWRP_CR012)

誤る PASS 爆発する 体 ぐちゃぐちゃになる 死ぬ

誤って**爆発**に巻き込まれ、体がぐちゃぐちゃになって死んだ。

c. càpkum muu**búm** damnɯɯn khadii (NWRP_CR010)

逮捕する 手-爆弾 進める 刑事

爆弾魔を逮捕して刑事手続を進める。

そのため、本節で (5-1b) の音源の意味的特定性の要因がタイ語における擬音語の意味拡張を十分に説明する要因ではないことは確認できたとしても、2.2.4節で示した意味拡張が基本義に関する情報を利用して起きているという游 (2014) の主張に否定することはできない。(5-2) ~ (5-5) で示したように、その基本義に関する情報 (音源) が特定できるから意味が拡張されているため、(5-1b) の音源の意味的特定性はこれらの場合に説明を与えるといえる。

なお、言うまでもないことではあるが、表5-3~表5-4で示したように音源の特定性が高いことは、意味拡張の絶対的な条件ではないことがわかる。最もわかりやすい例は、(5-6) と (5-7) である。(5-6) の **póok** は固体同士が接触、あるいは衝突する時に生じる音という基本義 ((5-6a)) をもっており、「性状レベル」に属しているにもかかわらず、多くの語義に拡張している。(5-6b) や (5-6c) では拡張の元は **póok** の音源の要素ではなく、その **póok** という音に伴う動作であると考えられる (詳細は5.2節で述べる)。一方、(5-6d) と (5-6e) の強意語の用法は、3.2.2.1節で述べたように「当たっていれば **póok** /

⁵² Matichon Dictionary (2017 Edition) において **bum** と **búm** を同じ語として扱っているため、本研究では同じものとしてみなした。

という音がするであろう」という予期的認知による拡張である。この場合はその音源の形状などを特定しなくても、その音源が固体でさえあれば、póokのような音が立つと想定できる。つまり、「固体」という情報だけで十分であり、特定性が高くなくても基本義の一部の情報が利用され、意味拡張が起きるのである。

- (5-6) a. taa chák dâamphaaj tii hũa jaaj đạj póok
 祖父 引っ張る 櫓 叩く 頭 祖母 音がする ONM
 (NACHM037) (cf. (3-7a))

祖父は櫓を引っ張って、祖母の頭をポカッ（という音がして）叩いた。

- b. khâaphacâw doon póok khâw thii khamàp (NACHM066)
 私 PASS ぶつける一殴る 入る一当たる に こめかみ
 私はこめかみのところに殴られた。

- c. winsăn tòkcaj jók lôo fâat hũa kòon nùŋ póok
 ウィルソン 驚く 持ち上げる 盾 打つ 頭 先に 1 CLF
 (<https://pantip.com/topic/41856846>)

ウィルソンが驚いて、盾を持ち上げて、ひとまず（盾で敵の）頭を1回打った。

- d. májkradaan khěŋ póok (NWCOL017) (cf. (3-7b))
 板 硬い すごく
 板がとても硬い。

- e. ɲynbàat khěŋ póok rôp kâaw duan
 パーツ 硬いー通貨が上昇する すごく ぶり 9 ヶ月
 (<https://pantip.com/topic/43604963>) (cf. (3-7c))

パーツが9ヶ月ぶりに大幅に上昇した。

(5-7) khroomは、何かの勢いの強い働きかけによって生じた大きい音を表しており、(5-7a) ～ (5-7d) で挙げられたようにさまざまな音源に適用することができる意味的特定性の低い擬音語であることがわかる。しかし、(5-7e) ～ (5-7g) でみられるように、拡張義を多くもっている。(5-7e) はkhroom

の音に伴う動的様態の側面に焦点を当てており、メトニミー拡張によると考えられる。また、(5-7f)は khroom の音に伴う動作とその動作の回数の中に、隣接的な関係をもっており、メトニミーによる意味拡張が起きている。一方、(5-7g)は「物事が勢いよく進んでいる様子」を表しており、(5-7e)でみられる khroom の物理的な様子の側面から拡張されており、メタファーに基づく拡張であると考えられる。

(5-7) a. rót phún ləŋ paj naj nám daŋ **khroom** (PRNV177)

車 突っ込む 下りる 行く 中 水 音がする ONM

車が水中に突っ込んで、ドーンという音がした。

b. lùukchaaj kôo wŭŋ khâw hôŋ pit pratuu daŋ **khroom** (BIO020)

息子 PRT 走る 入る 部屋 閉める ドア 音がする ONM

息子は走って部屋に入って、ドアをドーンと閉めた。

c. wajrûn sàat nám **khroom** (<https://www.sanook.com/video/clip/682849/>)

若者 かける 水 ONM

若者はドーンと水をかけた。

d. phát **khroom** kâw paj naj kəŋkhajà? (BIO035)

吹く ONM 入る 行く 中 ゴミの山

(嵐が) ゴミの山にドーンと吹き飛ばしていった。

e. raaŋ sũuŋ jàj jâm **khroomkhrrom** khûn maa bon bandaj ruan

体 高い 大きい 踏む 勢いよく強い力で 上がる 来る 上 階段 家

(PRNV051)

大きくて高い体の持ち主は、勢いよく強い力で踏んで家の階段の上に上がってきた。

f. tòj paj nùŋ **khroom** (<https://pantip.com/topic/42402114>)

殴る 行く 1 CLF

一回殴った。

g. khàaw kòmkhũuun mii jùu **khroomkhroom** (ACSS099)

ニュース レイプ もつ CONT 物事が勢いよく進んでいる様子

レイプに関するニュースはどんどん流れている。

上記の表5-5のように分析を行なってみると、基本義（（5-7a）～（5-7d））とメタファー拡張義（（5-7g））の関係は表5-6で示したとおりである。基本義は聴覚情報を表しているため、音の側面に焦点化している。一方、その音に伴う様態を表す（（5-7e））は、様態の側面に焦点が転じるのである。また、（5-7e）の「勢いよく強い力」から（5-7g）に「物事が勢いよく進んでいる様子」という意味に拡張し、<trの様態>の側面に意味拡張が起きているのである。このように、「一般レベル」に属するkhroomは、擬音語から音源を特定できないが、（5-7e）と（5-7g）の場合で示したとおり、音源以外の他の側面で意味拡張が起きる場合もあると考えられる（詳細は5.2節で述べる）。

	khroom 擬音語のフレーム内要素	（5-7g）において khroom が使われる事象
<事象の音>	強い働きかけによって生じた音	無し
<trajector>	無生物：固体（（5-7a）～（5-7b））、液体（（5-7c））、気体（（5-7d））	レイプに関するニュース
<landmark>	液体（5-7a）、固体（（5-7b）～（5-7d））	無し
<trの動作>	動作あり（物理的な働きかけ）	流れる
<trの様態>	勢いよく強い力で（（5-7g））	物事が勢いよく進んでいる様子

表5-6 khroom擬音語のフレーム内要素と（5-7g）の事象の側面の照合

なお、タイ語における擬音語の音源の各意味的特定性のレベルにみられる意味拡張の内訳は、表 5-7 で示している⁵³。表 5-7 の括弧内の数字は、メタファーあるいはメトニミーのいずれか一方のみによって拡張が生じた語彙の数を示している。全体を見ると、いずれのレベルにおいてもメタファー拡張よりメトニミー拡張が多いことがわかる。Akita（2013）と游（2014）では意味的特定性が高いほどメトニミーが拡張しやすいと述べられている。さらに、Akita（2013）では意味的特定性が低い擬音語がメトニミー拡張

⁵³ ここで示した数字は擬音語から拡張した意味数ではなく、その種類の意味拡張が起きた語彙の数を表している。例えば、pò?pè? は、「雨がまばらに落ちるさま（副詞）」と「雨がまばらに降る（動詞）」という二つのメトニミー拡張と、「（試合で）やる気がないさま（副詞）」という一つのメタファー拡張を有している。このような場合は、メトニミー拡張を1と、メタファー拡張を1としてカウントしている。

張より、メタファー拡張の方が起こりやすいと指摘されている。（一方、游（2014）では性状レベルと特定レベルの間にみられるメタファー拡張の差異を検討した結果、意味的特定性の高さはメタファー拡張の生起と有意に関与しないことがわかる。）

		拡張有	
		メタファー	メトニミー
擬音語 (計：139)	一般レベル (計：4)	2 (0)	4 (2)
	性状レベル (計：63)	17 (7)	56 (46)
	特定レベル（複数） (計：38)	5 (0)	38 (33)
	特定レベル（限定） (計：34)	7 (1)	33 (27)
擬声語 (計：36)	上位レベル (計：2)	1 (0)	2 (1)
	基本レベル（複数） (計：24)	1 (0)	24 (23)
	基本レベル（限定） (計：10)	1 (1)	9 (9)

表 5-7 擬音語の音源の意味的特定性と意味拡張の内訳

表 5-7 の結果を用いて、Akita（2013）と游（2014）の主張を否定できそうである。しかし、それらの主張を裏付けている理由にはメトニミーとメタファーの拡張メカニズムの違いに関わっている。Akita（2013）によると、メトニミーによる意味拡張は単一フレーム内に生じているため、フレームの要素が豊富、かつ特定のであるほど、拡張に利用されやすい一方、メタファーによる拡張はフレーム間の対応関係によって生じているため、メトニミーほど特定のである必要がないという（p. 34）。

Akita（2013）の理由自体は妥当であり、否定することはできない。しかし、（5-7）（とりわけメトニミー拡張である（5-7e）～（5-7f））で示したように、意味拡張は音源の意味的特定性だけで決まるものではなく、音源以外その擬音語のフレーム内要素の意味的特定性も意味拡張の問題と関与しているという可能性がある。そのため、Akita（2013）のように音源の意味的特定性だけで、タイ語の意味拡張を統括的に説明することができないと考えられる。

以上、(5-1b)の音源の意味的特定性の要因は、一部の擬音語の意味拡張を説明できる一方、絶対的な条件ではないことを示した。次に、(5-1c)のフレームの複雑さの要因はタイ語に適用できるかどうかを検討する。

タイ語における擬音語の意味拡張の割合を音（外部原因音・内部原因音）と声に分けて調査した結果、表 5-10 のとおりである。フィッシャーの正確確率検定で確認したところ、各フレームの間に統計的な有意性があることがわかる ($p < .001$)。表 5-8 でのタイ語の外部原因音の擬音語は、内部原因音より意味拡張が起こる語の数が多くみられるものの、フィッシャーの正確確率検定で検証した結果、その間に有意な差がないことが確認された ($p > .05$)。同様に、内部原因音と声の擬音語の場合もフィッシャーの正確確率検定で確認した結果、その間に統計的な有意性がないことがわかる ($p > .05$)。

		意味拡張有（割合）	意味拡張無（割合）
擬音語 (計：178)	外部原因音 (計：140)	113 (80.71%)	27 (19.29%)
	内部原因音 (計：33)	21 (67.74%)	12 (36.36%)
	外・内部原因音 (計：5)	5 (100%)	0
擬声語 (計：68)		36 (52.94%)	32 (47.06%)

表 5-10 タイ語における擬音語のフレームと意味拡張

一方、音全体と声における意味拡張を比較すると、表 5-11 のようになる。フィッシャーの正確確率検定で検討を行ったところ、有意な差異があることがわかり ($p < .001$)、つまり音を表す擬音語の方が声の場合より意味拡張が起こりやすいといえる。

	意味拡張有	意味拡張無
擬音語 (計：178)	139 (78.09%)	39 (21.91%)
擬声語 (計：68)	36 (52.94%)	32 (47.06%)

表 5-11 擬音語と擬声語の意味拡張

一見すると、タイ語における擬音語の意味拡張は Akita (2013) の主張に一致しているように見える。しかし、それは Akita (2013) が内部原因音を想定していないためである。Akita (2013) では、擬音語（本研究の外部原因音に相当する）が擬声語より意味拡張が起りやすい理由としては、音の方がフレーム内の要素がより複雑であり、フレーム内の要素が多いためであると論じられている（2.3 節を参照）。しかし、游 (2014) の図 2-3 から内部原因音のフレームは声よりフレームの要素が少ないことがわかる。そのため、表 5-11 での擬音語と擬声語の間に有意性があると確認できたとしても、最もフレーム内要素が多い外部原因音と、最も要素の少ない内部原因音の間に有意な差異がみられない限り、Akita (2013) と游 (2014) の (5-1c) の仮説に従っているとはいえない。

各フレームとその意味拡張の内訳は、表 5-12 で示したとおりである。表 5-12 は表 5-7 と同様に、いずれの場合においてもメタファー拡張よりメトニミー拡張が多いことがわかる。

		意味拡張有	
		メタファー	メトニミー
擬音語 (計：139)	外部原因音 (計：113)	27 (8)	105 (86)
	内部原因音 (計：21)	3 (0)	21 (18)
	外・内部原因音 (計：5)	1 (0)	5 (4)
擬声語 (計：36)		3 (1)	35 (33)

表 5-12 擬音語のフレームと意味拡張の内訳

また、(5-1b) の音源の意味的特定性の要因と (5-1c) のフレームの要因を合わせて検討すると、結果は表 5-13 のようにみられる。外部原因音での意味的特定性を検討すると、意味的特定性が低いほど意味拡張が起りやすいように見える。しかし、フィッシャーの正確確率検定で確認した結果、その間の差異は統計的な有意性がないことがわかる ($p > .05$)。一方、内部原因音においては、各分類の語彙の数が少なく、統計的検定で確認することができない。ただし、割合での差異が大きくなり、顕著な傾向があるようにみえない。

	拡張有 (割合)	拡張無 (割合)
--	----------	----------

擬音語 (計：178)	外部原因音 (計：140)	一般レベル (計：3)	3 (100%)	0
		性状レベル (計：67)	59 (88.06%)	8 (11.94%)
		特定レベル (複数) (計：38)	28 (73.68%)	10 (26.32%)
		特定レベル (限定) (計：32)	23 (71.88%)	9 (28.13%)
	内部原因音 (計：33)	一般レベル (計：0)	0	0
		性状レベル (計：2)	1 (50%)	1 (50%)
		特定レベル (複数) (計：14)	9 (64.29%)	5 (35.71%)
		特定レベル (限定) (計：17)	11 (64.71%)	6 (35.29%)
	外・内部原因 音 (計：5)	一般レベル (計：1)	1 (100%)	0
		性状レベル (計：3)	3 (100%)	0
		特定レベル (複数) (計：1)	1 (100%)	0
		特定レベル (限定) (計：)	0	0
擬声語 (計：68)		上位レベル (計：4)	2 (50%)	2 (50%)
		基本レベル (複数) (計：46)	24 (52.17%)	22 (47.83%)
		基本レベル (限定) (計：18)	10 (55.56%)	8 (44.44%)

表 5-13 擬音語のフレームと意味的特定性による意味拡張の比較

興味深いことに、外部原因音と内部原因音における意味的特定性レベルを再分類し、「一般レベル」と「性状レベル」を「特定でない」グループにし、「特定レベル (複数)」と「特定レベル (限定)」を「特定」グループにまとめると、表 5-14 のようになる。内部原因音の擬音語のほとんど (31/33 語 約 94.12%) は、音源の意味的特定性の「特定」グループに属しており、そのうち約 64.52% は意味拡張が起きていることがわかる。

		拡張有 (割合)	拡張無 (割合)
外部原因音 (計：140)	特定でない (計：70)	62 (88.57%)	8 (11.43%)
	特定	51 (72.86%)	19 (27.14%)

	(計：70)		
内部原因音 (計：33)	特定でない (計：2)	1 (50%)	1 (50%)
	特定 (計：31)	20 (64.52%)	11 (35.48%)

表 5-14 外部原因音と内部原因音の擬音語における「特定でない」グループと「特定」グループの意味
拡張

内部原因音の「特定でない」グループに属する数が少ないため、「特定」グループと統計的な検定で確認することはできないが、内部原因音は音源の意味的特定性が意味拡張に関与している可能性が示唆されていると考えられる。游（2014）によって提示された内部原因音はフレームの要素が少ない（図 2-3a や 2.3 節を参照）。前述したように、意味拡張は基本義の中の何らかの要素が利用されることによって起きたものであるため、内部原因音の場合、意味拡張に利用できるフレーム内要素が少なく、限られているのである。このことから、内部原因の擬音語の場合は、音源の意味的特定性が意味拡張の重要な要因であると考えられる。

（それに対し、外部原因音の場合は、フィッシャーの正確確率検定で検討を行ったところ、「特定でない」グループと「特定」グループの間に有意な差があることがわかる（ $p < .05$ ）。つまり、表 5-14 でみられる外部原因音の音源の意味的特定レベルの結果は、表 5-4 の場合と同様に、「特定でない」グループの方が「特定」グループより意味拡張が起こりやすいのである。このことから、外部原因音はフレーム内の要素が多い（図 2-3c を参照）ため、（5-6）や（5-7）で示したように音源が特定のなくても、その他の要素が拡張の元になり得るのであると考えられる。）

内部原因音における意味拡張とその音源の意味的特定性との関係の用例は、（5-8）と（5-9）のように示している。（5-8）の ʔôokʔâak は、嘔吐する際に生じた音を表している擬音語である。そして、その基本義（5-8a）は（5-8b）のように拡張し、ʔôokʔâak は嘔吐の音だけでなく、「嘔吐する」という動作を指し示すようになる。このように、意味派生できるのはその音源が嘔吐であることを特定できるためである。

- （5-8） a. phôm ʔaacian ʔôokʔâak thanthii (BIO037)
 僕 嘔吐する ONM すぐ

僕がすぐに**オエツ**と嘔吐した。

- b. thaan ʔaahāan thii sāj phǝŋprunrót léew càʔ ʔòokʔāak thanthii
食べる 料理 REL 入れる 化学調味料 そして INFER 嘔吐する すぐ

(<https://pantip.com/topic/38096277>)

化学調味料が入った料理を食べたら、すぐ**嘔吐する**。

fútfát という擬音語は、(5-9a) でみられるように鼻詰まりなど呼吸の流れが悪い時の息の音を表している。(5-9b) ではその **fútfát** は動詞として機能しており、「鼻詰まりする」を指し示している。また、(5-9c) は (5-9b) と同じように動詞として働いているが、ここでは怒りによって息が荒くなったことを指している⁵⁴。(5-9) も呼吸を特定できない限り、(5-9b) ～ (5-9c) のように意味拡張できないと考えられる。

- (5-9) a. caam námtaa lāj hǎajcaj daŋ **fútfát**
くしゃみをする 涙 流れる 呼吸する 音がする ONM

(<https://pantip.com/topic/33752480>)

くしゃみをして、涙が出て、**フンフン**と呼吸した。

- b. phóm khɿɿj súuu hāj lǎan phrɔʔ phée
僕 ～たことがある 買う あげる 孫 から アレルギーが出る

ʔaakàat **fútfát** talòot (<https://pantip.com/topic/43145706>)

空気一季節の変わり目 鼻詰まりする いつも

僕は（その薬を）孫に買ってあげたことがある。（孫は）いつも季節の変わり目にアレルギーが出て、**鼻詰まりする**からだ。

- c. léew kháw kôo **fútfát** phûutcaa mâj dii takhòok sāj
そして 彼 PRT 息が荒くなる 話す NEG 良い 怒鳴る 入る一向かう

⁵⁴ (5-9c) の場合も (3-10b) の punpaŋ と同様に単に「息が荒くなる」ことを指しているのではなく、行為者の心理状態も表していると考えられる。つまり、怒りによって自然に「息が荒くなる」ことも指している。(5-9c) は因果関係的な隣接性があるため、メトニミー拡張であると考えられる。

そして彼は**息が荒くなって**、良くない話し方で話して、（私に向かって）怒鳴った。

このように、外部原因音・内部原因音・声に分類するという游（2014）の枠組みは、それぞれの擬音語のフレーム構造やフレーム内の要素を把握する上で有用であり、また5.3節で示すように各フレームの拡張可能の行き先の違いを捉える上でも有効である。しかし、この分類要因のみでは、タイ語にみられる擬音語の意味拡張を説明することができず、意味的特定性の要因も合わせて検討する必要がある。一方、意味的特定性が意味拡張と関わっているのは確かであり、音源の意味的特定性を導入することによってフレーム内要素の少ない内部原因音の意味拡張（（5-8）と（5-9））や、外部原因音や擬声語にみられる一部の意味拡張（（5-3）～（5-5））に対して説明を与えることができる。しかし、タイ語の意味的特定性を統括的に説明するためには、その擬音語の音源の要素だけに着目するだけでは不十分であり、5.2節で示すように様態など他の要素と合わせて検討を行う必要がある。

5.2 タイ語の擬音語の意味拡張に関与する他の可能性

5.1節で示したように、Akita（2013）と游（2014）によって提唱された文法機能、意味的特定性、事象構造の複雑さの要因は、タイ語にみられる擬音語の意味拡張を説明するのに有用とはいえない。しかし、前述したように、これらの要因に適用できない部分が多くあるにも関わらず、タイ語の意味拡張は日本語、中国語、韓国語に比べて相対的に多いのである。

そのため、本節では、Akita（2013）と游（2014）によって提示された（5-1）の要因の他に、何か理由が考えられるのかについて検討を試みる。なお、本節で提示した理由もタイ語の全ての擬音語の意味拡張に説明を与えるわけではないが、Akita（2013）と游（2014）の要因と合わせて検討することで、タイ語における擬音語の意味拡張に対してより包括的に理解が得られることを期待している。本節では二つの理由を提示する。

一つ目は、音源以外、擬音語のフレームに組み込まれた要素が特定のことであることである。Diffloth（1972）や武藤（2003）、井上（2013）、秋田（2022）によって指摘されているように（第1章や2.2節などを参照）、一つのオノマトペは事象の複数の側面を描写しているため、音源だけでなくその他の側

面（フレーム要素）の意味的特定性も検討を行う必要がある。この点については、游（2014）にも言及されており（脚注 11 を参照）、游（2014）では擬音語から様態を指定しているか否かを検討するために、日本語の場合擬音語に含まれる有声音と無声音のミニマルペアで音源の大きさや、事象の強弱の指定、中国語の場合有気音と摩擦音を手掛かりとして音発生事象に伴う動きの速さの指定を調査している。日本語と中国語では様態に指定をもつ場合の方が指定をもたない場合より、意味拡張の割合が高いと游（2014）によって報告されている。また、2.2.2 節で述べたように、呂（2004）は擬音語の ICM を提示し、音源の他にその ICM に組み込まれている要素が拡張の元になり得ることを示唆している。

タイ語の音象徴的な効果について、Saengkrachang（1973）や Phanthumetha（1992）、隅田（2011）⁵⁵で報告されているが、游（2014）の日本語や中国語の場合のように、それらの象徴素を有気音・無気音や摩擦音などに一般化し、体系的に検討を行った研究が見当たらない。そのため、現時点では音象徴でオノマトペが生起する事象に伴う様態などに説明を与えることが難しいと考えられる。そこで、本節では音象徴的な効果そのものでなく、辞書に記述されたその擬音語に伴う様態を手掛かりとして、様態の意味拡張を考察し、タイ語の擬音語の意味拡張を説明する要因の一つであることを示したい⁵⁶。

前節の（5-7）で示したように、音源の意味的特定性が低い場合でも、様態の要素が特定であれば拡張が生じ得る。以下の（5-10）は（5-7）と同様の例である。（5-10a）～（5-10c）から、phùppháp は鳥の羽や旗など、さまざまな音源と共起可能であり、擬音語から音源をあまり特定することができないと考

⁵⁵ 隅田（2011）によって報告されたタイ語の第 4 声調と第 5 声調の音象徴的な効果は、強意語の擬態語に体系的に説明を与えることができる。しかし、それらの効果はその擬態語と共起する動詞の意味を強調することであり、擬音語に適用することは難しいと考えられる。

⁵⁶ タイ語における擬音語の意味拡張をさらに体系的に説明できるように、全ての擬音語の様態の特定性を網羅的に調査する必要がある。しかし、基準の設定や分析が難しい点があり、また時間的制約により、本稿では十分に検討を行うことができない。なお、本節では様態の意味的特定性に注目して論じているが、様態だけでなく働きかけなどの要素も考慮する必要がある。この点については今後の課題としたい。

一方、游（2014）のように有声音・無声音などの音象徴的な効果を用いて、擬音語の様態の特定性を調査することで一定の判断基準（例えば、有声音・無声音で事象の強弱を指定できる場合を「指定あり」、ない場合を「指定なし」とする）を保つことができるという利点がある。しかし、全ての擬音語の様態は音象徴だけでは確認できるわけではない。例えば、「ゲラゲラ」は「大声で笑う声。遠慮なしにばかにした笑い声」（『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』）のように定義されており、声が大きく遠慮のないという様態は、有声音・無声音という音象徴から引き出すことは難しいと考えられる。また、そのミニマルペアであるはずの「ケラケラ」の「愉快そうにかん高く笑う声」（『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』）という意味も、「ゲラゲラ」の意味と対応しているとはいえず、「事象の強弱」だけでは説明することが難しい。そのため、擬音語の様態の特定性を検討する際に、音象徴だけでなく、辞書における記述や用例に基づいて判断を行う必要があると考えられる。

えられる。しかし、(5-10d) でみられるように、phùpphàp は、本来聴覚的情報と関わりのないはずの「華やかな様子」という開花の様態を指し示すために用いられる。

(5-10) a. nók fũuŋ jàj kraphuu piik **phùpphàp** (PRSH058)

鳥 CLF 大きい 羽ばたく 羽 ONM

大きな鳥の群れが**パタパタ**と羽ばたいている。

b. thonchàat thaj (...) sabàt **phùpphàp** (BIO025)

国旗 タイ はためく ONM

タイ国旗は**パタパタ**とはためいている。

c. thahãan tâŋthæw dʒɪnsũansanãam tòptháw **phùpphàp** (NWCOL076)

軍人 隊列を組む 行進する 踏み鳴らす ONM

軍人は隊列を組んで行進して、**タッタ**と踏み鳴らした。

d. nãafõn khàadeɛŋ khàachomphuu ʔòɔkdòɔk kan

雨季 赤しょうが ピックしょうが 開花する PRT

phùpphàp (PRSH028)

一気に活気がある様子

雨季に赤しょうがとピックアップしょうが**華やかな様子**で開花する。

呂 (2003; 2004) の ICM を援用して、拡張義 (5-10d) を分析してみると、表 5-15 のように整理できる。表 5-15 でみられるように、phùpphàp は単に聴覚的情報だけでなく、「活気のある様子」という様態の側面も含んでおり、意味拡張が起きている。音源がさまざまで、特定のでもなく、様態など他の要素により拡張が生じると考えられる。

	phùpphàp 擬音語のフレーム 内要素	(5-10d) において phùpphàp が使われ る事態
<事態の音>	自己の身体（・物体）同士 が触れ合って生じた音（羽	無し

	ばたく音（（5-10a））・は ためく音（（5-10b））・踏 み鳴らした音（（5- 10c））	
<trajector>	固体（羽・旗・足（あるい はズボン））	花
<landmark>	固体（羽・旗・足（あるい はズボン））	無し
<tr の動作>	物理的な動作（羽ばたく・ はためく・踏み鳴らす）	開花する
<tr の様態>	活気のある様子	華やかな様子

表5-15 phũppháp擬音語のフレーム内要素と（5-10d）の事象の側面の照合

一方、前節で音源の意味的特定性が高い擬音語として取り上げられた tɔʔtɛʔ（（5-2））はどうであろうか。（4-1）で示したように、tɔʔtɛʔは元々 Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition)において、「子どもが歩き始める時の様子」、つまり赤ちゃんの頼りない足どりで歩く様子を指し示す語彙として収録されている。このことから、tɔʔtɛʔは音源（赤ちゃんの足音）だけでなく、その様態も指定していることがわかる。そのため、tɔʔtɛʔそのものは、（5-11a）のような聴覚的情報だけでなく、（5-11b）のように赤ちゃんが歩く事象に伴う頼りない様子を表している。また、（5-11c）でみられるように、tɔʔtɛʔはキャリアにおいて、「あまり進まないさま」を表す語として用いられている。これは子どもの歩く様態に関して「動きが不器用」「あまり早くない」という背景知識に基づいた意味拡張であり、（4-1）のようなその様態が特定できなければ、（5-11c）のように拡張できないと考えられる。（5-11c）を呂（2003; 2004）の ICM で検討してみると、表 5-16 のようになる。このことから、tɔʔtɛʔ 擬音語から（5-2）の場合のように音源の側面だけでなく、その様態を特定できるとわかる。また、（5-2）と（5-11）で示したように、音源から拡張された語義（（5-2b）～（5-2c））と様態から拡張された語義（（5-11c））が異なっているため、両方の側面を検討すべきであると考えられる。

(5-11) a. nũunɔɔj taa diaw nĩi càʔ r̥ɰm d̥ɰn taam lǎŋ khon khon

少年 目 唯一 この INFER 始める 歩く つく 背後 人 CLF
 nán lé? sòn sǎŋ daŋ tǝʔtǝʔ
 その そして 送る一発する 音 音がする ONM

(https://intrend.trueid.net/article/รวมตำนานผีญี่ปุ่นที่ไร้ประโยชน์สุดๆ-trueidintrend_44483) (cf. (4-2) (5-2))

この一つ目の少年はその人の背後について、トコトコ（という音を立てながら）歩き始める。

b. cuuŋ muuu həj lùuk hət dɤŋn tǝʔtǝʔ (ACHM034)
 引く 手 CAUS 子ども 練習する 歩く 頼りない足どりで歩く様子
 （子どもの）手を引き取って、子どもによちよち歩く練習をさせる。

c. sǎamii thii còp maa phrómphrómkan sǎakhǎawíʔchaa diawkan dǎjtɛɛ
 夫 REL 卒業する 来る 同時に 学科 同じ ～ばかいる
 tǎj tǝʔtǝʔ jùu thii sii hòk
 よじ登る一キャリアが進む あまり進まない様子 いる に 職務階級 6

(NWCOL080)

同じ時期に同じ学科で卒業してきた夫は、6級のままでとどまっている。

	tǝʔtǝʔ 擬音語のフレーム内要素	(5-11c) において tǝʔtǝʔ が使われる事態
<事態の音>	子どもの足音	無し
<trajector>	子どもの足	夫
<landmark>	床・道	(キャリアラダー)
<tr の動作>	物理的な移動：歩く	抽象的な移動：よじ登る（キャリアが進む）
<tr の状態>	頼りない様子（不器用、あまり早くない）	あまり進まない

表 5-16 tǝʔtǝʔ 擬音語のフレーム内要素と (5-10c) の事象の側面の照合

それに対して、足音の指定をもつ擬音語のもう一つの例としては、kùpkàp がある。kùpkàp は、Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition)において「馬の足音」として収録されているため、音源の意味的特定性が高いと考えられる。しかし、(5-12) でみられるように、kùpkàp は単に馬の足音そのものを指し示すだけであり、tòʔtèʔ の (5-11b) のような、馬がどのように歩くのかという様態について明確に指定していない。そのため、kùpkàp においては、様態の側面からの意味拡張がみられないのである⁵⁷。

(5-12) sǎŋ fǐtǎw máa dǎŋ **kùpkàp** hǎj dǎjǐn
(<https://pantip.com/topic/38040091>)

音 足音 馬 音がする ONM CAUS 聞こえる

馬の足音がパカラッパカラッという音がして、（私は）それが聞こえた。

(5-11) の tòʔtèʔ と同様に音源と様態に特定性がある例は (5-13) で示している。(5-13) の krachùkkrachàk は列車が走る擬音語であり、TNC やネット掲示板で調査すると (5-13a) のように聴覚的情報として krachùkkrachàk の用例は、全て列車と共起している。そのため、音源の意味的特性が「特定レベル（限定）」であると考えられるが、音源の側面からの拡張が見当たらない。

一方、(5-13b) では krachùkkrachàk の様態側面が焦点化され、運転がぎこちない様子（列車の運転のようにスムーズでない運転様子）を描写している。そして、そのぎこちない運転の様子は、(5-13c) のように人間の動きの様子にも拡張している。このように、krachùkkrachàk は音源（列車）と様態（ぎこちない運転の様子）に特定性をもつ擬音語であるが、(5-13c) 拡張義の場合、音源⁵⁸の側面だけで正

⁵⁷ なお、意味拡張が起きるか否かはその言語話者の慣習によって決められており、kùpkàp の場合のように音源が特定されたとしても、その音源からの拡張が必ずしも起きるとは限らない。しかし、ここで kùpkàp を例として取り上げたのは、音源と様態に指定をもち、様態から意味拡張がある tòʔtèʔ との対照を示すためである。また、kùpkàp は様態が特定されていないため、様態の側面からの意味拡張がないことを示す例でもある。

⁵⁸ ただし、この場合においても、音源の意味的特定性も重要であると考えられる。もし krachùkkrachàk が列車でなく単に乗り物一般を指しているのであれば、その列車の典型的なぎこちない運転様子まで連想することが難しいであろう。もっとも、オノマトペは複合的に事象の複数の側面を表しているため（1.1 節を参照）、krachùkkrachàk において音源とそれに伴う様態を完全に切り離して捉えることができない。とはいえ、(5-12c) の例は拡張の元が様態の側面にあるため、様態を考慮せずに、音源の意味的特定性のみ検討するのは擬音語の意味拡張を正確に説明する上で不十分であると考えられる。

確に説明することが難しい。そのため、音源の意味的特定性だけに注目せず、様態など他のフレーム要素にも検討する必要があると考えられる。

(5-13) a. thǔŋ sathǎanii jǒɔj wêɛw sǎŋ **krachùkkrachàk**

到着する 駅 支線 微かに聞こえる 音 ONM

daŋ maa tɛɛ klaj (NACSS009)

音がする 来る から 遠い

支線の駅に到着して、遠くから**ガタンゴトン**という音が微かに聞こえた。

b. ròtmee brèek **krachùkkrachàk** jùu sǒɔŋ hòŋ

バス ブレーキをかける 運転がぎこちない様子 いる 2 回

(PRNV014)

バス（の運転手）は2回**ぎこちなく**ブレーキをかけていた。

c. juuun tháaw?ew mɔɔŋ thâathaŋ thǔu **krachùkkrachàk**

立つ 手を腰に当てる 見る 様子 拭く 不器用な様子

khɔɔŋ lòŋ (PRNV150)

GEN 彼女

（彼は）手を腰に当てながら立って、彼女が（床を）**不器用**に拭く様子を見た。

以上で示したように、音源が特定のな場合であっても特定のでない場合であっても、様態の側面から拡張が生じ得るため、擬音語の意味拡張を把握するために音源の意味的特定性だけでなく、様態をはじめ、フレームの他の要素の意味的特定性にも目を向けて検討する必要がある。

(5-1) で提示された要因以外もう一つの理由として、孤立語の品詞の柔軟性が考えられる。3.2.2 節で述べたように、タイ語は孤立語であるため、文法範疇の範列パラダイムが成立せず、語形変化もみられない。そのため、タイ語の擬音語は語形態的特徴による制約を受けず、さまざまな文法的環境に出現することが可能である。この点について、游（2014）によって報告された同じ孤立語である中国語の擬音

語もタイ語と統語的機能が似ている⁵⁹。さまざまな品詞に出現できることは、意味拡張と深く関与している。Kita (2001) においても日本語の擬音語「ごろごろ」が例として挙げられており、「誰かが玉をごろごろと転がした」の副詞としての「ごろごろ」と「そんなところでごろごろしないで」（変更は筆者による）の動詞としての「ごろごろ」にみられる意味の違いは品詞の違いに応じていると述べられており (p.433)、つまりオノマトペの品詞が異なれば、意味も変わるため、意味の多義性が生じるのである。

一方、日本語の場合は 3.2.2 節で示したように、Akita (2009b) では語彙的類像性の階層が提案されており、臨時的擬音語、擬音語、擬態語、擬情語、一般語彙という順に一般語彙から逸脱の度合いを示している。形式と指示対象の間の類像性が高く、一般語彙からの逸脱の度合いが高い日本語の擬音語は、節の核（述語とその項）になりにくいという制限があるとされており、日本語の擬音語の品詞は動詞、形容詞、名詞に変わりにくいという。ただし、全ての擬音語は節の核に変わらないわけではなく、比較的に類像性が低いものは動詞として機能することができる。例えば、類像性が比較的に低い擬音語「ガヤガヤ」や「ザワザワ」は動詞として機能し、「ガヤガヤする」、「ザワザワする」になり得る。

タイ語はさまざまな品詞として出現できることから、Akita (2009b) の類像性の制約に当てはまらないようにみえる。しかし、興味深いことに、辞書では別の見出し語として立項されているものの、意味が近く、声調符号（および実際に発音される声調）のみに差異のある二つの擬音語の間に、一方には意味拡張が確認されるのに対し、他方には意味拡張が確認されないという例がある。例えば、pòʔ と pǒʔ や、krǎp と krǎp はいずれも基本義が近似しており、声調だけの違いがみられるが、第 4 声調符号が付与された後者（pǒʔ と krǎp）だけは拡張義が見当たらない（第 4 声調符号とその有標性については、脚注 22 を参照されたい。なお、krǎp は第 4 声調符号だけでなく、偶然空白の声調を伴っていることも考えられる。）。

このことから、タイ語においても逸脱性の高い擬音語は、日本語の場合と同様に他の品詞に変わらず、意味拡張が起こりにくいことにつながるのではないかと考えられる。ただし、第 4 声調符号を伴う擬音語の全ては意味拡張が起こらないわけではなく、例えば pók という擬音語は (5-6) のように多くの拡張義をもっている。また第 4 声調がなければ、前続動詞を強調するという音象徴的な効果がなくな

⁵⁹中国語の擬音語の意味拡張の割合が相対的に低いのは、意味的特定性の要因の他に、中国語の文字体系とも関わっていると游 (2014) によって指摘されている。音と意味の両方をもつ表意文字を用いることは、音を表す擬音語から擬態語へ転用されることを妨げる。一方、擬音語を当て字として表現すると、擬態語として用いられることもあるという。

り、強意語として機能することができないと考えられる（隅田 2011 を参照）。また、第 4 声調符号の他に、（3-1）で示した一般語彙にあまりみられない音韻形態的特徴を備えたオノマトペの多くは、拡張が起きていると確認できる。オノマトペの間でどのオノマトペの方が類像性が高いのかさらに検討する必要があり、例えば Akita（2009b）ではオノマトペの逸脱性の度合いを調査するために、オノマトペとジェスチャーなどとの生起で考察している⁶⁰。そのため、タイ語の擬音語の逸脱性の度合いと品詞転換、意味拡張についてさらなる検討が求められる。

このように、本節では擬音語の意味拡張に関与する理由として、Akita（2013）と游（2014）によって提案された（5-1）の要因以外の可能性を提示した。事象の複数の側面を一つの語に写し取るという擬音語の特性から、擬音語には音源や様態、働きかけなどさまざまな側面（フレーム要素）が組み込まれたことがわかる。そのため、擬音語フレームの一つの要素に注目するのではなく、さまざまなフレーム要素の意味的特定性にも考慮を入れることで、擬音語の意味拡張を正確に捉えることができると考えられる。また、孤立語の語形態的特徴や品詞の柔軟性も擬音語の意味拡張に関与していると考えられる。擬音語の意味拡張を扱った先行研究の中で対象言語が孤立語であるものは、中国語のみである。しかし、中国語の擬音語はタイ語と同様にさまざまな品詞として機能することができる一方、文字体系の制約により、孤立語の特徴と擬音語の意味拡張との関係を直接観察するのが難しい。本研究においてタイ語の擬音語の意味拡張を考察することによって、孤立語と擬音語の意味拡張の関係をより明確に提示できたと考えられる。

5.3 タイ語の擬音語の拡張先

前述したように、意味拡張は基本義に含まれる何らかの情報が利用されることによって生じたものである。しかし、現実世界においては音・声はさまざまな原因で生じているため、全ての擬音語は同じフレーム要素を共有しているわけではない。そのため、擬音語のそれぞれの種類は異なる拡張先をもって

⁶⁰ 第 3 章で述べたように、Klamer（2001）によって提唱されたオノマトペの有標性には「形式」、「意味」、「機能」という三つの側面が挙げているが、客観的な判断が難しい「意味」の側面を除くと、「形式」と「機能」の側面からタイ語のそれぞれの擬音語の有標性・逸脱性の度合いを検討することができると考えられる。「形式」の側面については、（3-1）で示したような音韻形態的特徴から逸脱性を確認することが可能である。また、「機能」の側面については、Akita（2009b）が指摘したようなジェスチャーとの生起や、多重反復、独特なイントネーションとの共起から、その逸脱性を検討することができると考えられる。

いると想定できる。游（2014）の枠組みでは擬音語が外部原因音、内部原因音、声に分類されており、それぞれはフレーム構造の複雑さの度合いが異なっているとされている。本節では、タイ語の外部原因音、内部原因音、声の拡張義を一般化し、抽出されたパターンがそれぞれのフレームとどのように関係しているのかについて論じる。

本節では、擬音語の拡張先を音源（5.3.1 節）、類別詞（5.3.2 節）、様態（5.3.3 節）、心理状態（5.3.4 節）、動作（5.3.5 節）、音源の状態（5.3.6 節）、強意語（5.3.7 節）という順に取り上げる。その後、5.3.8 節では拡張先と各フレームのまとめを述べる。

5.3.1 音源

本節では音・声という聴覚情報の基本義から音源という意味に拡張する用例を紹介する。音源は音が発生するのに重要な要素であり、外部原因音・内部原因音・声のいずれのフレームにおいても、このフレーム内要素が想定されている。その用例は（5-14）～（5-16）のようにみられ、それぞれは外部原因音、内部原因音、声の用例である。（5-14a）の *tùptáp* は殴ったり叩いたりする音を表しているが、（5-14b）はタイの伝統的なお菓子の拡張した。この意味拡張は、作る時に杵で打った場面で生じたものであると考えられる⁶¹。（5-15a）の *wùut* は汽笛から発した音を表す擬音語であるが、（5-15b）は擬音語単体で汽笛を指し示すことができる。（5-16a）の *kaa*（あるいは *kaakaa*）はカラス特有の鳴き声を表し、（5-16b）は拡張義としてカラスを指すようになった。興味深いことに、外部原因音から指し示された音源は、その働きかけを受けた Akita（2013）の *impactee* に相当するものを指している。それに対し、使役性が低く、働きかけを想定していない内部原因音・声の場合はその音・声を発する主体が指し示される。すなわち、音源はいずれのフレームから拡張可能の行き先であっても、音源に当たる要素が各フレームによって異なっているのである。

(5-14)	a.	<i>ʔaw</i>	<i>muuu</i>	<i>thúp</i>	<i>phanǎŋ</i>	<i>tùk</i>	<i>tùptáp</i> (PRNV151)
		取る一使う	手	打ちつける	壁	建物	ドンドン

⁶¹ *tùptáp* 単体でそのお菓子の名前を指し示すことができるが、（3-16b）のように *khanǎm*（お菓子）と結びつく複合名詞として現れることも多く確認される。

手で建物の壁をドンドン打ちつけた。

- b. **tùptâp** krajaasàat kôo mājđāj kin phrɔʔ man wǎan
(お菓子名) (お菓子名) も NEG 食べる から それ 甘い

kɔɔn (<https://pantip.com/topic/43799752>)

すぎる

tùptâp も krajaasàat も食べていない。それらは甘すぎるからだ。

- (5-15) a. múa thǔŋ weclaa càʔ sɔŋ sǎŋ **wùut** phrɔmkàp phôn
時 到着 時間 INFER 送る一発する 音 ONM とともに 噴出する

ʔajnáam ʔɔk maa (<https://pantip.com/topic/43548871>)

蒸気 出る 来る

時間になると、ヒューという音を発するとともに、蒸気を噴き出してくる。

- b. rua pɔɔt **wùut** (PRNV05)

船 つける一起動する 汽笛

船が汽笛を鳴らした。

- (5-16) a. bin paj kɔʔ bon kɪŋmáj rɔɔŋ **kaakaa** (PRSH028)
飛ぶ 行く 掴む 上 枝 鳴く ONM

飛んで行って、枝の上を掴んで、カーカーと鳴いた。

- b. **kaa** sǎamâat waŋphěen lûaŋnâa

カラス 可能 ～計画する 予め

(<https://www.voathai.com/a/crow-ability-ro/3943893.html>)

カラスは予め計画することができる。

(5-16) のようにある動物の特有の鳴き声でその動物を指すことは、タイ語は游 (2014) によって報告された中国語と同様にあまり多くみられず、(5-17) のように育児語として擬声語 (反復形) がその動物名を表す名詞と結びついた形で出現することが多い。この場合は (5-16b) と異なって擬声語だけでその動物を指し示すことができない。また、(3-16) で挙げた複合名詞の場合とも異なる。(3-16) の場合は擬音語がなくなると、その意味自体がなくなる (例えば、(3-16b) の *khanôm* (お菓子) *tùptâp* (殴

ったり叩いたりする音を表す擬音語)はタイのお菓子の一種を指しているが、擬音語の *tùptáp* がなくなると、そのお菓子を指し示すことができなくなる。)。そのため、本研究では(5-17)で挙げた擬声語は拡張義として扱わないことにした。

- (5-17) a. *mǎa* (犬) + *hòophòonj* (犬の鳴き声を表す擬声語) →犬
 b. *mǔu* (豚) + *ʔúutʔúut* (豚の鳴き声を表す擬声語) →豚
 c. *máa* (馬) + *híihíi* (馬の鳴き声を表す擬声語) →馬
 d. *pèt* (アヒル) + *kâapkâap* (アヒルの鳴き声を表す擬声語) →アヒル

5.3.2 類別詞

本節では音・声という聴覚情報の基本義から類別詞という用法として機能する用例を提示する。3.2.2.5節で示したように、タイ語では擬音語が類別詞として機能し、動作の分類や動作の回数を表すことができる。類別詞としての擬音語は、動作を行った際に生じた音に基づいて分類を行うものであるため、どのフレームの擬音語でもこの拡張義の用法をもっている。その用例は(5-18)～(5-20)であり、それぞれは外部原因音、内部原因音、声に属する擬音語である。

(5-18a)の *krèek* は乾いた物体を引き搔く時に生じた音を表す擬音語であるが、(5-18b)は類別詞としてその引き搔いた回数を表している。一方、(5-19)の内部原因音の音は自発的に(あるいは物理的な働きかけが背景化された)生じているものであるため、(5-19b)は物理的な動作などではなくその音が発生する回数を表している。(5-20)の場合は、その声を発すること自体が動作(威嚇する・吠える)の目的であるため、(5-20b)はその声を発する回数を表している⁶²。このように、外部原因音、内部原因音、声に属する擬音語が類別詞に拡張可能であるが、その類別詞は物理的な働きかけの動作を分類しているか否かという点で微妙な違いがみられる。(しかし、いずれの場合もその動作に音・声が伴うことを共通している。)

⁶²声の擬声語は(5-20)のように声を発する動作の回数を表す類別詞として機能することができるが、(5-34)のような時間の隣接性に基づいて生じた動作の分類・回数を示す類別詞として働く用例が見当たらない。

(5-18) a. phim kaw húa **kr̥ɛk** (NWCOL119)

(人名) 掻く 頭 ONM

ピムは頭を**カリカリ**掻いた。

b. chǎn plǎx jók muu kaw húa sǎɔŋ **kr̥ɛk** (PRNV143)

私 思わず 上げる 手 掻く 頭 2 CLF

私は思わず手を挙げて、頭を**2回**掻いた。

(5-19) a. **kr̥ɪkr̥ɪkr̥ɪ** thoorasàp dǎŋ khúm thii hǔatǎŋ khǎɔŋ

ONM 電話 音がする 上がる に 枕元 GEN

phǒm (NACNS025)

僕

リンリンリン。僕の枕元で電話が鳴り上った。

b. raw tǔɔŋ ráp phaaŋnaj cèt **kr̥ɪ** (PRNV079)

私達 ~なければならぬ 受け取る までに 7 CLF

私達は**7コール**までに（電話を）受け取らなければならぬ。

(5-20) a. mǎa tua nùŋ kamlǎŋ khùu **h̥ɛh̥ɛ** sǎj súa

犬 CLF 1 PROG 威嚇する ONM 入る一向かう 虎

(<https://pantip.com/topic/43374660>)

一匹の犬が虎に向かって**ガルルル**と威嚇している。

b. hàw ʔiik sǎam **h̥ɛ** (PRNV011)

吠える また 3 CLF

また**3回**吠えた。

5.3.3 様態

本節では聴覚情報を表す擬音語の基本義から様態に拡張することについて述べる。この行き先も外部原因音・内部原因音・声のいずれのフレームに属する擬音語も拡張可能であり、用例は(5-21)～(5-23)のとおりである。秋田(2022; 近刊)によって指摘されているように、現実世界において音と動きが

生起することが一般的である（4.2 節を参照）。そのため、擬音語の意味が音と様態を完全に区別することができず、一つの擬音語が両者の意味を複合的に含んでいることが多くみられる。（5-21a）の *khwàp* は棒で叩く際に生じた空気を切り裂く音の擬音語であるが、（5-21b）のように単に空気を切り裂く音だけでなく、その素早い様子を指し示すのに用いられる。

- (5-21) a. *khwàp* *sǎŋ* *májriaw* *hùat* *ʔaakàat* *fâat* *loŋ* *bon tóʔ*
 ONM 音 (体罰に使われる) 棒 打つ 空気 叩く 下りる 上 机
khâaŋ *khâaŋ* (<https://pantip.com/topic/39086625>)
 隣 隣
 ビューツ。棒が空気を切って隣の机の上に叩いた。
- b. *chǎn* *hǎn* *khwàp* *paj* *taam* *sǎŋ* (PRNV092)
 私 振り向く 速い様子 行く 追う 音
 私は音に追ってすぐに振り向いた。

一方、内部原因音は自動的に音を発するため、動作やその動作を修飾する様態を伴わないと思われるかもしれない。しかし、（5-22b）～（5-22c）で示したように、タイ語では内部原因音であっても、様態を表す拡張義をもっている。*brǔuu* は船や車などのエンジンの回転音を表す擬音語であり、（5-22a）でみられるように使役性が低く、また「船が走る」ことが *brǔuu* の音の発生に直接的に起因するとは言い難い（2.3 節の図 2-5 に近いと考えられる）。しかし、*brǔuu* というエンジンの回転音と、その速さが同時に生起するものであり、その間に隣接性があると考えられる。そのため、（5-22b）のように *brǔuu* は人間が走る際に「速い・スムーズな様子」を指し示すことが可能である。さらに、（5-22b）の「速い・スムーズな様子」は（5-22c）の「流暢な様子」に意味拡張している。また、内部原因音のもう一つの用例は（5-23）である。*tùp* は（5-23a）のように脈の音を表しているが、（5-23b）では脈が打つような様子を指し示すようになる。

- (5-22) a. *rua* *wǐŋ* *brǔuu* *phǒm* *pliw* *maa* *kláwklɔɔ* (BIO066)
 船 走る ONM 髪 なびく 来る 漂う

b. sákp'hák kháw klàp maa wîŋ **brũw**

しばらく 彼 戻る 来る 走る 速い・スムーズな様子

しばらく経って、彼はまた**速く**走れるようになった。

英語を流暢に話することができる韓国と中国の観光客に似ていない。

脈 PRT 鼓動する ONM

頭 始める 痛む 脈が打つようなさま 上がる 来る

(5-24a) の *ciawcáaw* は人間や鳥、ネズミ、猿などが騒つく声を表す擬声語であるが、(5-24b) でみられるように *ciawcáaw* で車が騒がしく走る様子を指し示すことができる。つまり、(5-24a) の擬声語は単に声を発することを表しているのではなく、その中には「騒がしい様子」という要素も含まれているため、その要素が利用され(5-24b)のように意味拡張が生じているのである。

スズメ 鳴く ONM

車-サイレン 走る 一斉に 騒がしい様子 まさに 火事 辺り (地名)

パトカー・救急車が一齐に騒がしく走っている。バンパー辺りで火事がある。

5.3.4 心理状態

本節では聴覚情報を表す基本義から心理状態を表す拡張義について論じたい。游（2014）によると、音源の心理状態の拡張義は中国語にはみられず、また日本語には例が内部原因音と声の擬音語からしか起こらないという。しかし、タイ語では用例がわずかであるものの、外部原因音、内部原因音、声の擬音語から心理状態⁶³を指し示すことが確認できる。（5-25）～（5-29）はその用例である。

まず、外部原因音の（5-25）と（5-26）の例から述べる。（5-25a）の *pungpan* は物体が強く衝突する時に生じた音を表す擬音語であるが、（5-25b）では動詞として機能しており、物を蹴ったり叩きつけたりする行為を指示する意味に拡張している。また、（5-25c）ではすぐ物に当たるような怒りっぽい性格に拡張している。なお、（5-25b）の場合は脚注 36 で述べたように、単に物を強くぶつける行為を表すだけでなく、使役者の心理状態も表していると考えられており、怒りや不満の感情を表す、あるいは発散するために、物を強くぶつけたり地団駄を踏んだりする行為を表しているのである。そのため、（5-25b）の場合も物理的な動作を表しつつ、使役者の心理状態も表していると考えられる。また、（5-26a）の *tungtan* も重い物体が地面に落下した音など固体同士が接触した音を表す擬音語である。（5-26b）の場合は（5-25b）に近く、例えば物を強くぶつけたり地団駄を踏んだりするなど、他の人に向けて乱暴な態度を示すのに用いられる。この場合も（5-25b）と同じように物理的な行為を表すとともに、使役者の心理状態も表していると考えられる。

(5-25)	a.	sǎŋ pratuu	thīi	thùuk	phlāk	kratêek	paj	daŋ	pungpan
		音 ドア	REL	PASS	押す	ぶつかる	行く	音がする	ONM

(BIO042) (cf. (3-10a))

⁶³ タイ語は日本語と違い、（5-25）と（5-26）の場合のように外部原因音の擬音語も心理状態に拡張することができる。そのため、タイ語の心理状態の拡張義は全て「音源」（内部原因音・声のフレームから想定できるフレーム要素）ではなく、「使役者」（外部原因のフレーム要素）の心理状態を指し示す場合もある。例えば、（5-25b）と（5-25b）から指し示す心理状態は「音源」（固体同士）のものではなく、固体をぶつけさせる「使役者」である。そのため、本節の拡張先を「音源の心理状態」ではなく、「心理状態」にした。

押しつけられて、（何かと）ぶつかっていったドアが、バンバンという音がした。

- b. khwaam kròot kùapcà? thamhâj khăw tōŋ sabàt nâa
 NMLZ 怒る ～そうになる CAUS 彼 ～なければならない 振り払う 顔
 kràatkriaw lê? **pungpaŋ** ʔòok càak hôŋ
 怒り狂う そして 物を強くぶつける 出る から 部屋

(PRNV046) (cf. (3-10b))

怒りの結果彼は顔を振り払って狂って、そして（何かを）強くぶつけて部屋から出そうになった。

- c. càak phûujĩŋ ʔonwăan júakjen klaaj pen ʔaarom ráaj
 から 女性 物腰が柔らかい 冷静 移行する ～になる 機嫌 悪い
 lê? **pungpaŋ** jàaŋ mâj mii hètphôn (ACHM005) (cf. (3-10c))
 そして 怒りっぽい ADVLZ NEG もつ 理由

物腰が柔らかく冷静な女性から、理由がなく機嫌が悪く、怒りっぽくなった。

- (5-26) a. sjaŋ **tungtaŋ** khâaŋ hôŋ ŋiap paj léew (PRNV074)

音 ONM 隣 部屋 静か 行く PFV

隣の部屋のドンドンという音が静かになっていった。

- b. chòp **tungtaŋ** sàj mêt
 好む一よく きつく当たる一乱暴な態度をとる 入る一向かう 母

(<https://pantip.com/topic/42882513>)

（父は）よく母に乱暴な態度をとる。

一方、内部原因音の擬音語が心理状態に拡張した用例は（5-27）～（5-28）である。（5-27）は緊張や不安の際の心臓の鼓動音を表す基本義（（5-27a））から、その音源の持ち主の不安や緊張の気持ちを指し示すことができる。また、（5-28a）は鼻詰まりの場合など呼吸の流れが悪い時の息の音の擬音語であるが、（5-28b）の場合は息が荒くなった事態を表しつつ、その息が荒くなった原因である怒りも表していると考えられる。この拡張は因果関係に基づく意味拡張である。

- (5-27) a. hǎacaj khǒŋ khǎw tēn **tūmtūmtǔmtǔm** māj pen caŋwà?
 心臓 GEN 彼 鼓動する ONM NEG COP リズム

(<https://pantip.com/topic/40329014>)

彼の心臓がバクバクとリズム悪く鼓動した。

- b. ʔaathítkòŋ kôo **tūmtūmtǔmtǔm** wāa thaj càʔ pǐxt sùk kàp
 先週 も 不安 QUOT タイ INFER 開く 戦争 と

pūanbāan (<https://pantip.com/topic/43559335>)

近所一隣国

先週もタイが隣国と戦争を開く（かどうかということが）不安だ。

- (5-28) a. caam námtaa lǎj hǎajcaj daŋ **fútfát**
 くしゃみをする 涙 流れる 呼吸する 音がする ONM

(<https://pantip.com/topic/33752480>) (cf. (5-9a))

くしゃみをして、涙が出て、フンフンと呼吸した。

- b. léew kháw kôo **fútfát** phūutcaa māj dii takhòk
 そして 彼 PRT 息が荒くなる 話す NEG 良い 怒鳴る

sàj (<https://pantip.com/topic/42555477>) (cf. (5-9c))

入る一向かう

そして彼は息が荒くなって、良くない話し方で話して、（私に向かって）怒鳴った。

タイ語では擬声語から心理状態に拡張する用例はわずかであり、現時点で調査したところ (5-29b) で挙げた用例しか確認されない。(5-29a) は wiit 擬声語の基本義であり、怒りを感じた時に上げた悲鳴の声を表している。(5-29b) では wiit が拡張し、怒りという心理状態を指す意味として用いられた。しかし、用例が少ないため臨時的に使用される可能性も考えられる。

- (5-29) a. mǎaj rǒŋ **wiit** khûn maa thanthii (PRNV015)

(人名) 泣く一叫ぶ ONM 上がる 来る すぐ

ムアイはキャーとすぐに悲鳴を上げた。

b.	naj	ŋêe	khǒɔŋ	ʔaarom	wiit	mâak	mâak	kôɔ	mâj	dii
	中	観点	GEN	感情	怒る	とても	とても	PRT	NEG	良い

(NWCOL111)

感情の観点では、すごく**怒る**（こと）は良くない。

5.3.5 動作

本節では動作の拡張義の用例を紹介する。この拡張先も前節と同様に外部原因音、内部原因音、声の擬音語からの拡張が確認できるが、それぞれのフレームから拡張された動作の特徴には違いがみられる。

まず、外部原因音の(5-30)、(5-31)の用例を見てみよう。(5-30a)は(5-14)と同じ殴ったり打ったりする時に生じた音を表す擬音語 *tùptáp* であるが、(5-30b)ではこの *tùptáp* は殴るという働きかけそのものに拡張している。一方、(5-31a)の *cúp* はキスする時に生じた音を表す擬音語の基本義であるが、(5-31b)では *cúp* 単独でキスするという動作を指し示すことができる。また、(5-31c)は「キスする」という行為と「情報を吸い取る」という行為の間にある類似性に基づいて、メタファーによる拡張が起きている。このように、外部原因音の擬音語から拡張された動作の拡張義は、使役者が外部世界のあるものに対して行う動的な働きかけの動作に限られている。また、(5-30b)と(5-31b)は物理的な働きかけを表していると考えられる（(5-31c)のメタファー拡張義はあまりそうとはいえないかもしれない）。

(5-30)	a.	ʔaw	muuu	thúp	phanǎŋ	tùk	tùptáp
		取る一使う	手	打ちつける	壁	建物	ドンドン

(PRNV151) (cf. (5-14a))

手で建物の壁をドンドン打ちつけた。

b.	mâj	klâa	khâw	paj	dâa	klua	doon	tùptáp
	NEG	度胸がある	入る一接近する	行く	罵る	恐る	PASS	殴る

(<https://pantip.com/topic/43010366>)

罵りに行く度胸がない。**ボコボコされる**のが恐れる（からだ）。

(5-31) a. phûut sèt kôo cùup lăŋmuu jeecin daŋ cúp
 話す 終わる PRT キスする 手の甲 (人名) 音がする ONM
 (<https://pantip.com/topic/42024660>)

話し終わったら、エンジンの手の甲に**チュッ**とキスした。

b. chăn cúp kêem khăw (PRNV070)

私 キスする 頬 彼

私は彼の頬を**キス**した。

c. léewkôo mii flêetdráj thii cúp khôomuun phaan

そして もつ フラッシュドライブ REL 吸い取る 情報 経由

rucháat dăj (<https://pantip.com/topic/34136595/desktop>)

充電ポート 可能

そして充電ポート経由で情報を**吸い取る**ことができるフラッシュドライブがある。

一方、内部原因音からの動作の拡張義の用例が非常に少なく、自然現象（雷など）や機械の音を表す内部原因音の擬音語からの用例がみられない。しかし、(5-32)で挙げたように、人間が発する音では、動作への意味拡張が確認できる。呼吸の流れが悪い時の息の音を表す **fútfát** は、(5-32b)のように「鼻詰まりする」という動作⁶⁴を指し示している。このことから、内部原因音から拡張された動作は、外部原因音からのと異なり、使役性が低く、他のものに力を加えるような働きかけがみられず、自動的に（あるいはその働きかけ・発生原因が容易に特徴づけられない）起きるものであることがわかる。

(5-32) a. caam námtaa lăj hăajcaj daŋ **fútfát**
 くしゃみをする 涙 流れる 呼吸する 音がする ONM

⁶⁴ ここでは「状態」ではなく「動作」と述べたのはその **fútfát** で表される「鼻詰まりする」は単なる病気の状態を指し示すのではなく、**fútfát** という音を立てながら呼吸するという動作を示していると考えられるためである。

また、(5-28b)の用例についても(5-32)と同様に「動作」として解釈することができると考えられる。しかし、(5-28b)の場合は、その音(**fútfát**)の発生原因が怒りであるため、動作以外心理状態も指し示している。日本語の場合でも、例えば「ドキドキする」は動作として「鼓動する」を指す一方、心理状態として「気持ちが高ぶる」を表すとも捉えられる。

(<https://pantip.com/topic/33752480>) (cf. (5-9a))

くしゃみをして、涙が出て、フンフンと呼吸した。

b.	phǒm	khɯɯj	súuu	hâj	lǎan	phrɔʔ	phée
	僕	～たことがある	買う	あげる	孫	から	アレルギーが出る
	ʔaakàat		fútfát		talòot		
	空気	一季節の変わり目	鼻詰まりする		いつも		

(<https://pantip.com/topic/43145706>) (cf. (5-9b))

僕は（その薬を）孫に買ってあげたことがある。（孫は）いつも季節の変わり目にアレルギーが出て、**鼻詰まりする**からだ。

声からの動作の拡張義は、(5-33)のように擬声語を用いて、その擬声語を発する行為そのものを指し示す用例が多くみられる。(5-33a)のwáakは、驚いた時や怒った時に発する感嘆詞に近い擬声語であるが、(5-33b)のように「怒鳴る」という行為に意味が拡張している。これは声のフレーム内の「音」の要素から「音の発生」に焦点が転移したことによって生じたと考えられる。また、(5-33)の場合と比べると用例が少ないが、(5-34)の場合のように時間的な隣接性に基づく拡張が確認できる。(5-34a)の産声から(5-34b)の「生まれる」に意味が拡張している。

声からの動作の拡張義は、(5-33)でみられるように、声を発すること自体を目的とする動作を指し示す場合が多い。それに対し、外部原因音や内部原因音では、音を発することが典型的に動作の主な目的となることなく、その音に伴う動作を指しているのである。また、(5-34)の場合は外部原因音のような動的な働きかけの動作ではなく、さらに内部原因音のような動作の原因が特徴づけられにくいわけではない。このことから、外部原因音、内部原因音、声の擬音語から動作に拡張することができるが、その動作の使役性や発生原因に関する点では差異がみられる。

(5-33) a. khomkrit hǎn paj léew rɔɔŋ wáak (PRNV050)

(人名) 振り返る 行く そして 泣く一叫ぶ ONM

コムクリットは振り返って、**わーっ**と叫んだ。

b. thaa phôo rúu waa thɯɯ ʔaw bàtkhreedit maa

もし 父 知る QUOT 彼女 取る クレジットカード 来る

rûut khon doon wáak (PRSH026)

スワイプする ～だろう PASS 怒鳴る

もし彼女がクレジットカードを使ってきたと父に知られたら、怒鳴られるだろう。

(5-34) a. dájjin mǔan sǎn dèk rónghāj ʔuwéʔuwéʔ

聞こえる 似ている 音一声 子ども 泣く ONM

(NACHM082) (cf. (3-9b))

子どもの泣き声のような声が聞こえる。オギャーオギャー。

b. tɛɛ phǐichaaɲ klót pii sǒŋphansipcèt sǎn nónsǎaw ʔuwéʔ pii

しかし 兄 産まれる 年 2017 一方 妹 生まれる 年

sǒŋphansippèet (<https://pantip.com/topic/37243080>) (cf. (3-11))

2018

しかし、兄は 2017 年に産まれる一方、妹は 2018 年に生まれる。

5.3.6 音源の状態

本節では聴覚的情報を表す擬音語の基本義から、音源の状態の用例について論じる。ここでの「状態」は 5.3.4 節と 5.3.5 節で取り上げた様態や動作と異なり、静的な事態を指しているものである。タイ語では游 (2014) によって報告された日本語と同様に、外部原因音からの拡張しかみられないのである。その用例は以下の (5-35) ～ (5-37) のように示している。phlèʔ は (5-35) ではとろみのあるものが落下した時に生じた音を表しているが、(5-35b) では「ぐちゃぐちゃ」の状態に拡張している。また、(5-35c) は実際に音を伴わないはずであるが、まるで脂肪がべちゃっと落ちたかのように、体型が「弛んでいる」という状態を指し示すことになる。(5-35c) は痕跡的認知による拡張であると考えられる (2.2.3 節や 3.2.2.3 節を参照)。

(5-35) a. khéek phlík tòk cǐm phúuun daŋ phlèʔ

ケーキ ひっくり返す 落ちる 突っ込む 床 音がする ONM

(<https://pantip.com/topic/34691959>) (cf. (3-6a))

ケーキがひっくり返して、床にべちゃっと（という音がして）落ちた。

- b. kradòot loŋ maa càak chán sii rùaŋ **phlè?** maa
跳ねる 下りる 来る から 階 4 落ちる ぐちゃぐちゃになるさま 来る
bon phúuun (<https://pantip.com/topic/32480688>) (cf. (3-6b))
上 地面

4階から飛び降りてきて、地面の上にぐちゃぐちゃに落ちてきた。

- c. khonkhâj mii hùn **phlè?phlè?** júajjúaj (NACMD084)
患者 もつ 体型 だらっとしている 弛んでいる
患者はだらっとしていて、弛んでいる体型をしている。

また、(5-36) の場合も同様に、**bũm** は石などの固体が水中に落下した時に生じた音を表す擬音語であるが、(5-36b) は「へこんでいる」という状態を指し示すようになった。これも痕跡的認知による拡張であり、肉が落下したかのように、その結果へこんだ状態になっているのである。

- (5-36) a. lòn nám daŋ **bũm**
落ちる 水 音がする ONM

(<https://pantip.com/topic/32292648>) (cf. (3-12a))

水にドボン（という音がして）落ちた。

- b. baŋkhráŋ núa bəəriween nán fəɔ con **bũm** loŋ paj
たまに 肉 辺り その 萎縮する まで へこむ 下りる 行く
kəɔ mii (NACMD102) (cf. (3-12b))
PRT もつ

たまにその辺りの肉が萎縮してへこんでいく場合もある。

一方、(5-37) の **krəɔp** は、乾いた脆いものが破損した時に生じた音を表している。(5-37b) に拡張し、乾いたものによる破損音から、「乾いている」状態に指すのである。(5-37b) の場合は、実際にま

だ食べておらず、音を伴わなくてもこのように表現することができるのは予期的認知によると考えられており、「このような乾いたものを噛んだら/krɔ̌p/という音がするであろう」と予測できるから生じているのである。

(5-37) a. kiŋmáj hək dən **krɔ̌p** (<https://pantip.com/topic/43635759>)

枝 折れる 音がする ONM

枝が**ポキッ**と折れた。

b. tham kəjthət hāj **krɔ̌p** naan naan (NACHM066)

する フライドチキン CAUS サクサク 長く 長く

フライドチキンを長く**サクサク** (の状態) にした。

このように音源の状態への拡張は痕跡的・予期的認知に基づいたものである。三上(2006)の予期的認知は未来の虚構や想像の出来事とその出来事に伴う音を予期することであり、その「出来事」は物体が破裂したり、接触したりする事象を指している。そのため、外部世界のものに対して何らかの働きかけを加えることを想定する外部原因音と相性がいいのである。一方、痕跡的認知も同様に、ある事象を過去の何らかの出来事の結果として捉え、その結果より過去の虚構や想像の出来事を想像することであるため、状態変化を想定する外部原因音の特性に一致しているのである。したがって、物理的な働きかけによって起きた結果状態を想定してない内部原因音と声は、この拡張先に派生することができないのである。

5.3.7 強意語

本節では前続の動詞の程度の強さを強調する強意語について論じたい。これに近いものは中国語(游(2014)のA+BB型の形容詞⁶⁵)にもみられており、游(2014)では音源の状態に分類されている。しか

⁶⁵ 游(2014)によるとA+BB型の形容詞では、Aは形容詞を表し、BBはその音を表すものである。例えば、「硬梆梆」の「硬」は「固い」という形容詞を表しており、「梆梆」は「固いもの同士がぶつかる音」を表しているが、擬態的修飾語として機能している。「硬梆梆」は「かちかちという音を立てそうな固い様子」を意味するという(p.29)。つまり、擬音語は結合した形容詞の状態を表しているのである。

し、本節で取り上げる擬音語は Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) と Matchon Dictionary (2017 Edition) において「とても、すごく」と明確に定義されているため、音源の状態と別の拡張先として扱うことにした。用例は (5-38) ～ (5-40) で示しており、全ては外部原因音の擬音語である。

(5-38) の *póok* は硬い物体同士がぶつかる音を模写する擬音語であるが、(5-38b) と (5-38c) は *khěŋ* (硬い) と共起する強意語として働いている (隅田 2011: 115)。(5-38b) は現実世界において実際に何かと衝突して *póok* という音を発さなくても、「当たっていれば *póok* という音がするであろう」と予期できるほど、その硬さの程度の強さを強調しているのである。また、(5-38c) のような「通貨の上昇」を「硬さ」に喩えるメタファー表現においても、*póok* を用いることで、その上昇の程度の大きさを強調することが可能である。つまり、*póok* は硬さと共起する強意語として慣習化しているのである。同様に、(5-39) の *péek* も硬い物体同士が衝突した音を表しているが、(5-39b) のように硬さの程度の強さを強調する強意語として機能している (隅田 2011: 115)。これも予期的認知による意味拡張である。

(5-38) a. *taa* *cháak* *dâamphaaj* *tii* *hũa* *jaaj* *daŋ* ***póok***
 祖父 引っ張る 櫓 叩く 頭 祖母 音がする ONM

(NACHM037) (cf. (3-7a))

祖父は櫓を引っ張って、祖母の頭を**ポカッ**(という音がして)叩いた。

b. *májkraaŋ* *khěŋ* ***póok*** (NWCOL017) (cf. (3-7b))

タイ語には中国語 A+BB 型に近い擬音語があり、例えば (5-18a) の *krèek* は乾いた物体を引き搔く時に生じた音を表す擬音語であり、以下の例では *hêŋ* (乾いた) に後続することによって「カリカリという音を立てそうな乾いた状態」を指し示すことができる。しかし、*krèek* には本節での強意語のように「とても、すごく」という記述がみられず、また強意語の典型的な音韻形態的特徴 (隅田 2011) もみられないため、本研究では強意語として扱わないことにした。また、音源の状態として扱えると考えられるが、A+BB 型の形容詞の BB 単独ではその状態を指し示すことができず、A 形容詞と結びつく必要があると游 (2014) によって指摘されているため、5.3.6 節で取り上げられたものと性質が異なっている (5.3.6 節の場合は擬音語単独でその状態を表すことができる。)。つまり、以下の *krèek* は 5.3.6 節の「音源の状態」パターンと 5.3.7 節の「強意語」パターンの中間にあると考えられる。これは辞書の記述の不十分さによるものなのか、または典型的な強意語と本質的に違いがあるのか、今後さらなる検討が必要なのである。しかし、本節で問題としているのは、各フレームとその拡張パターンであるため、以下の *krèek* のような場合は、全て外部原因音の擬音語であることを主張する。

taa *hêŋ* ***krèek*** (<https://www.voicetv.co.th/read/299421>)
 目 乾いた ONM
 目が**カリカリ**という音を立てそうに乾いた。

板 硬い すごく

板が**すごく**硬い。

c. ɲɲnbàat khěŋ póok rôɔp kâaw duan

パーツ 硬いー通貨が上昇する すごく ぶり 9 ヶ月

(<https://pantip.com/topic/43604963>) (cf. (3-7c))

パーツが9ヶ月ぶりに**大幅**に上昇した。

(5-39) a. sǎŋ khóon kratóp loohà? péekpéek daŋ klòp sǎŋ ffiitháw

音 ハンマー ぶつける 金属 ONM 音がする 消す 音 足音

(PRNV150)

ハンマーが金属を**カンカン**とぶつけた音は足音を消した。

b. chēɛjen hǎj khěŋ péek (BIO024)

冷凍する CAUS 硬い すごく

すごく硬くなるように冷凍する。

(5-40a) で示したように、nàp は粘り気のあるものを引っ張る時に生じた音を表している。その擬音語 nàp は nǎw (粘りつく、粘り気のある) の程度の強さを表す強意語として用いられる⁶⁶。これも実際に引っ張って nàp という音がしたかどうかは問題とされず、「引っ張ったら/nàp/という音がするのである」と予期できるほどその粘り気の強さが強調されている。

(5-40) a. duŋ nǎjsatík daŋ nàp (Matichon Dictionary (2017 Edition))

引っ張る ゴム 音がする ONM

ゴムを**ピーン**と (という音を立てて) 引っ張った。

b. khrâap sǐi khêem khêem nǎw nàp lí? phúuun (PRSH027)

⁶⁶ (5-40) の nàp は隅田 (2011) では取り上げられていないが、隅田 (2011) で扱われた強意語はアンケート調査から収集されたものであり、未収集の語が残っている可能性が考えられる。nàp は第4声調、第5声調など、強意語に典型的にみられる音韻形態的特徴 (隅田 2011) を伴わないが、Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) では「すごく (nǎw (粘りつく、粘り気のある) の程度の強さを表す)」と記述されている。そのため、本研究では強意語として扱うことにした。

シミ 色 濃い 濃い 粘りつく すごく 汚れる 床

濃い色の**すごく**粘りついたシミが床に汚れている。

このことから、擬音語から拡張された強意語は全て予期的認知による拡張から生じているのである。

5.3.6 節で述べたように、予期的認知は未来の虚構出来事とその出来事に伴う音を予期するものであり、その出来事が外部世界のものに何らかの働きかけを行うことを指している。そのため、働きかけを想定する外部原因音と一致しているのである。

5.3.8 各フレームとその拡張先のまとめ

以上で示したように、外部原因音、内部原因音、声はそれぞれ異なった事象を表しており、想定されたフレーム内要素が異なっている。そのため、それらの擬音語から拡張された拡張先は似ているものが多いものの、異なるものも確認できる。まとめは表 5-17 のように示している。

タイ語には音源、類別詞、様態、心理状態、動作、音源の状態、強意語という 7 つの擬音語の拡張の行き先がある。そのうちに、音源、類別詞、様態、心理状態、動作はいずれのフレームの擬音語からも拡張することができる。しかし、同じ拡張先をもっている、その拡張先にはフレームごとに違いが確認できる。例えば、動作の拡張先については、外部原因音の擬音語は物理的な働きかけ（叩く、殴るなど）を表している一方、内部原因音は自動的に（あるいは発生原因が容易に特徴づけられない）起きる動作（鼻詰まり、嘔吐など）を指し示している。また、声の場合は、その声を発生すること自体を目的とする動作（叫ぶ、怒鳴るなど）を指し示している例が多く確認できる。このように、これら意味拡張のパターンは一見すると同じようにみえるが、その拡張はそれぞれ擬音語に組み込まれたフレーム要素の違いを反映していると考えられる。

フレーム 拡張先	外部原因音	内部原因音	声
音源（5.3.1 節）	○ (5-14)	○ (5-15)	○ (5-16)
類別詞（5.3.2 節）	○ (5-18)	○ (5-19)	○ (5-20)

様態（5.3.3 節）	○ (5-21)	○ (5-22) 、 (5-23)	○ (5-24)
心理状態（5.3.4 節）	○ (5-25) 、 (5-26)	○ (5-27)、 (5-28)	?? (5-29)
動作（5.3.5 節）	○ (5-30) 、 (5-31)	○ (5-32)	○ (5-33) 、 (5-34)
音源の状態（5.3.6 節）	○ (5-35) ～ (5-37)		
強意語（5.3.7 節）	○ (5-38) ～ (5-40)		

表 5-17 各フレームとその拡張先のまとめ（○＝拡張有、空欄＝拡張無、??＝誤用と考えられるもの）

2.4 節で述べたように、タイ語では有生であるか否かによって音と声を区別するものがなく、いずれも *sǎŋ* として一括して捉えられている。しかし、同じ *sǎŋ* であるものの、拡張先のパターンに違いが確認できるということは、意味拡張がタイ語固有の習慣に基づくのではなく、言語を超えた知識構造（フレーム構造）に基づいているものであると考えられる。

6. 結論

本研究は認知意味論の観点からタイ語にみられる擬音語の意味拡張を考察するのを試みたものである。本章では1.2節で提示した研究の目的に基づき、本研究を通して得られた結果を簡略に論じる。その後、本研究で十分に検討できなかった点を今後の課題として示す。

本研究でタイ語における擬音語を考察した上で、主に以下の三点を主張する。

①タイ語の擬音語の意味や使用実態を調査したことを通して、タイ語の擬音語においても日本語、中国語、韓国語、英語と同様に意味拡張が起きている。

②タイ語では音源、類別詞、様態、心理状態、動作、音源の状態、強意語という7つの擬音語の拡張パターンが確認できた。また、タイ語の擬音語を游（2014）の枠組みに基づき分類することによって、それぞれの擬音語のタイプ（外部原因音、内部原因音、声）ごとにそれぞれ異なる拡張パターンを確認することができる。

音源、類別詞、様態、心理状態、動作という拡張先については、各フレームの擬音語の間に微妙な差異がみられるものの、全てのフレームからの拡張が可能である。一方、予期的認知・痕跡的認知に基づいた音源の状態、強意語の拡張パターンは、働きかけや結果を想定する外部原因音にしか確認されない。このように、フレームによって意味拡張の行き先のパターンに差異がみられることから、擬音語の意味拡張は特定の言語による分類に基づくのではなく、それぞれの擬音語のもつ背景知識構造（フレーム構造）に基づいて生じていることが示唆される。

③Akita（2013）と游（2014）によって提唱された擬音語の意味拡張の起こりやすさを規定する要因である文法機能、意味的特定性、事象構造の複雑さを用いて、タイ語の擬音語の意味拡張を分析した結果、全ての要因がタイ語に適用できないところがあることがわかる。タイ語の擬音語は一般的に副詞・引用用法をもっているため、Akita（2013）の文法機能の要因で説明することができない。

一方、意味拡張は基本義に含まれる情報を利用することによって起きるものであるため、音源が特定できることによって意味拡張が生じる擬音語が一部ある（とりわけ、フレーム内要素の少なく、意味拡張に利用できる要素が限られた内部原因音・声では、音源の意味的特定が意味拡張に関与していると考えられる）。しかし、フレーム構造が複雑であり、フレーム内要素の多い外部原因音は音源の意味的特定性だけでは、統括的に説明を与えることができない。

また、事象構造の複雑さについては、外部原因音の擬音語は、声より有意に多く拡張できることが確認できた。しかし、外部原因音と内部原因音の間には有意な差異がみられないのである。②で提示したようにフレームによる分類はそれぞれの拡張パターンを見出す上で有用ではあるが、タイ語の擬音語の意味拡張を十分に検討するために、他の要因と合わせて検討する必要がある。

さらに、以上の三つの要因の他に、タイ語の擬音語の意味拡張に関与する可能性を二つ考えられる。一つ目は、様態などの他のフレーム要素の意味的特定性である。オノマトペは事象の複数の側面を同時に描写するものであるため、音源だけでなく擬音語のフレームに組み込まれた他の要素の特定性にも着目して、検討する必要があると考えられる。二つ目は、孤立語の品詞・語形態的特徴の柔軟性と関与していると考えられる。タイ語の擬音語は語形態的特徴による制約を受けず、さまざまな文法的環境に出現することができるため、さまざまな意味を担うことが可能となっているのである。

一方、残された課題は多い。ここで今後の課題として3点を提示する。一つ目は、本稿の5.2節で擬音語の様態などの指定について言及したものの、全ての擬音語適用できるような形で十分な検討を行ったとはいえない。また、様態の指定についての明確な判断基準や、体系的な調査方法を設定していなかった。今後、様態の指定の有無や程度、また客観的に判断できる基準を検討する必要がある。

二つ目は、本稿は意味拡張が起らなかった擬音語について十分な考察を行っていないことである。5.2節では、音韻形態的に一般語彙から逸脱度合いの高い擬音語は、意味拡張が起こりにくい可能性について論じたが、この点について十分に分析を行っていなかった。また、擬音語の間での有標性・逸脱性の度合いはどのような基準によって区別すれば良いのか、まだ明確な調査方法を設定していない。さらに、本研究では各擬音語に意味拡張が起きたか否かを注目しているが、その拡張の度合いを問題としていなかった。例えば、二つの拡張義をもつ擬音語と五つの拡張義をもつ擬音語の間に何か異なっている、どのような要因が考えられるのかについて、考察を行なっていなかった。

三つ目は、タイ語擬態語を特定し、擬態語の音韻形態的特徴やその意味を明らかにすることである。3節で示したように、擬音語に相当するものの名称 (sàthphótあるいは, khamliansianthammachâat) から音や声を模倣する擬音語しか想定していないことがわかるが、隅田 (2011) や Trongdee (2015) で取り上げられたように、タイ語には擬態語が存在しないわけではない。もっとも、本研究で示されたように

擬音語が擬態語として機能する事例が多くみられる。今後、擬態語の特有の性質を明確にした後、認知言語学の観点からその意味を考察したい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、大変多くの方々にお世話になりました。ここに全ての方々のお名前を記すことはできませんが、できる限り多くの方々への感謝の意を申し上げたいと思います。

はじめに指導教員として認知言語学の世界を切り拓いてくださり、また研究生の時から常に温かくご指導くださった野村益寛先生に心より深謝の意を表します。野村先生は研究の方向性がなかなか定まらず関心が迷走しがちな筆者に対して時間をかけて丁寧に相談に乗って、労力を惜しまず一步步研究の道をご指導くださいました。そのご指導のおかげで本稿を完成させることができました。また、常に言語学のおもしろさや考えたことのない新たな視点を示してくださったことで、毎週の授業とゼミの時間を心待ちする日々でした。さらに、本研究を着手するきっかけを与えてくださったのも野村先生でした。日本語や英語だけでなく筆者自身の母語であるタイ語を振り返り、母語の言語現象を問い直す視点をもてるようになったことは、筆者にとって今回の留学で最も大きな意味のある変化だと思っております。とりわけ、ご専門とは異なるタイ語に対しても常に的確、かつ鋭いご指摘を賜り、そのたびに言語学者としての深い洞察力を実感し、心から敬意を抱くようになりました。筆者自身も野村先生のように鋭い視点を備えた研究者になりたいと強く思うようになりました。本当にありがとうございました。

言語科学研究室の先生方々に深く感謝の意を表します。講義を通して言語学のさまざまな分野の魅力に触れる機会を得ることとともに、折々に非常に貴重なヒントを賜りました。また、発表会において有益なご指摘をいただいたおかげで、自身の研究に不十分な点に気づくことができ、改善を図ることができました。

学部時代からご指導くださったチューラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座の池谷清美先生に深く感謝申し上げます。日本への留学を希望した際に、卒業生である筆者の研究計画書内容の確認のお願いに快く応じてくださいました。池谷先生からのご指導がなければ、今回の留学を実現することができなかったと思います。また、日本に来た後も、常に気にかけて、穏やかな励ましのおことばをかけていただいたことにも心より感謝申し上げます。

言語科学研究室野村先生ゼミで出会った先輩・同輩・後輩にも深くお礼を申し上げたいと思います。池田拓誉氏、泉瞳氏、イリイナ・ポリーナ氏、王煦氏、甲田友菜氏、聶雨晨氏、中西史人氏、中村真衣佳氏、任馳氏、幸一尋氏と交流することを通して、母語話者では気づくことがなかった視点や有益なアドバイスをいただくことができ、本稿を改善することができました。皆さんが普段和やかに雑談を交わしつ

つも、自分の研究に対して真摯に向き合っている姿を見て、常に多くの刺激をいただいていた。良い研究仲間に恵まれたことをここに深く感謝いたします。また、「今夜は何を食べよう」のグループのメンバーである大山隆子氏、黄銘君氏、ジョン・ボウオン氏、費寧萱氏、フダー・クララ氏にも感謝したいと思います。食事を共にする中で研究の合間にリフレッシュすることができ、実り多い時間を過ごしました。

また、学部時代の交換留学の頃から親しくしてもらった吳芷芸氏と馬礼謙氏に感謝いたします。進学した大学院が異なりましたが、また北海道大学で再会できたことを大変嬉しく思っています。二人にいつも気にかけてもらい、美味しい料理を作ってもらいました。心より感謝いたします。

2年間研究に専念できるよう奨学金を提供してくださった東京海上各務記念財団の皆様に深く感謝いたします。同財団のご援助のおかげで、経済的な不自由なく留学生活を送ることができただけでなく、日本で生活するのに有益な助言を賜りました。ここに記してお礼申し上げます。

高校時代から筆者を見守り続けてくれた家族同然の友人である KITTIWATTANAKUL Saranya 氏、PIKUNSAWAT Natta 氏、RAKSASKULWONG Malinee 氏、RUAMWONG Shama 氏、THUMMAWAN Salila 氏に心より感謝申し上げます。皆さんとの他愛のない会話は心安らぐ時間をもたらしてくれました。皆さんと過ごす時間は筆者にとってかけがえのないものであり、異国での生活を送る上で大きな精神的な支えとなりました。

最後に、いつも励ましてくれた最愛の家族に心より感謝いたします。筆者自身以上に筆者の可能性を信じ常に勇気づけてくれた両親、喜びや悲しみを分かち合いながら一緒に成長してきた兄、気にかけて常に手紙を寄せてくれた祖父母、温かいことばをかけてくれた伯叔父母、癒しを与えてくれた愛犬に深く感謝いたします。また、直接感謝を伝えることはできませんが、亡き父方の祖父にも本稿を捧げたいと思います。家族の応援がなければここまで頑張ることができなかつたでしょう。本当にありがとうございます。

参考文献

- 秋田喜美. (2008) 「音象徴語の『範疇化問題』への一つの答え：田守・スコウラップ（1999）へのリプライ」 『日本認知言語学会論文集』 8, 428-438
- Akita, K. (2009a) The acquisition of the constraints on mimetic verbs in Japanese and Korean. *Japanese/Korean Linguistics* 16, ed. by Y. Takubo, T. Kinuhata, S. Grzelak, and K. Nagai, 163-177, CA: CSLI Publications, Stanford.
- Akita, K. (2009b) *A Grammar of Sound-Symbolic Words in Japanese: Theoretical Approaches to Iconic and Lexical Properties of Mimetic*. [Doctoral dissertation, Kobe University].
- Akita, K. (2013) Constraints on the semantic extension of onomatopoeia. *The Public Journal* 5, 21-37.
- 秋田喜美 (2017) 「外国語にもオノマトペはあるの？」 『オノマトペの謎：ピカチュウからモフモフまで』 窪菌晴夫, 65-85, 岩波書店, 東京.
- 秋田喜美 (2021) 「日本語のオノマトペと言語類型論」 『日本語研究と言語理論から見た言語類型論』, 窪菌晴夫・野田尚史・ブラシャント＝パルデシ・松本曜, 49-73, 開拓社, 東京.
- 秋田喜美 (2022) 「オノマトペのファセット性」 『フレーム意味論の貢献：動詞とその周辺』, 松本曜・小原京子, 213-227, 開拓社, 東京.
- 秋田喜美 (近刊) 「オノマトペの多感覚性と『共感覚的比喩』」 『メタファー研究』 3, xxx-xxx, ひつじ書房, 東京.
- Aroonmanakun, W. (2007) Creating the Thai National Corpus. *Manusya, Journal of Humanities* 10(3), 4-17.
- Croft, W. & Cruse, D. A. (2004) *Cognitive Linguistics*, Cambridge University, Cambridge.
- Diffloth, G. (1972) Notes on Expressive Meaning. In *Papers from the Eighth Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, ed. by P. M. Peranteau, J. N. Levi, and G. C. Phares, 440-447, Chicago Linguistic Society, Chicago.
- Dingemanse, M. (2011) Ezra Pound among the Mawu: Ideophones and iconicity in Siwu. *Iconicity in Language and Literature* 7, ed. by O. Fischer and C. Ljungberg, 39-54, John Benjamins, Amsterdam.
- Dingemanse, M. (2019) ‘Ideophone’ as a comparative concept. *Ideophones, Mimetics, and Expressives*, ed. by K. Akita and P. Pardeshi, 13-33, John Benjamins, Amsterdam.
- Fillmore, C. J. (1982) Frame Semantics. *Linguistics in the Morning Calm*, ed. by The Linguistics of Korea, 111-137,

- Hanshin Publishing, Seoul.
- 浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトペ 音象徴と構造』くろしお出版, 東京.
- Hanpanich, S. (1993) *The Statistical Distribution of Consonants, Vowels and Tones within Thai Syllable Existing as Words and Word Constituents*. [Master's thesis, ChulalongkornUniversity].<https://doi.org/10.58837/chula.the.1993.804>
- 葉書辰 (2024) 「「硬さ」を表すオノマトペの意味拡張プロセスと意味ネットワークの構築—「ガチガチ」を例に一」『ことば』45, 57-74
- 井上加寿子 (2010) 『オノマトペのレトリック：擬音語・擬態語表現の創発に関する認知言語学的研究』大阪大学博士論文.
- 井上加寿子 (2013) 「オノマトペの多義性と創造性」『オノマトペ研究の射程—近づく音と意味』篠原和子・宇野良子, 203-216. ひつじ書房, 東京.
- Kita, S. (2001) Semantic schism and interpretive integration in Japanese sentences with a mimetic: A reply to Tsujimura. *Linguistics* 39(2), 419-454.
- Klamer, M. (2001) Expressive and iconicity in the lexical. *Ideophones*, ed. by Friedrich K. Erhard Voeltz and Christa Kilian-Hatz, 165-182, John Benjamins, Amsterdam.
- 国広哲弥 (1985) 「認知と言語表現」『国語研究』88, 1-19
- Lakoff, G. & Johnson, M. (1980) The Metaphorical Structure of the Human Conceptual System. *Cognitive Science* 4, 195-208.
- Lakoff, G. (1987) Cognitive models and prototype theory. Concepts and conceptual development: Ecological and intellectual factors in categorization, ed. by U. Neisser, 63-100, Cambridge University Press, Cambridge.
- Langacker, R. W. (1993) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4(1), 1-38.
- 呂佳蓉 (2003) 「オノマトペの多義性に関するスキーマ的分析」『言語科学論集』9, 83-117
- 呂佳蓉 (2004) 「英語のオノマトペの象徴メカニズム」『言語科学論集』10, 99-126
- Luksaneeyanawin, S. (1982) Khamsamutchanawilat Iik Ngae Nueng Khong Rabop Siang Lae Rabop Khwammai Nai Phasa Thai, *Journal of Letters* 14(1), 11-34.
- 三上京子 (2006) 「日本語の擬音語・擬態語における意味の拡張: 痕跡的認知・予期的認知の観点から」『日語日文学研究』57, 199-217

- 峰岸真琴 (2000) 「類型論から見た文法理論」 『言語研究』 117, 101-127
- 粂山洋介 (2021) 『例解 日本語の多義語研究—認知言語学の視点から』 大修館書店, 東京.
- 武藤彩加 (2003) 「味ことばの擬音語・擬態語—食のオノマトペ」 『ことばは味を超える—美味しい表現の探求』 瀬戸賢一, 241-300, 海鳴社, 東京.
- 仲本康一郎・小谷克則・井佐原均 (2004) 「予期的認知と形容表現不安に基づく状況把握」 『日本認知言語学会論文集』 4, 34-44
- Naksakul, K. (1973) Baep Some Soi Nai Phasa Thai Lae Khamen, *Krong Phasa Lae Wannakam*, 81-125.
- Naksakul, K. (1977) *Rabop Siang Phasa Thai*. Chulalongkorn University Press, Bangkok.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』 東京大学出版会, 東京.
- Okada, S. (2013) (Ir)regularity of conceptual expansions in adjunct nominals. *Osaka University Papers in English Linguistics* 16, 161-185.
- Phanthumetha, N. (1982) *Waiyakon Phasa Thai*. Chulalongkorn University Press, Bangkok.
- Phanthumetha, N. (1992) Khamliansiang. *Paetsip Pii Song Sattrachan Nom Sirasa*, 45-54, Amarin Printing Group, Bangkok.
- Phongpheng, V. (2004) *The Language of Imaginary in King Chulalongkorn's Klai Ban*. [Master's thesis, Chulalongkorn University]. <https://doi.org/10.58837/CHULA.THE.2004.1871>
- Prasithrathsint, A. (2000) Adjectives as verbs in Thai, *Linguistic Typology* 4(2), 251-272.
- Prasithrathsint, A. (2010) *Parts of speech in Thai: A syntactic analysis*. Chulalongkorn University Press, Bangkok.
- Saengkrachang, C. (1973) Phasa Chak Khwamrusuek, *Krong Phasa Lae Wannakam*, 13-31.
- 瀬戸賢一 (2005) 『よくわかる比喩』 研究社, 東京.
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」 『メタファー研究の最前線』 楠見孝, 31-61, ひつじ書房, 東京.
- Srisawat, S. (2024) *Sunthariyaphap Nai Phasa Thai*. Udon Thani Rajabhat University Press, Udon Thani.
- 隅田敦子 (2011) 「オノマトペにみるタイ語の音象徴—声調に注目して—」 『タイ研究』 11, 107-203
- Supanvanit, I. (1984) *Development of Thai scripts and orthography*. Chulalongkorn University Press, Bangkok.
- Surachit, L. (2014) *A Comparative Study of Onomatopoeia in Chinese and Thai*. [Master's thesis, Chulalongkorn University]. <https://digital.car.chula.ac.th/chulaetd/20228>

- 武田みゆき (2001) 「中国語にみる共感覚比喩についての一考察」 『ことばの科学』 14, 107-118
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics*, Vol. I, MA: MIT Press, Cambridge.
- 田守育啓・スコウラップ・ローレンス (1999) 『オノマトペ：形態と意味』 くろしお出版, 東京.
- Thonglor, K. (2007) *Lak Phasa Thai*. Ruamsarn, Bangkok.
- Trongdee, T. (2015) Naewthang Kan Wikhro Kham Ideophone Nai Phasa Laos Thin, *Journal of Liberal Arts, Upon Ratchathani University* 11(2), 181-207.
- Tuggy, D. (1993) Ambiguity, Polysemy, and Vagueness, *Cognitive Linguistics* 4(3), 273-290.
- Udomanisawat, A. (1983) Relation of Vowel Patternings and Meanings of Disyllabic Reduplicatives in Thai.
[Master's thesis, Chulalongkorn University]. <https://doi.org/10.58837/chula.the.1983.607>
- Upakit-silapasan, Phraya. (1922) *Lak Phasa Thai*. Thai Wattanaphanit, Bangkok.
- Williams, (1976) Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change, *Language* 52, 461-478.
- 游韋倫 (2014) 『日中両言語における擬音語の意味と意味拡張 ―フレーム意味論の観点からのアプローチ―』 神戸大学博士論文.

付録

ここで提示した擬音語は本研究の分析対象であり、Thai Royal Institute Dictionary (2011 Edition) と Matchon Dictionary (2017 Edition) に収録されている語彙である。なお、ここで記述する基本義は、上記の辞書の定義との一致しない場合がある。辞書の定義を参照しつつ、使用実態に基づいて得られた意味も補足する（辞書による記述の不十分さを補うためである）。以下の表では、○は「拡張有」、空欄は「拡張無」を表している。

擬音語	基本義	メトニミー拡張	メタファー拡張
krùap	硬いものや歯切れがよいものを噛み砕く音		
krûam	①硬い物体が強く接触する音 ②歯切れがよいものを噛み砕く音	○	
kròkkrèek	乾いた葉っぱのようなものが互いに接触する音		
kròt	①歯軋りの音 ②ネズミが木材をかじる音 ③骨をかじる音	○	
kròp	①（乾いた葉っぱなど）乾いたものの上を踏む音 ②脆くて乾いたものが折れたり、砕いたりする音 ③歯切れがよいものを噛み砕く音	○	
króp	①硬いものや歯切れがよいものを噛み砕く音 ②脆くて乾いたものが折れたり、砕いたりする音 ③関節が鳴る音		
kríj	①鈴の音 ②電話の着信音の音	○	
kríit	甲高い高い悲鳴の声	○	
kraaw	①大量のものが落ち転がる音 ②一斉に拍手する音	○	
kaa	カラスの鳴く声	○	
kùkkàk	ものが接触する音		○
kúkkík・ kúkkúkkíkík	小さい金属物が接触する音	○	○
kùpkàp	馬の足音		
krùkkrûu	鳩の鳴く声		
krùut	重い物が地面をこすりながら引きずられる音	○	
krùp・krùpkrùp	歯応えのあるものを噛む音	○	
kóókkéek・ kóókkóókkéekkéek	ガラスのものと金属物が軽く接触する音		○

kachùkkachàk・krachùkkachàk	列車が走る音	○	○
katáak・kratáak	雌の鶏の鳴く声		
katóok	雄の鶏の鳴く声		
kâapkâap	アヒルの鳴く声		
kík・krik・kík・krik	固体がぶつかり合う音	○	
kùkkùk	固体がぶつかり合う音	○	○
kuŋ・kuŋkaŋ	車輪が道に接触する音		
krêek	①乾いた物体を引き搔く時に生じた音 ②乾いたものが摩擦した時に生じた音	○	
kéek	固体が接触する音	○	
kròok	液体が穴に流れ込む音	○	
krooŋ	固体が衝突し合う音		
khùk・khùkkhùk・khlùk・khlùkkhlùk	咳の音		
khlùkkhlàk	固体が容器の中で転がる音	○	○
khwàp	(体罰に使われる)棒が振られた時に生じた空気を切り裂く音	○	
khàkkhàk	笑い声		
khàak	唾を吐く音	○	
khik・khikkhik・khikkhik	ひそかに笑う声		
khlòok・khlòokkhlòok①	咳の音	○	
khlòok②	臼と杵で叩いた音		
khrook	いびきの音		
khruut①	重い物が地面をこすりながら引きずられる音	○	
khruut②	いびきの音		
khruun①	大きい声で笑う声		
khruun②	雷の音		
khruun③	物体が崩壊した時に生じた音	○	
khlàk・khlàkkhlàk	沸騰の音・煮え立つ音	○	
khwàak	衣類や紙などの薄い物体が破れた時に生じた音	○	
khùk・khùkkhùk①	嵐の音		
khùk・khùkkhùk②	トラックなどの車が走る音	○	
khreêk・khreêk khrâak	乾いた固体同士が擦り合って生じた音		
khweêk	衣類や紙などの薄い物体が破れた時に生じた音		
khrook	便器の水が流れる時に生じた音	○	
khrookkhrâak	お腹が鳴る音		

khroom・khroomkhraam	強い働きかけによって生じた音 (衝突の音など) (5-7) を参照)	○	○
ḡâm・ḡâmḡâm	犬が何かを食べる音	○	
ḡum	小声で愚痴する声		
ḡumḡam	話したり愚痴をこぼしたりする小さな声	○	
ḡeḡ・ḡeḡḡeḡ	子どもが声をあげて泣く声	○	
ḡêḡ・ḡêḡḡêḡ	犬が威嚇する時に発した声		
ḡéew	子猫の鳴き声	○	○
cúap	①液体を吸い込む時に生じた音 ②接吻した時に生じる音	○	
côók・côókôók	液体が流れる音		
côók①	雄の鶏が痛みを感じた時に発した鳴き声	○	
côók②・côókôók	①液体が静かに流れる音 ②お腹が鳴る音	○	
côókêék	大勢の人が騒つく声	○	
côom	物体が水に落ちた時に生じた		○
côocēe	子どもがしゃべる声	○	
câkcâk	強い雨音	○	
cú?	相手を黙らせたり、声量を抑えさせたりするために発する声	○	
cúkkruu	鳩の鳴く声		
cũḡcĩḡ・kracũḡkracĩḡ	小声で可愛らしく話し合う声	○	
cúp	接吻した時に生じる音	○	○
cúut・cúutcúut	下痢の音	○	
cíaw・cíawcáaw	騒つく声 (人間、猿、鳥など)	○	
chòòtchòòt	流暢に話す声 (言い返す場合や叱る場合が多い)	○	
chàp・chàpchàp	剣やはさみなどの鋭い道具で物体を切る音	○	○
chàa	①調理する際に油が弾ける音 ② (滝や海で) 水が弾ける音	○	
chàat	平手打ちなど手で何かを強く叩く音	○	
chĩw	①風が吹く音 ②乗り物が速く走る時に生じた音 (乗り物が空気を切り裂く音)	○	
chii	調理する際に油が弾ける音	○	
chùu	多くの蠅がまとわりつく音	○	
chùut・krachùut	液体が勢いよく噴出した時に生じた音	○	
chêê①	高温に熱せられた金属などを水に浸した時に生じた音		
chêê②	ぱらつく雨音		
ché?	①引き金を引く音	○	

	②ライターをつける音 ③カメラのシャッター音		
sâa①	①炭酸が弾ける音 ②大量の液体が流れる音	○	○
sâa②	テレビなどの砂嵐の音		
síksík・krasíkkrasík	弱々しく泣く声	○	
siit	(辛いものを食べた時あるいは痛みを感じた時など) 口をすすする音	○	
sûu・sûusûu	①大量の液体が流れる時に生じた音 ②強い雨の音	○	○
sûusâa	①雨音 ②波の音		○
súut・súutsáat	①お茶やスープなどの液体を吸る時に生じた音 ②辛いものを食べた時に(強い刺激を感じて) 口を吸るときに生じた音 ③鼻水をすすする音	○	
sêet	人が騒つく声(騒がしすぎて何を話しているのか聞き取れないほど)	○	
tóok・tóoktóok①	ある種の鶏が発する鳴き声	○	
tóok・tóoktóok②	ある種のドラムを叩いた時に生じた音	○	
tóom	重い塊が水に落下した時に生じた音		○
taŋ	重い物体が地面に落ちた時に生じた音		
tíktík	時計の針の音		
tĩŋ・tĩŋtĩŋ	水滴が一粒ずつ落ちた音	○	
tùuk・tùuktùuk・ tùuktàk・tùuktàk	①心臓の鼓動の音 ②物体が接触した時に生じた音	○	
tuŋ・tuŋtuŋ	重い物体が地面に接触・落下した時に生じた音	○	
tuŋtaŋ	重い物体同士が何回も(落下など) 接触した時に生じた音	○	
tùptùp	①固体同士が接触した時に生じた音(落下の場合が多い) ②殴った・打った音	○	
tùp・tùptùp	①脈が打った音 ②固体同士が接触した時に生じた音(落下の場合が多い)	○	○
tùptáp・tuŋtap	殴ったり、打ったりする時に生じた音	○	
tùm	小さくて重い物体が水に落ちた時に生じた音	○	
tùmtùmtòm	緊張などで心臓が激しく鼓動する音	○	

tuum・tuumtuum	①物体が激しく衝突した音 ②衝撃の音（爆発など） ③物体が水に勢いよく落下した音	○	
təʔtəʔ・ təʔtəʔtəʔtəʔ・ kratəʔkratəʔ	赤ちゃんの頼りない足音	○	○
thŭj	唾を吐いた音	○	
bùk・bùkbùk・ bùk・bùkbùk	手で体を叩いた音	○	
buum・bùum	爆弾の爆発の音	○	
bũuu・brũuu	（船など）乗り物のエンジンの回 転音	○	○
bŭj	水が泡立った時に生じた音	○	
bũm	石などの物体が水に落ちた時に生 じた音	○	
príaj	①落雷の音 ②銃を撃った音や ③殴打の音 ④衝突の音	○	○
prêen・prêenprêen・ prêen・prêenprêen・ prêeprêen・prêenprêe	象の鳴き声		
príit・piit・pít	穴から液体が吹き出した時に生じ た音（口から水を吐き出した時の 音など）	○	○
prúut・prúutpráat	下痢の音	○	
pǝom	物体が水に落ちた時に生じた音		○
pǝompǝem	手や足などで水面を叩く音	○	
paŋ	固体が強く接触した時に生じた 音・衝撃の音	○	○
pàp、pâp	殴った時に生じた音	○	
póok	硬い物体が接触した時に生じた音	○	
pâat	屁の音		
pâap・pâap	強く叩いた音	○	○
páaw	猫が痛みを感じた時に発した声		
púuun・púuunpúuun	車のクラクションの音	○	○
puŋ	固体同士が強く衝突した音	○	
puŋpaŋ	固体同士が強く衝突した音	○	
pŭj	強く張られたロープなどが切れた 音	○	
pùk	固体同士が接触した音		
pùt	煮える音	○	○
pùppàp・pùppáp	焦って落ち着きなく行動する際に 生じる音（固体同士の接触に生じ る音）	○	
pũm	物体が水に落下した時に生じた音		
péek	硬い物体同士が衝突した音	○	
péen	固体が当たった時の音	○	

pria?	①電気などが激しく音を立てて火花を散らす音 ②ものが割れたり破れたりする音	○	
pɔ?	①指の関節などを鳴らす音 ②木材の物体を叩いた時生じた音	○	
pó?	①指の関節などを鳴らす音 ②枝などが折れた音		
pɔ?pè?	①雨や露などの水滴がまばらに落ちた音 ②まばらに拍手する音	○	○
pɔɔp	ある種の鹿が発する鳴き声		
piaw①	満足を表す時に発した口笛の声		
piaw②	矢が空気を切り裂く音	○	
pɛɛŋ	缶を叩いた音		
péet・péen	車のクラクションの音		
plɛɛp・plɛɛpplɛɛp・ plɛɛp・plɛɛpplɛɛp	電気などが激しく音を立てて火花を散らす音	○	○
péew	猫の鳴き声		
pè?	①固体同士が軽く接触する時に生じた音 ②拍手の音	○	
pòok・póok	硬い物体同士がぶつかり合う音	○	
phlɔŋ	物が壺に落ちた時の音		
phlúa?	①慌てて出入りする（移動する）時に生じる音 ②物を勢いよく投げかける音	○	
phlùŋ	重い物体が地面に落下した音	○	
phlù?	柔らかくて弾力のある物体が地面に落下した音		
phlũŋ	①物が水に落ちた音 ②何かが飛び出した音	○	
phàp・phàpphàp	叩いた音	○	
phúa?	衝撃の音（叩く・殴る）・ドアを激しく引っ張る音	○	
phãaŋ	手で物を叩いた音	○	
phlè?・phè?	とろみのあるもの・水分の多いものが地面に落下した時に生じた音	○	
phò?・phò?phò?①	涙などの水滴が地面に落下した音	○	
phò?・phò?phò?②	①枝が折れた時の音 ②指の関節を鳴らした音	○	
phlèpphlèp	舌を出して舐める時に生じた音	○	○
phlè?	とろみのあるもの・水分の多いものが地面に落下した時に生じた音	○	
phlò?	膨らんでいるもの（容器のようなもの）が一瞬にはげしく破裂した時に生じた音	○	
phrúat	口から水を吹き出した音	○	○

phrôot・phrôotphrôot	液体が空気と混ざり合って、狭い穴や泥の中から吹き出した音	○	
phrâat	身をよじって暴れた時に生じた音	○	
phrûut	①ブレーキをかける音 ②吐息を吐き出した時の音	○	
phlâk	①物体が地面に落下した音 ②殴ったり打ったりする時に生じた音 ③水を注ぐときに水がガラスの底に強く接触した音	○	
phûp・phûpphâp	(自己の身体(・物体)同士が触れ合って生じた音) ①羽ばたく音 ②はためく音 ③踏み鳴らした音		○
fôo・fôo	猫や蛇が威嚇する際に発する声		
fôot	頬にキスする時に生じた音	○	
fît	①匂いを嗅ぐ時の音 ②くしゃみの音	○	
fii	空気を詰めていたところから空気が漏れる音		
fútât	鼻つまりなど息の流れが悪い時の音	○	
fûutfâat	①吐息の音 ②鼻つまりなど息の流れが悪い時の音	○	
fûp	矢や弾丸などが空気を切り裂いた音	○	
fûut・fûutfâat	息を吐き出した音		
fûtfît	①鼻がムズムズした時に生じた音 ②何かを嗅ぐ時に生じた音	○	
fûu	①息を吐き出す音 ②炭酸が弾ける音	○	
fêe	マッチを擦って火がついた音		
muj	コングを叩いた時に生じた音		
míaw	猫の鳴き声		
jeejee	①泣き声 ②飲声		
jéew・jéewjéew	大声を出して騒ぐ声(他人に迷惑をかけるうるさい声)	○	
wâak・wâak	驚いた時や怒った時に発する大きい声・叱る声	○	
wiit	悲鳴・叫びごえ	○	
wúu	呼ぶかけ・応答の際に発する大きい声		
wée・?uwée	赤ちゃんの泣き声・産声	○	
sûap・sûapsûap	人や動物が葉や草むらなどを踏みつけた際に生じる音	○	○

ḡòḡḡ	コングを叩いた時に生じた音		○
ḡàaw	発情期の雄の猫が発する求愛の声		○
ḡàaḡ	童を叩いた時の生じた音		
ḡĩḡḡĩḡ	犬や人間が痛みや苦しみを感ずる時に発する泣き声		
ḡũḡḡĩḡ・ ḡũḡḡũḡḡĩḡḡĩḡ	小声で話し合う声	○	
nàp	粘りのあるものを引っ張る時に生じた音	○	
nùp・nùpnùp	強くくっついてあるものを引き剥がす時に生じた音	○	
jàp・jàpjàp	音を立てて噛む音・咀嚼の音	○	
riḡ	蟬に近い虫の鳴き声		
wóḡ	サイレンの音	○	
wòḡt	あくびの音	○	
wii	小蠅の飛ぶ音	○	
wiit①	ホイッスルや汽笛などの音	○	
wii②	女性の悲鳴・叫び声	○	
wũuu	固体が空気を切って移動する（飛ぶ）音	○	
wùut	汽笛の音	○	
hùḡ?・hùḡ?hùḡ?	喉の奥で笑う声		
hũḡ・hũḡhũḡ①	コングを叩いた時に生じた音		
hũḡ・hũḡhũḡ②	蜂・マルハナバチ類が飛ぶ音	○	
ḡèeḡ	鐘を叩いた時に生じた音		
mè?	液体が落下して地面に接触した時に生じた音	○	
wěe	甲高い声で怒鳴った声	○	
wè?	今にも吐きそうなほど嫌悪感を示すために発する声	○	
hè?	仕方なく笑う声	○	
mĩaw	猫の鳴き声	○	
hòḡ	①大勢の人の歓声 ②不満を表すために野次を飛ばした声	○	
?ũak	嘔吐の音	○	
?òḡt・?òḡt?òḡt	チャイム・呼び鈴の音	○	
?óḡt?éet・ ?óḡt?óḡt?éet?éet	ドアが開閉した時に生じた軋む音		
?óḡ?éé・kra?óḡkra?éé	赤ちゃんが喃語を発する時の声	○	
?āk・?āk?āk・?ák・ ?ák?ák	水などを勢いよく、むさぼるように飲む音	○	
?iḡ	子犬が痛みを感じた時に発する鳴き声		
?iit	ネズミの鳴き声		
?ùk・?ùk・ ?ùk?ùk	水を飲み込む音	○	

ʔùkʔàk・ ʔùkʔùkʔàkʔàk・ kraʔùkkraʔàk	打ったり殴ったりする時の音	○	
ʔúkʔúk	しゃくりの音		
ʔûʔîi	くぐもってはっきりしない話し声	○	
ʔûʔîi	胡弓に似たタイの擦弦楽器を引いた時に生じた音		
ʔúut	豚の鳴き声		
ʔëɲ	犬が痛みを感じた時に発する鳴き声		
ʔiat・ʔiat	固体同士が擦り合っている時に生じた音	○	
ʔët・ʔëtʔët・ ʔét・ʔétʔét	ドアが開閉した時に生じた軋む音		
ʔòok・ʔòokʔâak	嘔吐の音	○	
ʔòok	鶏の鳴き声		
háak・hákhák	しゃくりをあげて泣いた声	○	
haa	笑い声	○	
hîi	馬の鳴き声		
húthát	怒った時に吐いた息の音	○	
hûm	動物が威嚇する際に発する声	○	○
húuutháat	息切れ・喘息の音	○	
huuu・huuuhuuu	泣き声		
hee	大勢の人の歓声	○	
húak・húakhúak	呼吸・吐息の音	○	
hèe	犬が威嚇する時に発する声	○	
hêek・hêekhêek	息切れの時の音	○	
hoo・hoohoo	大号泣の音	○	
hòok①	虎、犬、ゴリラなどの野獣が威嚇する時に発する声		
hòok②	液体の料理を大きく啜る音	○	
hòon・hòonhòon・ hóon・hóonhóon	犬の鳴き声		